

春抄 英對 暖語 卷之十二 梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲永春 水著

第二十三回

昔松葉館の瀬川は美麗にて孝女なるのみかは風流にしてまた勇氣をかね後に悟道を得て佛門に入再法庵といふ小庵をかまへしが其壁に多くの歌を書つけて自他のいましめとなししが其身の邪淫戒を業のごとくせし昔をとがめて笑ふ人ありしかば

池水に夜な／＼影はうつれども

水もにござらず月もけがれず

瀬川

右のごとくに詠みて答へしかば笑ひし人の恥て感伏したりしとぞされば閨房の秀とて婦人ながらも男子にまさる決斷の才智ある者今も猶なしとはいふべからず彼お柳は文次郎の送りし文を宗次郎に押ひらかれ少し面目なき様なれどもまた隠すべき由もなければまづ宗次郎の言葉待て臨機應變の答へをせんと烟草をくゆらして傍に控へ居たりければ宗次郎は文を讀終て 宗「お柳この手紙の返事は何様する了簡だ りう「何様すると被仰ても私の勝手な返事が出来ず身てはありませんと涙を眼にうかめて溜息を吐て居る 宗「其身の自由になるならばマア何様せうと思案を仕て居るのだから遠慮なく心中を言て視な此手紙の旨趣では近頃は音信不通にして居た様子最初の約束を違へて今の身になつたのを恨む文體で見れば少しの聞ても勤の身殊に此手紙の人ゆるに身を沈めた事も聞て居るから此身が眼

をかすめて不義いたづらをしたといふ理もなしは當時でも勤の身實正の女房に仕て居ないからまんざら此身が恥をかきといふ程の事でもないから何様でも相談づくに仕て遣らうぢやアねへか りう「たとへ過た事にしてもマアお前様の氣に障る理で被御座ますのに左様お言ひなさいますと寔にモウ何とも申されませんほど面目なふございませすが何卒堪忍被成て 宗「いとまを呉るといふのか りう「エイ、エ何左様では有ません 宗「インニヤ左様だらふ又其心でも無理とは思はないから正直に言な、 りう「なんぼさばけて被仰ても自惚らしうございませすが私の様なものでもお前はんが慈愛と思つてお呉なさらなひければ廓を出して此様に樂をさせて置てもお呉なさりも仕まいし私もまた負惜みの様でございますけれども他のお方と違つて實家に居た時分から彼是と思つてお呉なさつたお前様だから心を入替て斯して世話をしてお貰ひ申したので有ますものヲ 宗「サア其所は分つて居るから此手紙を視ても愚智は言ないハナしかしお前は何か返事をせずはなるまいと思ふから何様せうといふ了簡だと聞のだけはナ りう「サア其様に被仰から恩を忘れ様な心と思し召すかは知れませんが今私の心を白地に申て見ると實はお前様に堪忍して貰つて 宗「堪忍しろとは是限りにして文次の方へ遣つてくれろといふのだらうノ りう「ナニ左様してお貰ひ申たからといつて私の極本意といふのではありません理窟を言つて視ますと彼人の勝手身の不祥で問音信も久しくせず私には十分の憂苦勞をさせて今さら何も不足をいはれる道理はありませんが友達の來て咄しましたのを聞て視ますと段々の薄命で遠くの田舎まで流れ歩行て便りをする事も出来なひほどの難儀が續ひて命が保たのがまだしもの儂倅今此土地へ歸つて來て店を持より早く病氣付て友達の世話になるばかり看病する人もなくつて今日が今日に困つて居ますと聞てから正直は過た最初の約束や何かの事を思ひ出して慈愛そふて成ませんヨト堪らへず泪にむせかへれば宗次郎は勘辨して思案を定め 宗「惚た此方の勝手には少し否な心持だが能々考へて看ると女の身にとつては寔に仕にくい義理だらふ愚智をいへば此身をまんざらに思はなひからと口で言ても心中は元木に増るうら木なしといふのたらふと察しもするがマア斯して不自由



をさせない様にして置此身が方をいとまを貰つて一旦約束した男の難儀を見繼度といふ心は實に女の達引ともいふ仕方だと賞はするものゝ其始め振付られてさへ五度七度通つたほどの執心で今は朝夕此通り和合して居た此身がこゝろを俄にさつぱりと改めて今直にひまを遣るから些も早彼方へ往て遠慮なく介抱をして遣るがいゝしかし正直未練が残るぜ此美しくしい顔が見おさめだと思やア寔に鬱氣てならねトいはれてお柳は身をふるはせしがみ付てと思ふほど嬉しい男の心行こゝに至つて文次郎の在をかへつて恨みわび邪魔な様にもなる心今更宗次郎に離別は何より惜しき胸の中迷ひて前後正體なく涙にくれて居たりける

嗚呼宗次郎が言葉男らしくなき言方と笑はれるか又人情と推量したまふか只放心と讀たまはゞ決斷の悪き様なれども左にあらざ正直未練が残る此うつくしい顔が見納めかと思へば鬱氣とは女を蕩かす好男の極秘にて今離別女まで如斯かはひがらるゝ用心の一言を出せし事野暮に賞ていはゞ宗次郎は君子の風ある人と評すべきか

斯て宗次郎は下女の歸りしを幸ひに酒肴を調へてお柳に與へ又小遣の金も持合せたるを遣はしお柳の伯母呼びて家財迄を不殘與へてお柳にいとまを遣はせしは類ひまれなる男氣なり此時お柳は文次郎の事を深く心にわすれず活業居たる所へ友達の持來りし文といひ思ひ染たる男の大病こゝぞ兼ての實情の盡し所と覺悟を極め宗次郎の前を體よく違を貰はんとの底心にて在し折から丁度來りし宗次郎の情も深く意味を含みて違をくれたる大丈夫にさすが女の情なればその情あるはからひと言葉艶優に心亂れはなれともなくなりしかど早宗次郎は清潔切はなれたる挨拶して別れの盃をなしければ胸苦しきほど未練が發れど詮方なくもきを取直し宗次郎に恩義の禮を述べ涙をば止めけれどもせめて此夜を俄に立去おもむきを近所の者にも告跡にて宗次郎と其身の悪しき噂や評判をされまじき爲にかの友達のお勢お秋などを呼びて宗次郎の難有心を物語りていとま乞もなし度由にて其夜は此家にとどまりけるゆへ宗次郎は立派に別れて依をお柳は與面をかみしめて歎きを隠し見送りつゝさて友達のお柳をよび寄せ候に此家を仕舞伯母の許へ行

はなしより宗次郎の情深きはからひを涙ながらにはなしければせしやアそれではモウ明日は直に伯母さんの方へ行てお仕舞のかへ折角此様なに馴染だのにねへあきそしてマア宗さんの様な能且那といふは滅他になひヨ惜しい事たねへせしやアそして何所の國にか以前の情人が手紙をよこしたのを見て腹も立すにうつくしく違を呉れてその男を見繼て遣れなんぞと信切にいふ人が在ものかね寔に勿體ない様だはあきいつそ文さんとやらはモウ止にして宗さんの方に被成ナせしやアホ、左様もなるまひけれども私でもお秋さんでも宗さんとは知己になつて居るしお酒を同席に給たり何かして何様しても鼻負に仕度様だがお柳さんの心では最初に惚た男だから文さんとやらの方が能とお思ひかもし知れなひが今の咄しを聞て察と何様も宗さんの方が慈愛ねへあきエお柳さん文さんとやらに深い義理もおありだらうが宗さんの嬉しい心の所に免じて今までの通り斯してお出なせしやアよく考へて御覽よ今もお前の口からお咄しの様にやさしい男といふがモウ一人と在はしなひヨマア其文さんとやらは何様なやさしい好男か知らないが私ならば宗さんの方が何程かはいゝか十倍だと思ふは子なせならばお前が最初から情人の在のも承知で通つて振付られても腹を立す程過てお前が文を送つて呼べば又お前の所に通つて身儘になる様にしてお上で此様に樂にさせて置てから氣に障る事が出来てもやかましく言すに奇麗に離別て吳ながら未練がおこるの美麗貌の見納だのといふ愛敬を言て色氣があるかと思へば行儀よく大丈夫して別て正然お歸りぢやアないか私やア今お前がその咄しを被成の節聞ても涙がこぼれたはあきほんに惜しいお方だねへ私は宗さんの様な且那の世話になるのだと何様な情人でも離別て其人の世話になるはねへお勢さん左様ぢやアないかお柳さん必ず後悔被成てなひヨト異見も友の好身にて遠慮のないが頼母しけれ其後お柳は義理を強し彼文次郎の許へ尋ね行し所一時ばかり先に病死してはかなき體の中へ行合せ悲しくもまた悔しくて涙も出ず呆れしとぞ



第二十四回

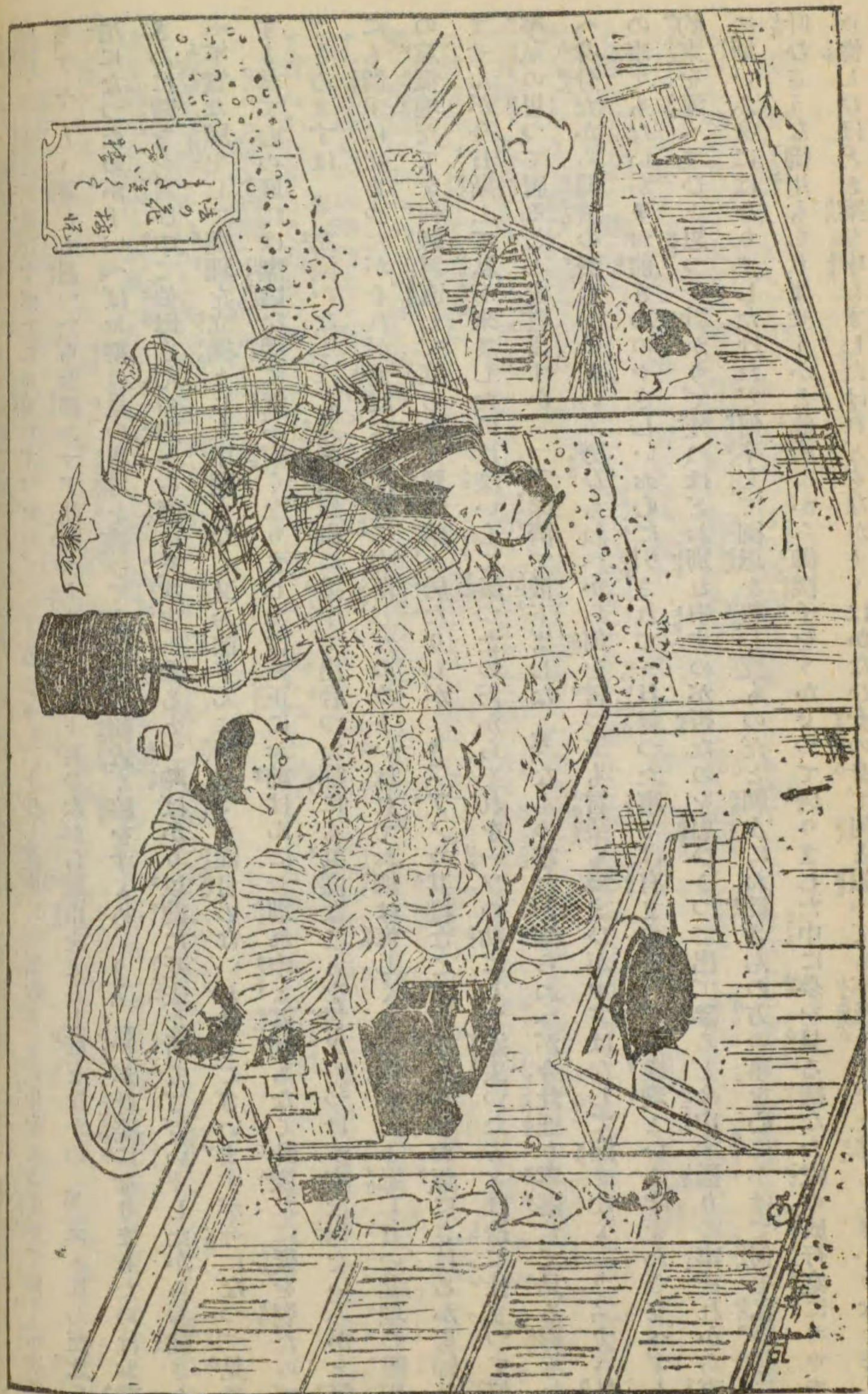
淵は瀬と變るたとへは有ながらも只一日の榮枯盛衰夢よりも猶はかなき身の上の浮沈みは古今に珍らしからぬ事ながらかの宗次郎は本家の損失借財其外の散財に卷添せられて竟に本店を立がたく本店と俱に分散し親族ちり／＼になり行て宗次郎はわづかに覺悟して遍立寺門前といふ所に店を借り知己の人の出會ざる用心なし當分何といふ活業もなく隠れ住昨日に變るはかなさは筆にも記れぬ形容なりしが斯なる事と兼てより推量りしにあらねどもお増は和歌町に唄女となりて思ひの外に全盛の達者ともてはやされ座敷のたゆる間なかりしゆる次第に都合よく引越行たる當座のみ宗次郎の見繼を貰ひしが其後には却てお増の方より宗次郎の方へ少々ながらも身上の助けとなる様に小遣を送り折節の音信さへも自身に行通ふことも稀にして今令落てはお増の心に一日も油斷のならぬ世帯氣質となり出精て宗次郎を養ふ所爲にのみかゝり日を過せしがいかなる因果の業なりけん母娘とも大病を煩ひ久しく宗次郎の方へ見繼事もならず宗次郎もその時節より胸を痛める持病發りてだん／＼に病ひ重り薬の手當も思ふに任せねば日に増して難澁し哀れさ言んかたもなく近所の情にやう／＼と一日々々を送りつゝ命のあるを悔むほどの困窮とこそなりにけり

花の雪雨に行成うらみかな

看官宗次郎のはかなきを見て本意なく思ひたまふらん去れど人界の喜怒哀楽定めがたきが常ぞかし奢りを慎みて災害を防ぐ心がけこそ專一なるべしさて宗次郎はまだ運の盡たるにあらざりしやさしたる薬も用ひしことなけれど又日をかさねて快かたにおもむきしがお増の方はいよ／＼重病となり中々人事をもわきまへぬほどなりと聞へしかば其身の病ひが治るに付ても途方にくれて居たりし所へ門の戸を音信て 女の聲「モン少し御免なさいませアノ宗次郎さんのお宅は此方のごさるますか 宗「ハイ此宅でござるますが誰人てござるます 女「左様被仰のは宗さんごさるます

ト戸を明け家内に入姿はいとも幽艶花の笑顔を御納戸の高祖頭巾に半分隠し上り口に腰をかけて 女「旦那お前様マア何様して急に此様なすがたにお成なすつたのでござるますへト少し涙聲にて言ながら頭巾をとる顔見て驚く宗次郎宗「ヤヤ／＼誰だと思つたらお柳かマア此間へ上るがいト言ひながら頭巾をとりし頭をながめ 宗「エ、なんだ比丘尼になつたのかトいへばお柳は足の塵埒を拂ひて宗次郎の側近く膝をすゝめ 宗「私「が此姿になりましたのはお前さんに暇をお貰ひ申て伯母さんの方から直に文次方へ参ると二時ばかり以前に死去た所でござりましたからお前さんへ不實な願をして義理を立様とした甲斐もなく又お前さんに對しても面目のないわけでございますが今になつて見ますと却て心の底には潔白な様に氣が安くなりましたは實正にお前はんにお別れ申と其間もなく此様な髪を剃たのでござるますは 宗「左様かなるほど其後伯母御に途中で出合つた節にも其様なことを言つたつけが實は何をいふかと氣にも留すに仕まつたがそれが實説ならば寔に力落したのウトいはれてお柳は悔しくも言説がたき過し日の義理の離別の意氣地だてを何様言直して宜らんと暫時俯き居たりしが 宗「アノウ其様なことを申たらばお氣にさほるかも知れませんが今日斯して私が來ましたのは深い心で参つたのだからそれを一ツの功にして過去つたことは捨て仕まつて何卒私のお思つて居ることを言ますからマア聞濟で被下ましたな 宗「なんの事だか知らねへが今此通り零落して見る影もねへ身分だから聞濟の濟ねへといふ勢ひもねへから何を言つても言葉も爲まひがマアはなして聞せな、 宗「ナニ外の事でもないが子お前さんのやさしいお心に引かれて一旦誓つた事では有ますけれども義理といふ字をわきまへずと約束を違へまひと思つた計かりて死ぬほどお別れ申すのが否なのを思ひきつて出て参ると今申す通りの事それから直に斯いふ身にはなりませうか何卒して御恩を報じ度ものだと朝夕にお前さんの方の事を心にかけて何ぞ私の身に叶ひさうな御用もありませうかと他所ながら御様子をかどつて居りました中に夢を見る様なお家の成行寔にモウモウ悔しひほどお案じ申しましたけれどもなかなかなひ女の身で何と思つても不及ことだと悲しくばかりなりまし





てせめては何卒お前様のお行衛をお尋ね申す寸志の御恩がへしをと諸方をおたづね申すやうくと知れまはしたはト辛  
 苦にやつれし男の顔を案入たる深切は自然と顔に顯はれて眼にもつ涙の露含み化粧はせねども生得の雪の肌艶々と  
 照そふ顔に黒髪をおろしてあれど何とやらまだ散うせぬ花の香のゆかしくこそは思はるれ 宗なるほど感じ入た氣性  
 の生得も有ものだ先達て文次が文をよこした節に此方も俠客らしく立派に暇は遣つたけれど詰る所は手前に一番狂言  
 をかゝれたのだいま／＼しい不實な女だと悔しく思ふこともあつたが今日斯して零落の此身をわざ／＼尋ねてくれる  
 のを考へて看ると惚たの慈愛のといふは早くいへば浮薄な詮穿てほんの表上の色戀で娘子どもの當座の花その素人の  
 所爲をばさらりと違へたお前の仕かた文次が難儀困窮を聞た節は何不足なくして置いて遣る此身を捨て零落た男へ達引  
 をする心で暇をとつて出て行つてその男が死ねば盛の花を無理にちらした其姿傾城奇人傳とやらにでも載せられる行跡  
 だが賞る事も出来ねへ今の身の上でお前に逢ふ外聞のわりい事サノ りうイ、エ左様ではござりませんヨお前さんの  
 御身上のわるくなつたのは御本店の所爲でござりませんと世間でも噂をして居ますはそしてマア情深ひお前さんだか  
 ら何かに付て御損の行事が重なつて今の様にお困りのでござりませんヨ 宗、左様思つて呉れば恥も少なひ様なものゝ先  
 一通の者はいくぢのねへとか働がなひとかいつてそしるのサ りう、他人は何と申ても私は一旦お前さんに苦界の年季  
 も扱てお貰ひ申てまた其上に我儘な願ひも聞ておもらひ申た大恩はたとへこれから後には死んでもものをいはずに仕ま  
 ひましてお跡を 甲まね事も出来て此姿をしましても糺して見れば不殘お前さんのお影でござりませんヨ何卒私の罪  
 ほろぼしにお否て有ませうけれど何ぞ相應な利益に立て恩がへしの出来ません様にして被下ましなト勤せし身といひな  
 がら約束したる男の方へ半途に行し行爲などを恥てさすがに惚たる情も言そゝくれし女の誠尼の姿はいとしけれ  
 宗、實に嬉しい心ざしだけれども此通り困窮の中だからなか／＼彼是と相談も出来ずまた獨身の淋しいのを朝夕氣を  
 付て貰へばそれに越た僥倖はなひけれども恥かしい事だが活業も出来なひ仕儀だから りう、ナニ手その困つてお在な







春色英對暖語五編序

惠の花の咲添しより彌々其香を高くせし。梅ごよみの四編揃。辰巳の園に色ぞ濃。三十冊の新案は。能も穿ちし狂訓亭。實に先生にあらざるば。奈何ぞ是迄作らんと。讀度ごとに人々の。評判有しは眼前。又もやこれに輪をかけて英對暖語と題せるは。同じ續の十五冊。全本四十五卷となる。是ぞ人情一家言。三都は勿論海内に噂を繼穗の梅の外題が。流行も書賣の爲永と。旨味を特より知るものは。花の御江戸に。虚名をうる。外に類なき。田分の水上。文盲の棟梁たる。

浅草堀多原の醉客

平亭主人銀鷄

春抄英對暖語卷之十三

梅ごよみ拾遺別傳

江戸爲永春水著

第二十五回

元享釋書に光明子沙門を戀慕して浴室に窺ひし事を記したり俗書には千人の垢を清め功德によつて阿闍佛を眼前に拜みたまひしと媚てしるす佛法のいつはり多き俗説をも信ずる者はお柳をもつて佛戒を破りし悪人と謗るならんかその野暮なる扁屈を捨て能人情に通じなばお柳を當世稀なる節義の美人と賞すべしされば宗次郎の難澁になりしをいとおしく思ひて尋ね來りし所存は譬色情の迷ひありといふとも利欲によらざる俠客の業くれくれも狭き了簡の評をすることなかれ既に其日も入はて、殊にちらく雪降出し寒は肌を切るが如し柳ヲヤク雪が降つて來ましたヨ柴左様ヨノウこまつたもんださぞ寒からふノマア火でも澤山おこして温せ様柳ナニ私がおこしますヨ柴それぢやア此爐の中へ炭を入れて臭なイヤ炭があればいゝが柳炭屋へ左様いつて來ませうか子柴エイヤ今更ア發すほどはあるヨ其中に炭屋が來るだらふトいふを聞いて柳ヲホ、夜炭屋が來ますかへ柴ヲ、ホンニ日が暮れたツけノ餘り放心て夜晝が分別らなくなつたアハ、柳ヲヤ何におうかれ被成てエ柴此かはいらしひ愛敬に放心てサ柳アレサ啞ばつかり何故愛敬がありますものか今日來ますのにも頭上が氣になつてなりましなだけども髪が生るまで來ずには居られませずか柴ナゼ柳なぜとお言だけれども病氣でお在なさるといふ事を聞きますとモウノ半時安堵ては居られませんから思ひ切つて駈出して來ましたけれどもさぞ見るも否て被爲在だらふと悲しくなりますはト恥かしそ











がわるひに付て今の宗さんが最初信切にしてお呉のを文さんへ義理を立て振付け切て居たけれども又あやまつて文を  
 上たらば直に來てお呉れはじめの事を咎めずに其晩からして私の身の事といつたら何一ツ不足のなひ様に氣を付て  
 其上年季も拔て十分世話をしてお呉の所へアノ文さんが田舎から歸つて來て宗さんのこしらへて私を置いてお呉の家  
 へ文さんが文をよこして其文を宗さんに見られた節の私が面目なさはマア何様な心もちだか今思ひ出しても總身へ汗  
 が出る様でありますヨ 伯なるほど左様だらふヨウ其時に宗さんの被成方といふものは勿體なひ事だからならふ事  
 ならば文さんの方は手切にしてと私がお前に異見をしたを聞なひて りうナニ其時私が風並のいゝ宗さんの方へ付  
 様な氣だと又宗さんがそれほどに私を慈愛がりもしなひから思ひ切つて別れて文さんの方へ行たんでありますは  
 伯「其様ならば其時直に尼にならずと此宗さんの方へ來ればよかつたのにノウ りうナニ何様して左様なるものか子其  
 様なしだらのない氣性の宗さんぢやアなひヨ私もまた其様なに氣の定まらなひ事をしたのではないは子實のなひ事を  
 いふ様だが一旦姿をかへたのは文さんの追善とやらを申ふばかりでもなひヨあの通立派にひまをお呉の宗さんへ對し  
 て私さまごとくしては外聞がわるし兎てもモウ思ふ様にならなひから坊さんになつたんでありますはそれだから姿は  
 變ても宗さんの恩は何様も考へれば考へるほど有難くツてなつかしくつて忘れられなひで居る最中に思ひも付なひ宗  
 さんの薄命を聞て悲しひ中にゆかしひ念が屈く時節が來たのだと思ひ付て此家へ駈込て來たんだから無理ぢやアなひ  
 と思つてお呉な 伯「ハイ、御尤てござりますハ、何でもマア坊さんになつて世を捨てお前に還俗をさせるのみ  
 か身をしづめて見繼度とまで恍惚させるから餘程よりか如在のなひ宗さんだノウ りうナニホ、伯母さんが憎らし  
 ひ事ばかりお言だヨ實正に私が宗さんにくるめられて嬉しひから再應奉公をする氣になつたといふ様な事ではなひヨ  
 なか、宗さんも私を左様させて能といふ心もち少しもなひヨ何でもかでも左様してから宗さんに精を出させて是  
 非元の通りの身上の人にしてよなひければ悔しくつてならなひヨ 伯「ナニそれだといつても宗さんのお家の親れたの

は親御さんと兄御さんの方で大變の節の御撰があつて其卷添に合てわるくなつたのだといふ噂だからお前の爲では  
 無ぢやアなひかりうイ、エそれは左様だが子去頃中のことは兎も角も當時斯して私が宗さんと同居に苦勞をするのは  
 恩になつた恩がへしの心もちで達引に再度髪を生したので兩方が惚たの戀しひのといふ意氣な事でもなんでもなく私  
 の心は宗さんの零落てお在のを何様ぞ見繼て先達申我儘をした身の言解罪忘しにも成うかと不及ながら私の持て居た  
 ものを宗さんに入てくらして居るのに世間の人は種々の事をいつて宗さんを笑ひぐさにしたり私の事を狐だの狸だの  
 とわるくいつて洗湯へ行ても他人が私に脊後指をさして噂をするから何卒その人達の貌を見返す様にしたと思ひ込  
 てお前にはなすのだけは子此間中から宗さんに其事を少し咄し出して見たが子 伯「左様すると宜とお言ひのかへりうイ  
 イエ何様して、宗さんのお言ひのには子ナニ世間で何と言つたからといつて氣にかける事があるものかいらざる他  
 嫉妬だア貧乏して居ても此裏ヤ表の者に世話になりは爲まひし身上を仕舞て喰や喰すの中へ其方の様な美女が欠込て  
 來るのは本望だ悔しくは擬をしても見せるがいゝと左様言つてお呉だア子 伯「アハ、何だヨ此嬢は此身の前に  
 其様に自惚とか恍惚とかをいつてからにそれぢやア思ひやられるノウ隣家で悪くもいはれるはづだヨ りうホ、  
 アレサ伯母さんお前だから遠慮なしにツイ左様言たんだは子堪忍しておくれよ 伯「ナニあやまる事もない壯年中は其  
 くらゐな氣でなければ損だアナハ、ア、引笑つても泪がこぼれてならないそれは左様と同様しても先刻左様いつ  
 た所へ行くのかへ りうア、宗さんには極て仕まつてからに左様はないとあの通り實意の深い氣だからたとへ此儘  
 朽果ればといつて私を奉公になんぞ出してお呉ではないから何卒お前が二見屋の家へ行くわしく私の身分の事をは  
 なしてお呉な戀ケ窪に私が居た時分から二見屋の主人が知つてお在だから随分相談をしてお呉だらうと思ふヨトはな  
 しの所へ宗次郎が歸り來ればお柳も伯母も涙かくして知らぬ貌男の爲にかくの如く丹誠を盡すお柳の意氣地豈佛戒を  
 破りしとて罪とするにいたらんや當世稀なる娘といふべし



江戸 爲 永 春 水 著

第二十七回

頗分きく「アヤ此子ども達は何様したもんだヨ棧橋へ出て遊んで居てからに、坊さんの小ぢよく、きん「ナニ子今十助どんが遊戯に大きな海老を釣たといふから見に来たんでありますヨ、きく「アレサ言譯して遊んで居ずとも杉の間のお客の方へも行って見なよアレお八重どんの聲でお銀を呼びやアねへかヨそれまたお狐さんが出て来たこれ十四五にておサア、はやく引込なといふのにト娘ふんに叱られて笑ひながら棧橋より敷石を飛々引込む折しも此島屋の棧橋へ乗付る一艘の家根ぶねお菊は、きく「アヤお客だヨトひながら船の中をこどもて覗は兼て心當りのお客を待居る折からなればなるべし船宿の若衆が河岸番と挨拶などは略してしるさずもつともなじみにあらぬお客と見へてお菊も知らぬ人なりさてこの客も杉の間の座敷を見物のよしにて此土地へははじめてなれば萬事初心のおもむき船宿と娘分まかせの様子と思ひの外二見屋のお柳といふを名ざしにて藝者は乙吉小六など、別て評判宜きを撰みすべて温厚にして如才なきとりまはしは奥ゆかしくも思はれ此大榮樓の娘分お百お夏お増をはじめ女中のおせきおよしおいそなどが風情を見聞して感心するくらゐにてなか／＼恥かしからぬ人品なれども只島屋へははじめてなれば酒の席を中座して海の景色に心をなぐさめ安房土總の山をながめ富士の絶景筑多千葉浦其外西南の遠山をたづねて教へられるはおとなしく見ゆるも憎からず世に旅客の眼を驚かすには向ぬ風ならんか、きく「アヤお力だんお柳さんは何様したんだへ、りき「アイサ船宿へ來

ましたは今實は子、きく「アレサお柳さんに左様言てお呉れいつもの様に我儘をお言のは今日はお此なせへマア何でも私に欺されたと思つておもしれうつくしく化粧をして早く來て禮をお言と左様言てお呉れト笑ひながらいふは今來りて料理を好み酒をもとめ酌とる娘をお柳と名ざしせし客の好たる風ゆゑにお菊が如斯いふと察したまへされれば二見屋の女中もそれを推量して急ぎ歸り行しが程なくお柳を送り來るそも、此お柳は彼柳川が事にして一度世を捨佛門に入り尼となりまた恩義を報はん爲に佛の戒を破り宗次郎の貧家に尋行久しき間其儘に止りしが兎に角宗次郎の病氣治り兼て彼二十兩の金も遣ひなくして途方にくれる時節になりて漸々と全快しけるが其頃又増吉母子は長き煩ひに必死の惱み幾度となくありければ苦痛によつて夢中のごとくなり近所の見る目も氣の毒なるほどにてありしゆゑ宗次郎のもとへ便りもせず宗次郎も心にはわすれねども其身の病の治りかゝりし所へお柳が尋來りて二三日立と再發して他をかへり見るいとまもなかりし中にお増の方は其母親の數年來不通になせし先の夫の種にて産し男の子お増の爲には胤がはりの兄源兵衛といふ者尋來りて母とお増の大病を見て種々と世話をなし源兵衛も其頃は都合よろしからず砂村の方に假住居して在けるが當時母の極難澁を捨置れず相談の上母子とも彼假住居へ引取て實意の看病怠らず此所に月日を過せしとぞ斯て宗次郎の方にては病氣の治りし後お柳は男の爲に身を捨て再度の勤めは二見屋へ七十兩の給金にて唄女とこそはなりしなりさて島屋の娘分お菊がとりもちて座舖をかへたるさし向ひお柳は聲も他聞をはばかり柳宗さんよく來てお呉だねへトいひながら宗次郎の衣裳の立派なるを情と見直して、柳「そしてマアあれから後少しは都合のいゝ様になりましたのかへお目にかゝつて嬉しい事は何よりだけれどもお前様がまた此様に程のいゝなりをしてお出だと又少し氣にもなりますねへトいへば宗次郎は莞爾笑ひ、岩ナニ／＼それは些も案じなさんな兼てお前の頼みの通り此身の爲だから約束を違てなるものか何でも世間へ恥かしくなひ様になるまではお互に辛防して間音信も仕まひ時節顔を見る様だと樂みにはなるけれども却て未練がおこつて兩方が爲にならなひと思ひ切て居たわけだか

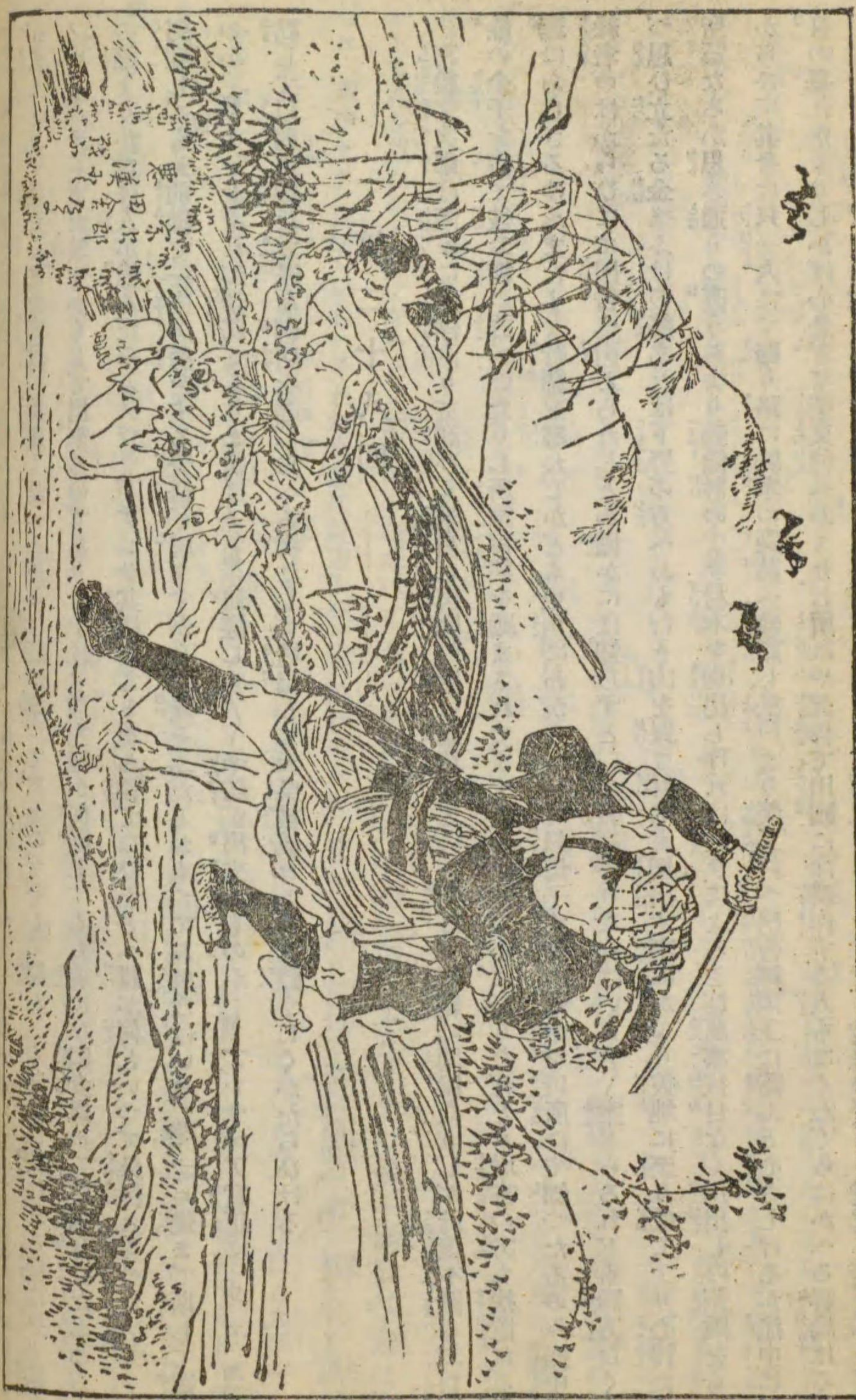


らなか／＼お前が此身になつて拵て呉れた金で衣裳を着るの洒落るといふ奢は仕ねへはナ 柳ナニサ衣裳をおこしらへのは随分宜けれどもそれだまたお前さんが何所かお出だと私が我慢して逢ずに居る甲斐がなひからサ 崇ナニ何様なおもしろい所が在たといつて遊びになんぞ行くものかな今日来たのはお前にも悦ばせる事があつて急に出て来たのだヨト懐中から胴巻を出し鼻紙俗の小菊の紙を枕元にひろげ金をならべて 崇ナニサこれだ當時借の方を付なそれとも少しは残つてお前の小遣ひにでもなればいゝノウ二十兩あるが此様な事ちやア行ねへか 柳ナニサ私の方の事よりかお前様家業の都合は能くありますか 崇ナニサ商賣はまだ多分利潤もなひけれども何様もお前を斯して置の気がなつて／＼ならなひから何卒歛て引ツくり返す様な事をして些も早く此所に置たくなひと思ふ中に不圖した事で進められて荏柄の天神さまの富の札を買つたらばノ 柳花とやらにでも當つたのかへト笑ひながらいふ 崇ナニサ千兩の當つたのヨ 柳ナニサホ、、啞斗りお言被爲な何様して其様なことが 崇ナニサアレサうそぢやアねへはナそれだけども丸札を買たのでなひから三ツ割だけの金だはナ 柳ナニサ實正にかへ 崇ナニサ左様サそれでも二百五十兩たらず取たのだヨ 柳ナニサ嬉しう嬉しうねへそれから直に此方へ来てお呉れのかへ 崇ナニサ當り番付の出た節直に來て咄そふと思つたけれども金を請取なひ中は何様間違つて樂しみにさせた甲斐もなひ様になる事があるまひものでもなひと大事をとつてはなしにも來なんだが今朝金を請取と直に欠出して來たがノ此場で一ツ思入れがあるがそれを一番當てからお前を本宅へ連れて行ようにせうか商ひの方はマア段々にしてお前を出すのを前に仕様かその相談を付様ぢやアなひか 柳ナニサ何様でモウ私やア此土地へ來たもんだから兎てもの事に一度は花々しく全盛をしてから他人にも嬉しがらせてお部屋でも借しがるくらゐに金もまふけさせて引込度ヨまたお前様も新法家業の所で折角お金が手に這入たのだに辛防拙なく私が側に居たいからといつて商賣の邪魔になつては行なひヨ私はマア死んだ氣になつてモウ少しの月日は辛防してお前様の體を不に見に堪へるから其氣で家業の都合をよく被成なトいふ時宗次郎はお前の體を自若く居る 柳アレサ何だねへ私のいふ事の返事も被爲てなくつて何を白眼付てお在なさるンだへ 崇ナニサ白眼付は仕なひが久しぶりで逢たらまた別段に美麗く見へるから了簡が違つて來たのサそして髪がよく其様に結はれる様に早く延たノウ 柳ナニサまだ箕ヤかも出て來るのであります 崇ナニサ左様か何様してもお前には唄女風の方が似合様だおゐらんの節よりかなほ人が惚るだらふノウ 柳アレサ其様なことをお言てなひたとへ誰が何といつて呉様ともモウ／＼何様してもお前様で一生涯勞をする覺悟で居ますから慈愛そふだとおもつてお呉なはいヨ 崇ナニサ幾まで斯して置ものか 柳ナニサそれが辛防でありますは子 崇ナニサ何様して／＼辛防が出来るものか 柳アレサマア實正に 崇ナニサ辛防して以前の様な立派な御店をこしらへる様にして精出してお呉被成ヨトいと睦ましくかたらひける

第二十八回

再説宗次郎は漸々に僥倖直りて商ひも繁昌し再問の店は説法律といふ所にて炭薪の間屋なりしが此度不圖も二百兩餘の金子を得て彼お柳の許へいたりし所家再興を勵まされてます／＼出精の心になりたれども増吉の方も捨置れる義理にあらざるゆゑまた／＼行衛を尋ねしかども兎角にわかりかねて只母子大病の薄命を近所にて知つたるのみ病中に縁者のはからひにて田舎へ引とられしとか慥かには知らずといふ者ばかりなればいよ／＼案じらるれども詮方なくまづ思ひ立たる金まふけの筋あれば下野の方へおもむき山を買て材木も切出す事にかゝり彼地に至り兼てより心得たる所爲なるか思ふ通りの直うちより猶餘計のよき材木を切出しければ大きによるこび萬事抜目なく川出しの差圖をもちからひて其身は只一人にて歸り路に駒木の諏訪へ參詣し松戸より柴又村へ出帝釋天王に詣んと心ざしけるが途中にて日の暮れかゝりしかば心急ぎて柴又村へかゝりし所はや黄昏て田圃には耕作する人もなくねぐらにかへる群鳥はるかに二ツ三ツ遅れ行など哀れに見ゆる折しもあれ何時の程よりか付來りけん二人の悪漢横路より前後に立ふさがり





▲「ライ此道を通るにやア酒代が入るぜ ●「たんとは入らねへ懐中のを不残置て往ツシト立かゝられて宗次郎びツク  
 りせしが氣を剛まし 考なんだ珍らしい事をいふノウ一日置に通る路で酒代も茶代も出してたまるものか人を見そく  
 なつたかべら棒めへ▲「なんだ此野郎めへ ●「エ、面倒だアたゝき殺して仕まへトいふより早く前後から組つきかゝる  
 を引ツばづしくぐり拔るを引戻されてよろめく足元 ▲「たつ其儘突倒すを倒れながらに宗次郎腰の脇差抜打に拂へ  
 ば跡へ飛去る白徒脊後にかゝりし一人が何とかしてや足をすべらし傍の溝へ踏込ながら猶も帯脊を放さぬ強氣宗次郎  
 は一生掛命逆業ながらも脊後の方を突ば運よく白徒の手先を丁度突破る痛みに ●「ア引ツト手を放せば得たりと突  
 立宗次郎前の方より木の枝にてなぐりかゝるをうけ損じ額をうたれて目もくらみまたよろ／＼となる所へ溝から上る  
 一人が足くび握んで引倒す一人は前よりつゞけ打叩きすへつゝ懐へ手をさし込ば宗次郎は氣を上げまして盲打振ひ  
 らめかす刃にはさすがの二人ももてあまし元來彼等は双ものもなく出來心の盗人なりけん思ひの外に甲斐なき働き去  
 れども二人と一人ゆゑやゝともすれば宗次郎危くなる事度々なりしが一聲叫んで切込む白刃肩間をはつりて一二寸さ  
 つと流るゝ血汐のさまを見るより一人も氣を奪れひるむ透間に宗次郎片息になつて逃せばそれ逃すなと我猛者の二  
 人無二無三に追かくる宗次郎もなか／＼に再度の勝負は思ひもよらず命から／＼足をばかりに欠出したる向ふの方森  
 の間に茅の家根七八間見へけるゆゑ心嬉しく走り付柴戸の明たる家を幸ひこゝを便りに欠込しが氣を張打合ふ節とは  
 違ひ心のゆるみに勞れをおぼへて敷居に爪突 俯にどふと倒れて起かねれば此家の内にも驚天し居所を飛退く一人の  
 女 女アレエ兄さん引／＼ト呼聲聞て宗次郎は氣の毒に思ひ漸々と這起て 宗ア、モシ／＼何もお驚被成者ではござ  
 りません何卒水を一杯呑してお呉被成まし悪漢に出合て逃て參つたもの決してお家へ御迷惑をさせ申は致しませんト  
 いふも苦しき息切れの様子風情と言葉に左もあるかと推量すれど油断をせず手燭をさし出し遠くから明りに透しなが  
 めつゝ女今水を上ますからマア其所へ腰でもお掛被成ヨトいふ物ごしは藪ならず鶯の音のうるはしき聲計かは姿ま



て茅家の住居にそくほぬ風俗茶碗に水を汲來り片手に燈火をさし出しながら怖々水を盆に載て 女、サアお上ン被成まし  
 シヲお前さんは宗さんでござるます子 宗、エ、左様いふお前は増吉だ子ヲヤ、何様してマア此所に 増、私よりか  
 お前さんマア何様して此所へお出被成たのでござるますへサア、此方へ上つてお吳被成ヨ何様にお前さんの事をお  
 案じ申たらウアレサ何を考へてお在被成だねへ今夜なんぞお前さんが夢にもお出であらふとは思ひませんから今日  
 は母御さんがお前さんの安否をお聞申に出て往ましたはサア此間へお出被成な何にもお心をお置なさる様な宅ではあ  
 りませんヨ 宗、左様かノウ何だか夢を見た様な心持てまだ此身には合點が行なひ 増、ホンニ私にも前後を何様おはな  
 し申たらお前さんに能分解除らふかと考へて居ますは今マア何様して其所へ欠込んでお出なすつたかヲヤ耳の際に血  
 が付て居ますヨトあかりにてよく見 増、ヲ、アレ肩の所にも血が流れて居ますは氣味のわるいト四邊を見  
 廻し 増、何所も怪我を被成たのぢやア有ませんかへト案じて宗次郎の顔をながめ溜息を吐ば 宗、ナニ、切られた  
 覺へもなし怪我もしなひ積りだがト其身をかへりみて 宗、ア、しかしひどくぶたれる事はぶたれたヨトこれより盗人  
 に出合たる始終切ぬけて逃來りしことまでをくわしくかたり懐中ものなどを取出して改め 宗、ア、引ひどひ目に逢つ  
 た能それでも何かを取られずに済んだのが思へば不思議だヨ 増、さぞ怖ふござりましたらふねへあぶなひ事を被成たお  
 前さんは寔に柔弱だと思つて居ましたのに二人りなんぞとよく切合事が出来ましたねへ劍術を知つておいて被成のか  
 へ 宗、どふして、何を知つて居るものかそして切合つたなんぞといふは大壯に働ひて芝居を見る様に立派な事だと  
 思ふだらふがなか、其様な事ぢやアねへ 増、ヲヤ夫でも先は盜賊だから 則、拔身で出ましたらふのに 宗、ナアニ何  
 様してそんな立派な盗人が出てたまるものかほんの出来合の追落しだと見へて喧嘩しかけの荒かせぎサ向ふに双もの  
 がなひから犬おどしの脇差を抜た、き散かして逃て來たのだそりやアイ、が知らねへ家に永く居られも仕まひト立  
 止るを聲掛は那とどめ 増、アレマア今夜は此所を夜を明してお出被成な今ツから何様してお歸り被成れるものでござ  
 りませぬものか不用心でござるますは子をして知らなひ家と被仰けれども此宅は私の母人さんの實正の子の宅で私の爲  
 には胤かはりの兄さんが私と母人を置いて呉るのでござるますから何にも御遠慮な事はありませんヨ先刻お前さんが欠  
 込んでお出のとき誰だか知れず怖かつたから所爲と兄さんが近所に居る風俗をして兄さんくと呼ましたけれども實  
 は兄さんは新川の親方へ歸參の出来る様にと帝釋さまへ願かけをして毎晩水をあびて參籠に行ますから明日の朝てな  
 ければ歸りませぬヨ

トことより母子の長病にて何事も夢の様にありし事兄の世話にて砂村に引込み其後帝釋天へ病氣の平癒を祈ら  
 んため又此村に良醫者の在よしにて知己の者の世話にて此所に假住居するもの兄源兵衛といふ者當時浪人中のし  
 のぎなれば物入すけなき様に斯る田舎に母子三人時節を待病氣もやう、五七日以來全快して今日久ぶりに湯  
 にも入たる由を告ければ宗次郎はやうやく安堵の思ひをなしてその身の上の事はほどよくはなし聞せ當時だん  
 だんと仕合も直るべき次第を告たれどもお柳の事はさすがに明しかねて隠し居たりしが實一年餘りの別れなりし  
 かば互に盡ぬ問答にはやくも亥ノ刻のかねの音野風に吹送られてもの淋しくまがりかねの渡し舟を呼聲木精にひ  
 びきて遠くきこへしんく、とこそなりにける

増、ヲヤ私は先刻から氣が付ませなんだがお前様空腹はありませんかへ 宗、ナアニ松戸で少し早かつたけれども夜食  
 を多分喰たから腹は減なひが先刻の一件で寔に勞れたヨ 増、ホンニ左様でござるませうねへそれぢやアモウ直にお休  
 み被成いしな私が足でもさすりませうから左様被成たらば些はお草臥が拔ませう 宗、ア、それぢやア寐かしてもら  
 はふが草臥の拔るよりか力が抜なひければい、増、ヲヤなせてござるますエ、宗、エ左様老實に聞れては行なひせ 増、ヲ  
 ホ、、それだつても何だかわかりませんからサそれはよひが夜具が何様も 宗、ナニ、其様な心配をせずとも○  
 ○○○○○○○○○○○○邪魔にならなひ所へ寐かして呉ればい、はな 増、ヲヤなんの邪魔になる事がござるますへ



宗言葉咎めをせずとも早く寐かしてくんな

春景抄 英對暖語 卷之十四了

婿景抄 英對暖語 卷之十五

梅ごよみ拾遺別傳

江戸 爲 永 春 水 著

第二十九回

木のもとに旅寐をすれば吉野山花の衾を着せる春風と詠れし圓位の歌ならねど手織木綿のいと重き夜の臥間も添寐する花の笑顔に心うつれば綾錦とも着心よく朝寐過せし宗次郎お増は何時か起出て久しぶりなる化粧も昨夜を恥し身だしなみ見違ふばかりによそほひて朝餉の支度も調へばしづかに宗次郎の枕元に寄添ひて増モシ宗さんくモウお起被成ませんか巳ノ刻過ぎてござりますヨトいひながら宗次郎の顔の上より覗き居る宗次郎はやうくと目を覺し宗ア、引寔に草臥たから夜の明たのも知らずに寐たヨヲヤくモウ化粧が出来たノ其様に美麗なつて見せられちやア今日は此所を立て往れなひぜ増アレサ其様な事をお言ぢやア否でござりますヨ病氣が治つて今日はじめて白粉を付たんでありますはそれもお前様が愛想をお盡しだらうと思つて今朝早く起て淨水を遣つたのでありますヨ昨夜は髪も散亂て居ますし何時間にも顔なんぞを化粧事もありますんからお前様に見られるのが何様に恥かしかつたか知れませんはサアお起被成ましなねへアレサヲホ、マア御飯をお上ん被成ましヨウ私は早くおきてお前様のお起のを待て居ますのだから待どふて行ませんヨ宗ハイく左様ならば起ませう何様も詮方がなひとやうく起上る増お前様今朝は何ともございませんかへ宗なにが増アレサ昨日お痛め被成た所は痛みは仕ませんかと申事サ宗ナニそれは何ともなひがお前のお影で首が重くつてならねへ増ヲヤ私が何をしましてエ宗ナニサ〇〇〇〇わりとい



ふてもねへ此方も心がらだから詮方がねへドレ／＼思ひ切て出かけませう 増ヲヤ何所へお出被成てござります  
 宗ナニサマア床の中を出様と言たのサ 増ヲヤ私はまた直に何所へかお出かけなさるのかと思つてびつくりしました  
 からお聞申ましたのサ 宗ナニ／＼今日はマア此所に居て兄さんに逢て禮も言はなひければならずしてお前をも直  
 に連て往度から其相談も爲なひければならなひトいひながら帯をメ勝手へ出顔を洗ひて元の座へ來ればお増は其邊を  
 片付膳を備へて 増直にお飯をお上ん被成な何にもお菜がなひから行ません子 宗ナニ／＼何もいらぬイヤ何だ鯨  
 か 増アイサ鯨の素焼にしたのを隣の子に買て來て貰つて煮たのでござりますヨお前様には此様な物は喰られるかな  
 んだか知れませんが餘り何もありませんから詮方なしにそれをこしらへましたは 宗これは奇妙だ誠に美味そうだノ  
 ウサアお前もたべなトこれより和合食事も濟て火鉢の際にさし向ひ前後の事を種々と相談し兄源兵衛も帝釋天の參  
 籠より他所をまはりて其日は遅く歸りしかば夜に入てまた／＼談合極め其翌日母は後より呼寄るつもりにて宗次郎お  
 増は二人連にて婦多川まで歸り來りしがまづ知己の者の方へ落着俄に店を借り家財を調へ只一日の中に世帯をこしら  
 へて衣食の手當にいたるまで何不足なくなしたれどもお柳の方へ知れては濟ぬ義理ゆゑに何事もひそかにはからひ宗  
 次郎の足も近からねば母を引とりて後また／＼座敷を勤め男の世話を薄くせんとしてこと／＼宗次郎の雑費とならぬ  
 様にはからひしがさすがに和歌町にて再度の唄女となりし故如才なき客のとり扱ひ朋輩の評判もよく全盛日々繁昌  
 にいつしか宗次郎との中も人が知り又お柳の事も宗次郎と深き中と聞出したる者ありて竟にはお柳と増吉の耳へはい  
 り互に氣をもみさはぎしが宗次郎は二女の心を和らげる様に兩方へ實を盡して雙方ともに少し嫉妬の氣の薄らぎし  
 節増吉へはお柳との中をはじめより語りお柳へは増吉との中を包まずはなし兩方に請たる恩もあれば全く浮薄の事に  
 あらずとよく／＼得心させけるゆゑお柳も増吉も恨みなくたがひに文の問答をなして二人とも宗次郎を大事にしける  
 が其中に増吉の兄なりける源兵衛も親方へ歸參し俄て其大家の支配人となりしゆゑ増吉が唄女の勤を止させて宗次郎

の合力を請ながら家再興の大切の中なればとて其費を助けしとぞさて其間に増吉は宗次郎にすゝめてお柳を二見屋  
 より下げて貰ひしがお柳も増吉へ義理を立て宗次郎の本宅へは足も入らず増吉も同じく其の如くなれば宗次郎は二個の  
 美女を持ちながら本宅は男世帯にて日を過しける

さて此頃仇吉が心やすく増吉のもとへ遊びに出入し事は梅ごよみ辰巳園にしるしてありされば梅ごよみ發端の年  
 月が宗次郎増吉お柳なんどの彼是とせし時代より丹次郎米八のはなしは後なりと察したまへ猶増吉の婦多川に  
 不住様になりし頃が岑次郎お房紅楓などのはなしなれば此英對暖語は梅曆辰巳の園の前中後と數年ながくまたが  
 りし物語なりこゝにおゐてまづ宗次郎の事を大略して此編に書おさめ亦梅美舟の巻にいたりては十二の巻にしる  
 したる豊月の座しき續きとなせり前後雜記筆辭を察してよみわけたまはん事をいつもながらくどく告申になん  
 再説宗次郎は一度女色に迷ひしに似たれども元實氣より起りし因縁にて其實意が的にも通りお柳お増の助を請再興  
 したる家業繁昌朝日の登る勢ひにて今は親と兄とが滅したりける家業よりも十増倍の金持となりけれども油斷なく出  
 精し最早是迄なりと思ふ時節になりて分散せし兄の子をもらひて家督をゆづり萬事支配人に守せ其身は小梅といへる  
 所に隱居所をこしらへ彼お増お柳の二女を同居させ奢もせねば吝くもせず程よく世活をなすこそは足ることを知る君  
 子ともいふべし

上りり 同江に住は嬉しき契りなり夫は津の國生田川これは東都の隅田川おもひくらべん戀の山富士と筑波の  
 中／＼に合よふ似た／＼心もなりも増りおとらぬ桃櫻

ト中音に語る二挺の三味線三の糸が切てかたり止め 柳ヲヤ糸がなひヨ 増ヲヤ／＼モウ一かけもなかつたかねへ  
 何様も詮方がなひからお繋な 柳モウよして又明日にせうぢやアなひか 増ア、それぢやア左様せうチト莞爾笑ひア  
 ノウお柳さんお前は何とお思ひだか知らなひが此淨留理の様な事があつたらほんとうに困るだらふ子エ 柳ア、ねへ



それだから此間もソレ宗さんが左様お言ぢやアなひか大和物語とかいふ昔の本に記てある事二人の男が兩方とも美男  
 て何も角も勝り劣がなひから生田川とやらの水の中に居る鳥を箭で射た者の情人にならふといつたら兩方一度に其鳥  
 を射當て詮方がなひから兩方へ義理を立て其娘は直に川へ身を投て仕まつたといふ事たねへ 増「アホ、、、それで  
 も宗さんは平氣で在だねへ 柳それだつてもお前も私不足を言様だと宗さんもお困りだらふけれども私もお前  
 もお互に和合して朝晩此様に押付合て居るから苦勞なして在のだけはこれでも何方か一人嫉妬をして御覽な夫こそ面  
 倒だけれどもお前も私も左様いふと自惚らしいが素人と違つて種々苦勞をして來ただけ野暮をいはなひから男も樂だ  
 と思ひますは 増「ホンニ左様だヨねへしかし私やア考て察と宗さんは浮氣な事は少しもなひ子 柳「エ、イ、エ左  
 様でもなひヨ去頃お前がお咄しのを聞て察と些たア多情な事もありすは最初に私が廊へ出た節續けて私の所へお出  
 の途中でお前に逢と直に情人におなりぢやアなひかホ、、、 増「アヤ／＼それはお前が振付てお在の節だア子それ  
 よりかお前が後に文をもつて宗さんをお呼びの節は以前の事をわすれて仕まつて文を見ると直に途中から駕籠でお前  
 の所へお出ぢやアなひか 柳「アレサ左様お言だと私が面目なひヨモウ／＼過た事を言合なしにせう子エアホ、、、

第三十回

百年の苦樂他人に依女の身の上の悔しきことは今さらいふも古めかしけれども生れし形容の善につけ悪きに付て口  
 惜しく腹立しき事のあるものなれば常に他人の爲に恥かしめられたはそねまれる所爲の用心を仕たまへかし爰にお  
 増とお柳の二人は實の姉弟よりも睦ましく宗次郎も又兩個を愛して蔭と日向の會釋なく衣類其外のものまでもお増お  
 柳を同じ様にして與へけるが此程お柳は何となく煩ひつきて次第に重き病となり日々食事もすゝみかねしゆる宗次  
 郎は大ひにおどろき醫師と藥と心配して手を盡しければお増も元來やさしき生得疾に姉弟の如き中といひ且は義理の

る事なれば晝夜の看病なほざりならず介抱しけるゆるお柳は其心ざしの程をしみ／＼と嬉しく思ひ朝夕氣の毒に胸を  
 いためて 柳「アレサお増さんマア藥を煎じてお呉れのは後でも能から些お休み被成てお呉被成ヨ其様にモウ私の事に  
 ばかりか／＼つて苦勞をして又お前が鹽梅でもわるくお成だと私もこまるし宗さんもお困りだから何卒お前は折節氣晴  
 しをして身にさわらなひ様にしてお呉な兎角私の病氣は急に全快は爲なひとあきらめて居ますから其様にお前が信切  
 に氣をもんでお呉だとかへつて私が氣の毒に成からどぞマアかまはなひでお呉なさのヨ 増「ナンノ其様に遠慮を被  
 成てなくつても能はず斯して姉弟の中よりも心易く一生二個が同居に活業をふと言合したものをお前なり私なり一  
 身も同様だと常々に思つて居るのだへ子それだからお互に世話にもなつたり世話も爲たりするのが當然の事だは子お  
 前がやがて達者になつてお呉の時に萬一私が煩へばまたお前に看病をして貰ふは子左様して見れば何にも恩もなひと  
 いふものだよ其様な遠慮に氣をもむとなほ病にさはるから平氣で在ヨト言ながら多葉粉を吸付てお柳にわたし  
 増「サア一ぶくお上りな今日は宗さんがお前の病氣を案じてお醫師さまの事やお藥の善悪もあらふかとそれをよく觀  
 察貴とお言て松智山の觀光さんといふ上手な人相者の所へ出てお在だヨトいひながらお柳の體を 情見れば此程は  
 顔の肉も落もの言さへも力なく常々氣性の我慢つき元氣もよはりて兎に角に泪をもよほし盜汗を流しさも哀れなる  
 風情ゆゑさずがお増も苦勞人察して心を付て見れば過し日頃のお柳の身の上再度の勤の苦界の心配他人にいはいれじ笑  
 はれまじと張を通せし意地づくの勞れもこゝにあればこそ眠れば夢の多きよし醫師も肝症の勞症のと名を付たれば萬  
 一快氣もせぬならばさぞ悲しくあるならんと胸に思へば色にも出て竟ホロ／＼と眼に涙お柳に見せじと顔をむけ次へ  
 立んとするを呼止め りう「アノお増さん昨日お醫師さまが最見放したのか子エ 増「どふして其様な事はなひヨナゼマ  
 ア其様な事をお言だ りう「イ、エそれでも宗さんがアノお醫師さまをたづねに出てお出の様子といふ今お前が私の顔  
 をしけん／＼と見て涙をおこぼしのは私の命が保たないだらふ慈愛そうな事だと思つてお呉だから夫故お泣のに違ひな



いヨトいひつゝ涙にむせいつて泣ながら、未練な様だが最些生て居度もんだ子エ此様にお前がやさしくしてお呉だから猶の事死ともないヨトいはれてお増も泣聲になり、増「アレサ其様な心細い事をお言ひでなひ私が涙を落したの

は子さぞお前の氣性で取亂して寐てお在のは否だらう些もはやく髪ても結て上る様に仕度ものださぞじれつ度お思ひだらふと思つてツイ涙が出たんだは手かならず取越苦勞を被成でなひヨ、りうイ、エ夫でも子お醫師さまは何といふ

か知らなひが何でも此十日ほど以來へは子少しとろ／＼と眠ると枕元へ何者か来て早く死ねといふ様な事をいつて子私の胸へ釘か針かを突通す様な夢を見て目が覺ると油の様な汗が出て居るものヲ何様しても全快事はあるまひと思ひ

ますはト枕を濡す涙の雫さも哀れげに歎き伏すお増は種々なぐさめて力を付る親切はいと頼母しき實情ならずや斯

宗次郎はお柳の病氣を是非とも一旦は全快させんと丹誠するもたゞ恩愛の情のみならずお柳は再度の勤まてもして家

再興の大功あれば其義理にも龜末にならず神佛に祈り人相の易者のと氣をもみ歩行しが疑、心あれば暗に鬼の姿も

見ゆるといふたとへの通り松智山の相者、觀光は他行にて家にあざれば詮方もなく歸り道にて大鷲東味と云易者の

許へ立寄占ひを乞ひけるが此易者は兼て宗次郎の身の上當時お柳とお増を同居させ右左に置いて樂しむ事をくはしく知

りいと口惜く思ひて居たる所なりとそ夫は何故といふにまだ増吉が和哥町の唄女なりし頃深く心をかけていどみし

かども増吉は上手に言退れて得心せずまたお柳が二見屋に居たる時大築樓に呼び遊びしかども是も振付てつれなくせ

しがいかなる愚痴の所爲にや大鷲は野暮に戀ひ迷ひて恨み居たりしが兩女とも宗次郎に身を寄てゐる由を知己の者よ

りくはしく聞て妬しく思へども詮方なく宗次郎をも他見ながら知つて居るゆゑ無理なれども面憎しとそねみて在し所

へそれども知らず宗次郎が來りしゆゑ辯舌に任せて宗次郎を説きどはして歸しければさすがに發明なる心にも迷を

生じたる時にいさゝか宗次郎に、災ある折からなれば大鷲の言葉をも思ひ心よからず立歸りてお増の母親に相

談してお柳の病氣中はお増を別に住居をさせて置賤曲を計らひければ母親は氣の毒に思ひ早急お増の方へ來りてひそ

かにお増を一間へ招き涙ながらに囁きける

此時お増の母はお増の兄の許へ同居して居たるなり又因にいふ大鷲と稱るゝ易者は虚名實にて福有なれば妓女な

どに金を遣ひて色情深き曲者なりしとぞ

母「アノお増やお前はマア何様して此頃は其様な恐ろしい心に成たのだへトいはれてお増はビツクリし母の顔を從

容詠め、増「フヤ／＼母御さん何をお言のだエ私が恐ろしい心になつたとはマア何の事だ子エ、母「アレサとほげなさん

な昨日旦那が何所か往て、占を見てお貰の節にお柳さんの病氣はお前が嫉妬で祈り殺そふといふ悪心からお柳さんが

煩ふのだと種々證據をならべて言たそふだがお柳さんの夢にあやしいものが枕元へ來て死ね／＼といふのも胸へ針を

突込のも不殘お前の所爲だと、占たそふだヨ成程それは女の心で嫉妬をするもなひ事ではなひけれども其様なマア恐

ろしい事をして見な、則お前の身にもそれほどの苦しみを請るには違ひなひがなせマア其様な怖ひ事をするのだへ

トいはれてお増は呆れ貌、増「フヤ／＼マア思ひも付なひ災難を言かけられるものだねへ私しやアお柳さんの病氣を些

も早く快して上度と思つて毎日お晝過まで斷斷をして清正様を拜んで居るのに其様な事を言れちやア寔に悔しい事た

ねへト涙を落す、母「それでも其願がけを則り祈り殺すのだからと宗さんが疑がつてお在て見れば詮方がなひからマア

お柳さんの病氣が能治てお前の疑ひが晴るまで兄さんの方へ往て時節を待てるがい、はナ、増「イ、エ私は否だヨ今

に宗さんが歸てお出ならばお柳さんの前で能私の胸をはなしてお柳さんまでも私を疑がつて左様だらふとお思ひなら

ば詮方がなひからその座で私は咽でも突て死んで仕舞ヨ左様したらば衆人の疑ひも晴れるだらふからト覺悟極めし娘

の顔色察して見れば母親心案じ過してまた悲しく、母「ナニサ其様に氣の短ひことを仕ては猶行なひは子いよ／＼お前

の心に其様覺がなひのならば宗さんに能其おもむきを咄して何所の、占者だか其奴をも聞糺して仕様があらふはナそ

れは兄さんを頼んで能正しても貰はれるからマア／＼短氣を出して吳なさんなよト母子が咄しの次の間より思ひがけ



なくお柳は立出りう「お増さん母御さん増マヤお柳さんかへ何様してマア輕々しく此所へ出てお出だへ床の上にお  
 在いでさへ自由じゆうに身がお利きでなひのに能よく此間へお出だねへ母マアレサお前は冷ひやてはわるひヨりう「ナアニ最直ちゆうに全快ぜんだ  
 らふと思おもひますはト今いままでにあらぬ顔かほの色いろさもうきくせし容體ようたいを不思議ふしぎなこととお増は看みとめて増マヤホンニマア何  
 様ようして其様そのように急に元氣げんきが出たのだからふ子エトお柳の様子やうすを見て居ゐれば母も同じく密添ひそかて其故そのゆゑを不審ふしんに問とへばりう「ナ  
 アニ他の藥ほかのくすりで心持こころもちがよくなつたのではなひヨ一昨日おとひお増さんのお友達ともだちの婀娜おんな吉きちさんが持もつて來きてお呉くれの一粒いちりゅう金丹きんたんとやら  
 子性しやうに合あひ合あひか知しれなひから服藥のむなどお言いだがかまはずに昨夜ゆうべツからあの金丹きんたんを澤山たくさんつゞけて給たまたら今朝けさツから  
 段々だんぜんに氣色きしきがよくなつたのでありますヨ増マヤ「ヤ實正まことにかへ嬉うれしいねへお前まへがはやく全快ぜんしてお呉くれでなひと私わたしが身みに  
 りう「アレサそれも今いま此間こゝへ來きかゝつて聞きましたは其事そのことならば決して苦勞くるうにしてお呉くれでなひヨ縱令たとへば誰だれが何なんと言いふとも私  
 はちつともお前の事ことなんぞを疑うたぐるの悪わるく思おもふのといふ事はなひヨ此度このたびの病氣びやうきもお前まへが信切しんせつにしてお呉くれだから心強こゝろづよ  
 かつたのでありますヨト母ははとお増まへ隔へだたなくうち解とかたるお柳の體ていを宗次郎そうじろうは先刻せんこくより歸かへり來きつて不殘見聞ふざんけんぶんしたりけれ  
 ばお増まを疑うたひしを後悔こうかいして氣きの毒どくに思おもひ其座そのざへ立出たいで大驚おどろが易やすをもつてまどはせし事を咄はなして果はは笑わらひを催もよほしけるが  
 此日このひよりお柳りうは一日いちにち々々とと快氣くわいきして元の如ごとく達者たつしやなる身みとなりお増まを大事だいじにすること母ははの様ようなればお増まもお柳りうと片時かたとき  
 も側そばをはなれずまた宗次郎そうじろうも兩女ふたりを寵愛ちゆうあいする事ことますくふかく頼たのてお増まお柳りうの兩女ふたりながら同じ月つきより妊身みになりてお  
 柳りうは女おんなの子こを産うみお増まは男おとこの子こを産うみいづれも勝まさり劣おとらぬ容貌けいようにてうつくしく蟲氣むしけもなければ疱瘡はうそうも輕かろくいと目出めで  
 度家内たまかうちの賑にぎはひ幾千代いくちよかけて榮さかへしとぞ

春 色 英 對 暖 語 卷 之 十 五 了

梅 ころよみ

春色 梅 美 婦 禰



春色梅美婦禰の序

四方の諸君の恵み給ひし玉句をもて此草紙のはしがきに換予が拙なきを装る

白梅の香を張入る障子かな

柴の戸にメリも付ず夜の梅

よき中を人に見よとや梅柳

春雨や隣もしらぬ小酒盛

春毎に咲まさるべき花なればト兼輔朝臣の梅の歌を便りに亦も今年の新販幾枝に高覽を願ふのみ

江戸 人情翁 狂訓亭

為 永 春 水 誌

玉 梅 眞 蘿 枝 雪 風 齋



春色梅美婦禰卷之一

梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水 著

第一回

再應説を幾度となく綴るに似たれど枝から枝の花と實をまたことごとく治めねば根分繼穂の物語り猶説残せし一條を又々爰にするすになんさても戀が窪なる豊月にはからず落合ふ岑次郎紅楓お房の三人を和合になす計ひは名にし應たる米八が好意な萬事のはからひに元來血縁の姉弟つながら縁の岑次郎は直に洒落た人なれば楓お房の兩女へ對しほどよく會釋氣休めも他人が聞てはなかくしに得心すべき理害にはあらねど姉も姉も心底から惚たが弱身の戀の癖了ぐにや／＼になりしかば頼て米八は岑次郎に紅楓の身の上の事を相談し金の入用は岑次郎が何ほどなりとも出すべしといふに任せて其道に馴たる人を深くたのみ岑次郎とは不言に親元を抱込漸々に紅楓を廓より引とらせさて給金利分入用多分かゝりし事なれば年季を短かくして貰ひたるを僥倖と思ひ男の爲に少しの間婦多川の料理屋の酌取奉公を纒の金の足前に舞樂に勤めさするよしも娘が承知のうへなればと談じさて中裏の中島屋の抱への表向にして貰ひ自身番横町に家をしきらひ自由に岑次郎に逢るゝ様にはからひけるは何ゆゑなれば兩女の親の扁屈なれば岑次郎の世話にならざる心のほどまた親の元に置ては面倒なることのみある戀路の中にしてお房にも義理あれば紅楓を親元にも岑次郎の側にも置れず金に事を欠ての様に言こしらへ如斯にはなせしとぞされどお房は姉のもとに同居とまではまだならず此の後も米八が眞實の世話を便りに彼處に住居をして所々岑次郎が客となり口を掛けて呼出すのみかお房の

得心あしからぬ様に徳を付てつかはしければまづ姉妹兩女とも其儘に月日を過しける

紅楓が戀が窪を出て料理屋の唄女となる事は容易事にはあらねど夫を委しくなす時は理窟にからまりて婦女子の看官おもしろからず依之只道理もなき風情に辰巳へ移り住よしをしるすは例の龜忽の筆癖とゆるしたまへかし

○さてもお房は此四五日風邪の惱みありければ口のかゝるを斷て淋しく部屋に残り居る友傍輩も在ながら晝寐を仕たり下坐敷内所の用のあるもありて暫時二階にしよんぼりと鬱氣折しも貸本屋の持て来りし人情本素人作の寫しにあれど面白そふな書初に借て直さまよみかゝり憂を忘るゝなぐさみも又氣にかゝる戀の癖

ほんの文句「あとには一人淋しくて眠られぬ儘に文七は傍にある三味線を手にとりあげて爪弾に

うたへ見せやお部屋のかげ口にうき名たつほど深くなり義理も遠慮もわきまへて無理な事とは知りながら餘所の坐しきに居るそらは泣てこがれて我儘にお客を捨てぬしの側

一間隔て清川は耳をそばだてて心の中に。ヲヤ文さんが何節か弾て居るそふだヨト唄の文句を聞わけつゝいとど心に線かへす痴情も惚れたる人の常。ほんに唄といふものは能作つたもんだ身の詰りになる事は百も承知して居けれど文七さんと落合たお客はいつでも鹿略にして後日では後悔するほどに傍輩衆にも異見をされ一坐のおもはく萬事此身の勝手と心を叱り來ごとは來ても手に付ぬ否なお客といふほどのお方でなひが酒機嫌よく寐なますのを幸ひに最些堪忍爲なましへト誤言も口の中岫あのかげに淋しがる人を其儘置れうかと又欠出して文七の床にいたりて身を寄添 清文さんヲヤもう三味線はお止のかへなせマア溜息を吐て其様に鬱情でお在だ今日も文使の人がいふには花里さんといふ女郎衆からもぬしの所へ手紙が出るといふ事を聞きましたから先刻までモウ／＼氣がもめて悲しく思つて居たんぞますそりやアモウ私の様なものぞますからぬしの氣にも不入他に發明な娼が出来さしツた日には兎ても止て吳なます様にはなりいせんが何卒私をまるで捨て仕まはふといふ氣にならツしやらなひ様に



後生さますヨ 文「へい、かしこまりましたまつりました 清「アレサおちやかしてなひ實正に急度さますヨ 文「ア

イヨ大丈夫だから其様な取越苦勞を仕なさんなヨトやさしく言

お房はこれを讀かけしが身にもしみく引くらべ戀の切なる心根は誰もかはらぬ憂苦勞別て此身は姉といふ人の最  
初から在ぞとも知らず思ひをうち付にいふて嬉ひ挨拶を聞ての後に段々と姉が結びし縁の糸義理と世間の思はくを恥  
ては否とも片糸の切ねばならぬ姉の身殊に母さへ隔ある中の意味さへあるものを奈何戀しく慕へばとて終遂げられぬ  
二人が中他人の身にて在ならば男一人を兩婦にてかしづく事も世の中に多く見聞もする事なれば恥かしからぬ所爲な  
りと勝手にいふても過すべきが扁屈心の母の氣になか、ゆるす事にはあらずといへばとて今更に離別様とは言れも  
せず言も悲しひ心の底マア何様したら能らふと思案にふさがる胸の中涙を落す冊子の上文字も鈍染てかすむらん斯て  
其日も暮はて、出入せわしき路次の足音明て來るあり見板の迎ひとともに欠出すあり心の當の名ざし客寄場の噂もと  
りどりに樂屋は只の娘の寄合たとへば年の數かさねて女房といはるゝ女でも自然なるあどけなき夫を惡口にいふ節は  
偽娘とかおふかめものとか誘て穴をならべ立再生の眉毛の逆立て白齒がさびて鼠いろ乳首がしなびて皺があるのと憎  
まれ好なお方もあれど盛の過し花なりとは心て承知の憂勤め其身の口から老込と卑下する時は猶更に見かすめられる  
花美な中些似合しくない様に思ひながらも年壯く看せねば笑くぼも疵となる由縁の色の別世界眞の通人といふものは  
則年増女を相手にしても「ナニまだ左様はなりやア爲まひ實に幾歳が正直ならば以前へ歳をとるのだから此身が恍惚  
て居る眼から壯年といふぢやアねへすべて其方のする事は半分生娘の様な行狀だものヲ何様して歳經たものと誰が察  
るものかしなど、賞るを嬉しひと思はぬ娼妓唄女はあるまじまんだら艶語と知りながらもまづ身をかざる助となれば  
誇らるゝ言葉と同じく聞て腹立氣隨のたはけもあるまじおよそ業平の再誕と賞らるゝ美男なりとも娘唄女はいふにお  
よばはず、諸の如形の不具をかぞへ難説をかぞへ深密を誇る癖あらば廣き世界一統の如形なりとは賞べからず大能用心を

なしたまへなど、今さら不言とも世間一統の丹次郎達定めて御如才あるまじきか娘御さまがたも深く思案して後に實  
なる情人を撰みたまふが肝要なるべし

ド、一程の能さそな氣の能さそふな それじやたしかに情人がある

ふき「ヲヤ米八さんお歸りかへ私やアモウ淋しくつてお前が戀しくつてならなかつたは 米「なんだヨ此嬢は側のもの  
に遠慮なしだのウ衆女が此様にお在じやアなひか 米「アレサ八重吉さんも里吉さんもその外も唯今がた明てお出だ  
ものヲ 米「ヲヤ左様かそして直に歌がるたか衆女さん大分御精が出ます子 八重「ハイ、眞平御免被成まし 里「ヲヤ  
米の字お早かつた子先刻から房女が鬱氣の蟲ヤ 米「赤蛙でもあるまひ子 八重「ヲホ、、眞蛇じやアなほ惡からふ  
米「アレサ 其様な氣障な洒落をいふと梅曆の時分より中裏が面白くなひと言れるは子ヲヤ夫よりか私きやア大事の言  
傳をわすれたヨ 米「ヲヤ姉上さん誰にへ 米「ナニサ 則 お前にだヨト莞爾笑ひ 米「アノ子房吉さん明日は無理に出  
勤しなヨ。ヨ承知か 米「アイト莞爾〇あるべし

第二回

退れなば遁れも得べき身ひとつを所爲あり顔に世を過すかなと隱逸の人は悟りけん夫は百年の餘を経て枯木のごと  
くなりぬる人か癡人なら兎も角も人並々に活業をせらるゝ者が親族の便ともなり彼是の家職の勤め妻子の不便捨て  
其身は易くとも夫をたよりとする人の當惑難儀は如何ならん然はいへ死別の節に臨めば留られもせず留られぬ娑婆の  
無常を何とかすると理窟を言るゝ悟道の人もあるべきなれど世の中は迷ふといふが實意にて悟り顔に萬事を消すは  
餘り可愛ものにあらず只迷ふて惡むの第一は強慾多慾の愚人のみ。色情は主ある女の外は少し迷つて看もよしこれ扁  
屈なる野暮人を和らかにして他愛を自然と生ずるものぞかし爰に岑次郎は紅楓お房の兩女ともほどよく同じ里に置き







き所に御在遊ばし間に合まじくとぞんじながら私も心ほそく御なつかしく存  
 上よりゆゑ文にて申上候どふぞや少しもはやく御歸り遊しせめて一言の御名  
 残をもあそばされ候様くれぐ願上より心せわしく何事もあらうしたゝめ  
 候へば

岑エ、引此様な事があるかして此三四日胸さわきがして何だか否な心持であつたモウ、後は讀におよばなひ迎も  
 伯父御に左様いはれる理ではなし彼是暇をとつては死目にも逢れなひから近所を見物の風俗で此宅を出てそれから直  
 に鎌倉へ歸らふト手にとるものも取あへず伯父には元來他の者にも知らさぬ様に支度を調へ濱邊の景色を見物と偽り  
 青森を走り出兼々聞たる路の案内仙臺の荒濱といふ湊から船の便宜ありければ七十里の東海上を一日一夜に走らせ平  
 瀧といふ所に着て直さま風の追手なりと廿五里を半日に銚子の湊に着夫より猶近道を早駕籠に乗飛する如く千里一時  
 とあせりつゝ忽ち婦多川の和哥町に至り自身番横町の家の前に近づく折しも櫻川由次郎唄女の米八 ▲「フヤ、岑  
 さんかへ能早くマアお歸りなさつた子エアノモウ房吉さんが氣をもみ切てお在だが何様もお糸さんの病氣が快氣なら  
 なひのでお前さんもさぞ苦勞になさりましたらふ子エ ▲「モシマア早く見てお上被成ましたいはいはれていと岑次郎は  
 米八由次郎に挨拶もろくにはなさてうろたへつゝ軒端に立寄る折も節お房の聲の悲しげに ふき「アレサ姉上さん引姉  
 上さんヤ氣をたしかに持てお呉ヨお糸さん引今に岑さんが歸つてお出だらふからマア夫まで氣を上げまして居てお  
 くれヨウト泣聲になる房吉の聲を聞より胸せまり狂氣の如く門口を轉び倒れて岑次郎上りがまちに手をかけながら涙  
 に言葉も出ざりける  
 春色 梅美 婦彌 卷之一 了

春色 梅美 婦彌 卷之二 梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水 著

第三回

再說岑次郎は周章ながら家内の様子を見まはせば不便なるかなお糸は即時 臨終のありさまにて姉お房の介抱の甲  
 斐なく悲しき涙の眼元 ふき「フヤ岑さんかへ最些早く来てお呉ならば能に子エマア早く何様かしてお呉被成ヨ姉上さ  
 ん、アレサお糸さんお前の戀しがつてお在の岑さんがお出だから氣を丈夫に保てお呉ヨ。ヨウ姉上エさんト泣聲に  
 て呼生んとあせるも血脉の誠にて哀れはいはん方もなし岑次郎も抱起して 岑「フイお糸さんコレサ氣をたしかに保な  
 あれサ岑次郎だヨ田舎から欠付た信切にめんじても快氣なつて呉なひければ恨みだヨコレサ、トうろたへて理にも  
 あたらぬ詞を出すも實に親身の歎きから愚痴も丹心と知られたりお房は姉を岑次郎に抱せて置て勝手に欠出茶碗に水  
 を汲來り ふき「アノ岑さんお前の手からこれを飲ませてお呉被成ヨアレサ口から直に吹込なくツては飲はしませんか  
 らト言にまかせて岑次郎がお糸の口へ吹込つゝ 岑「フヤゴツくりと咽へ通つた様だこれじやア何様か氣が付たらふト  
 抱へて居ながら胸を撫下して遣り 岑「お糸さん、フイコレサお糸。岑次郎だヨトいふ聲お糸の心耳に通じ去り行く  
 魂にもこたへけん眠りし眼をポツチリとひらき岑次郎の顔を従容と見て 岑「岑さんかへト只一言いふも苦痛の息つか  
 ひ消行其身と過去りし契りの事など思ひてや涙をばら／＼と落し柔弱手にて岑次郎の手にすがり 岑「どうぞ命のある  
 中に逢度とおもふ念が届いて嬉しひ子エト身を振はし 岑「折角此様に逢れてもまた直に別れるのは悲しひヨト詞みじ



かくいふ中に千萬無量の憂事を籠て涙のいとまごひ浅き縁にしか情なきお糸が身の果と不便彌増す悔み泣き油も命はあるまじと察しながらも氣を上げまし 岑ナニ、其様な悲し心細ひ事を言なさんなヨ最早此身が斯して来たからには何様な事をしても一旦快氣せず置ものかな能薬でも飲ば全快から案じ被成なト力を付けても重病に勞れて臨終の際なればさすがにかなぬ命ぞと諦らめても悲しく思ひいと涙にむせびながら 笑イエ、何様して兎ても存命は爲ませんヨ何卒迷はない様に仕度ものだと思つてもお前さんに別れるのがト言も涙に曇りつゝはや合掌て覺悟の體 笑お房を何卒慈愛がつてといふも幽かに眼を閉て息も再度絶入る風情お房も俱にすがり付き ふさ、姉上さんヤア引ト泣出せば岑次郎も狂氣のごとく 岑ア、イコレサお糸ヤア引、と聲はり上げて呼ぶ側から岑次郎の背中をさすりて 岑さんアレサ岑次郎さん目をお覺し被成ヨモシ、夢を見ておいて被成のかへトゆり起されて岑次郎目を覺しながら四隅を見れば婦多川ならぬ陸奥の青森の里の伯父の家例も假居の別間にて轉寐したる枕の元に茶を持來りて呼覺すは伯父の娘のお京とて今來はたしか十七歳片鄙に稀なる容貌にて詞遣ひもさすがには富有の育賤しからず藝能の業は鎌倉の傳手に便りて呼下し其師匠たちに習ひたれば自然なる都の風俗はづかしからず覺へては兩親の心は何卒うつしてより兎や角思へど初戀のうら恥かしさに言出す言の葉草もなか、何と岩間の苔清水男の心も汲かねて唯くよ、と胸をのみ痛めて日々を過せしが兩親達の内心に岑次郎を呼下し何卒馴染を重ねしうへにて家督をわたりしとするか左もなきならば鎌倉へお京をおくりて別家を立夫を岑次郎にゆずりなばお京の爲に頼母しき所爲なるべしと蔭言の相談さへもありしかば娘心のいそがるゝ戀の惱みの迫りつゝ朝夕思ひを焦せしが思案を定めて煎じ茶も遠き便りに調へ下して貯へありける清風といふ名高き銘茶を煮花にこしらへ岑次郎の居間へ持來りて今晝寐して語言せしを

ホ、ト言れて漸々起上り 岑ア、引寐苦しかつたヤア太變に盗汗が出たト手拭を取て汗を拭ひ忙然として居る 岑ア、アお茶でもお上ン被成ヨ何様な夢を御覽なさあましたか顔色までお悪ふござあますヨお背中をさすりませうト岑次郎の背後へまはり肩へ手をかけ身をすり寄せて脊を撫にかゝる 岑ナニ、お京さん、憚だからお止ヨとして伯父さんがお前に肩をもませなんぞすると腹をお立被成はナ 笑イ、エ爺さんが毎度然言ますは岑は繁花所に育つた者だから少しの間でもさぞ意屈だと倦て居るであらふ折節側へ行て氣を慰める様にするが能と云てお在だから今日もお爺さんに然いつてお茶をこしらへて參りましたヨ。アレサマア些お肩をさすらせてお呉被成ヨ其様に障られるのも否かねへ憎らしいト言ながら笑を含みて肩後から横貌をさし覗くお京の麗さ田舎育と恥らひし遠慮に最と愛敬も深き思ひをうちつけに言ぬはいふに増かみ合せかどみにあらねども二個並びし顔と貌似合ころなる妹脊とは互におもへど岑次郎は今も古郷の夢に見し兩女の事を思ひ遣れば衣通娘も楊貴妃もかへりみる氣のあらざれど粹な其身の情からすげなく振捨られもせず殊によく、慕へばこそ歳も行ざる娘氣にてそれぞと悟らす品かたち朝に夕な心の心づけ兼て定めし鎌倉の兩女がなくは此方より言も寄るべきお京の容色適ばれ惜き娘なれども後々の事伯父のおもわく義理ある女に疵つけて末も遂なく在れねば春の心を押しづめ種々胸をいためしが漸々と思案して 岑アノ子お京さんお前が私をマア憎ひとは思はなひ様だから自惚らしい事を言が子腹を立は爲なひかへト言れてお京は嬉そふに 笑ア何をお言でも私は腹を立はいたしませんヨ夫だから早くいつて聞せてお呉被成ましナ 岑ナニサ外の事でもなひが。アノウお前は私と同伴に鎌倉へ行氣はなひかへ 笑アホ、私、は随分參り度けれども 岑伯父さんが遣らなひだらふしお前も私の様な男と同伴に路を行のは否だらふ子 笑イ、エ、私はお前さんと同伴にならば同所へても參りますヨアノウ此間も爺さんが戯言に私へ然言ましたは今度岑次郎が歸國節鎌倉へ同道に行なひか往ならば當時中支度をして來月岑次郎が彼地へ歸る節同伴に立して遣らふ岑と夫婦になると寔に能似合ふだらふと言しましたヨト思ひ切つて



言出せしがさすがに恍惚子のはづかし顔に紅葉の夕映や色づく木々の梢さへ異なる國の人心もかはらぬ戀の路芝は踏ごころよき樂みなれど岑次郎は彌つししみ 岑アハ、ナニ伯父さんが其様な事を言なさるものかそりやア啞だしかしお前と私と情合も何も爲なひで堅くして連立て往て鎌倉で諸藝を十分ならはせてそして姿形容を又其上に美麗しくして。モウ、鎌倉第一番といふ好男子をお前の丈夫に看立て上たらば伯父さんも安堵するだらふしお前も田舎の人を丈夫にするよりは宜らふと思ふからサト いへばお京は恨めしげに岑次郎の顔をながめて涙ぐみ 哀イ、エ私しやア否外のお人と夫婦になるくらゐならば何故に鎌倉まで行ますものかト顔色あしく見へにける

第 四 回

算へ來し旅寐の數もたどるまで結び馴たる草枕かなト詠しは寒葉齋綾織ぬしの秀逸なりかし爰に青森に久しく逗留せし岑次郎は伯父の病氣も全快し殊にお京の身の上までも萬事岑次郎にたのまれしゆゑ其意に 隨 お京を鎌倉へ伴ひ登る對談を定めしが田舎育といへども都に恥ぬ娘を連る道中なれば容易き事にあらずとて心利たる供の男を五人撰み岑次郎とお京は通し駕籠同前にて宿次の人足を雇ひ實に大丈夫に心強き旅の空はるけき路も苦にならで一人が故郷を遠ざかれれば一人が故郷へ近くなるよしあし曳の山を越里を過つ、日を重ね程なく鎌倉へ着しかば岑次郎はまづ萬事を捨おき頓て辰巳へ急ぎゆき桑吉房吉に逢んとて小船をはしらす浪の上折から此間の横合より岑次郎の船へ漕近づく一艘の家根船すだれを上て ふき、岑さん待てお呉なはいヨ岑さん引 岑ヲヤ、房吉か寔にマア能所で逢たのウヲヤ女中も誰も居なひノ只一人か ふき、ア、私やアモウ、お前はんが戀しくつて、ならなひ所で今日和十さんがお前さんのお歸ん被成た事を知らせて呉れましたから種々と都合して一人で欠出してお前はんに逢ひに行きましたらば例の所へお歸りなさいといふから急いで送つて來ましたは 岑然か能所和十さんが此所が昨日の夜から歸るのを知つたワ

ウ、ふき、イ、和十さん計じやアありません桑吉さんには櫻川の由さんが知らせましたとサ 岑ヲヤそれじやアお衆も知つて居るのかノウ ふき、ア、それだから私やアお衆さんより先へお前様にお目にかゝらふと狼狽して出て來ましたはト言つゝ岑次郎の貌を情々と見て涙を浮めふき、ナゼマア此様に久しく遠ひ國へ行て歸らずにお出被成たらふ子エ憎らしい私きやアモウ死んでども仕舞かと思ひましたは 岑ナンノつまらなひ事をいふぜマア、即時に委しく咄て聞せ様がお前達の方で恨て居る様な事ちやアなひハナ二三百里も遠ひ國へ行て居たのだから此間がなつかしくつて、男泣に泣いて計居たはナマア久しぶりだから目出度一杯やらかさふトこれより岑次郎は房吉の船に乗つり一艘の舟をば歸して一艘の舟にて其船宿にいたり互に深き中なれば絶て久しき再會に語る陸言さゝめごと果しなきまで契りしが枕元にて男の聲 ●「モシ、若旦那サアお起被成ませんかモウお駕籠も出來ました今朝ほどは早く御發足被成と昨夜被仰たが却て例より遅くなりましたしたお京さん、サアお支度を被成ましたト言はれて目覺す岑次郎 傍を看ればこはいかにお京と○○○○お京も漸く目を覺し岑次郎と同時に起上り顔赤らめてさし俯き恥かしそなる身のそぶり 哀ヲヤ、何様してマア私は此床へ 岑エ、然なら夢にお房だと 哀エお房さんとはエ 岑エ何サエ、お前がお房といふ名に名を改た夢を見たといふ事サ 哀ヲヤ私はお前さんの 岑エナニ 哀アノウお内儀さんになつた夢を見ましたはトいひつゝ口を袖をあて、ししばらく床に打臥て顔を上ず居たりしが此所は名應ふ石橋の宿と呼なす旅店の奥に留りし夢にして未鎌倉へは着せざる事なりければ岑次郎もお京も胸を惱しながら此所より別て路を急ぎ鎌倉へ歸り着ける

夜見世の鈴もすゞ虫の音にふりかはる末の秋。宵に稻つみおもふこと夢に笑の輪の遠ぎぬた中略  
岑ハテナあの淨瑠璃は何所だらう珍らしい能聲だノウお京さんトいへどもお京は俯向て居るのみならず眼に涙をうかめ忙然とせし様子ゆゑ 岑ヲヤお京さんまた何をか思ひ出して泣のかハ、ア青森の爺御さんがお前を當地へ登せて



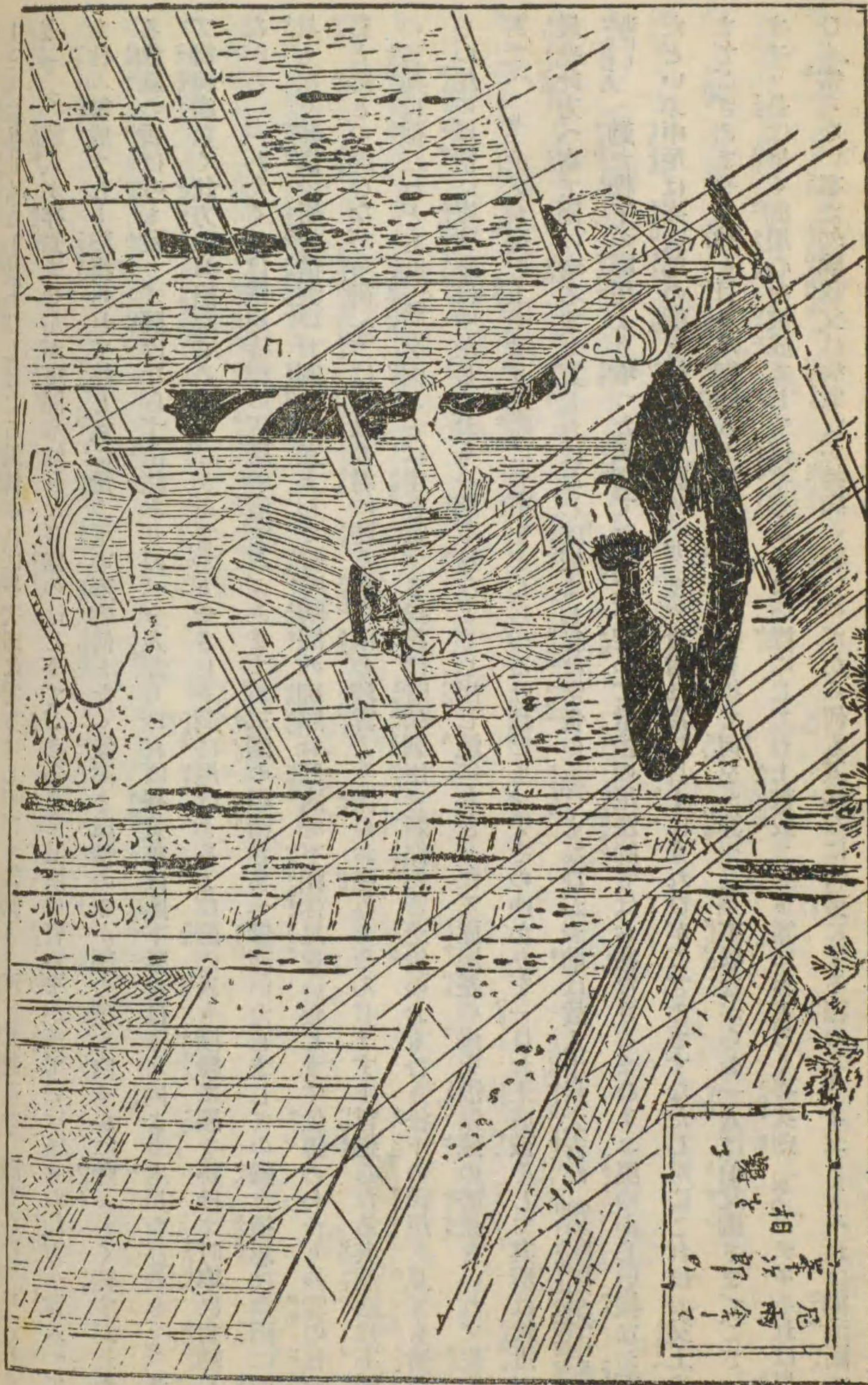
置て後から直にお出の筈の約束でまだ沙汰がないから案じてお泣のかへその事ならお案事てなひヨ来月は古郷を埒明  
 て此方へお登りだとサそしてお前にも美男を丈夫にもたして伯父さんも生涯此地に隠居するといつておよこしだから  
 少しの間心淋しからふが辛防して待てお在なはいはれてお京は岑次郎の貌を情々うちながめ涙を袖にぬぐひつゝ  
 京「イ、エナアニ田舎の爺さんは来月は是非とも當地へ出て来ると承ましたからそれは些もあんじはいたしませんヨ  
 考「それでは他に何ぞ泣ほど悲しい事があるのかへ 京「イ、エお前さんこそ此別荘へお出なすつてから鬱氣でばつか  
 りお出なさるますものヲ本宅の伯父さんが私をこの別荘へおよこしの節。迎島の別荘は病身の岑が保養場だから彼  
 地へ行たらば何でも岑次郎を氣を付けて大事にしてくれろと被仰ましたから私にはモウ／＼嬉／＼つて何でも心のとどく  
 だけお前さんの御用を満足上様と思ひこんで居ますのに些もお前さんは用を言つけてもお呉不被成只否がつてばつか  
 りお在被成ますから私には夫が悲しうござりますヨ何様で遠ひ田舎者で氣が付まけんからお前さんのお氣に入らなひ  
 はづてござりますが何卒叱るとも打擲ともして萬事を教訓て用を言付けてお呉不被成ましナト在所に居たる其節に思ひ染  
 たる陸奥挾の細布胸合ぬ男の心にあらずしてもの和らかに戀衣の模様も見せし忍ぶ摺り古郷の親も心の底にゆるして  
 遠き鎌倉へ二個連だつ旅の空泊々の驛家で幾度となく言寄れど解ぬ風俗する岑次郎が猶ゆかしくて今はまた伯父の心  
 も古郷の父の心に合絞り隨落ぞとは他目にも推量さるゝ昨日今日これほどまでに思ふのをすこしは汲分くれそなもの  
 心がらとて釣らるゝも庭のながめの筒井づゝふりわけ髪結なづけがありはせまひが此身より増りし人が戀そめて深  
 くちぎりのあるやらんと兼て辰巳に二女まではなれぬ縁のありぞとは知らぬお京が戀慕の情あはれと承知しながらも  
 紅楓とお房があるうへにまた此お京と契りなばこれもつながる従弟同士の安堵なりがたしと思案に呉たる案じ顔お  
 京も溜息吐ばかり惚た生根を思ふほど言ぬはこれぞ生娘のいふに増れるもの思ひ涙の貌を洗ふとにや勝手の方へ立て  
 行く折しも降来る春の雨花の露には父の思といふか知らねど出来の人は行なやむが多して中にも年輪四十の上を二ツ

三ツも越たらんと思ふ尼一人岑次郎が庭の垣にならびし木戸の小屋根の下へ立休らひ晴間を暫時待候なりけるが雨は  
 しきりに小止もなし最わびしげなる風情なれば岑次郎は見るにしのびず縁側より垣を見越ながら聲をかけて呼入れる  
 考「モシ 誰人か存知ませんが晴間も知れなひ空のけしきでござります其所は軒の雫が落ちていけませぬ此方へ這入つて  
 お休み被成ましト聲掛られて嬉し氣に悦ぶ尼の形容何となく氣高き風情のみか顔の色も白やかに艶々しく焚すがれた  
 る伽羅の香は今も残りて賤げならず由緒ありぬべき人なりければ岑次郎は庭下駄をはきて内より木戸をひらき 考「サ  
 ア御遠慮なく此方へお出なさるが宜ござりますトやさしき詞に尼はよろこび庭に入り横縁に腰をかけて叮寧に會釋し  
 ながら 尼「わたくしは法恩寺村の近所の者でござりますが三圍の稻荷さまへ參詣いたしましたの歸り道思はぬ雨に雨  
 具もなく難儀の所を情涙ひお詞に便宜まして暫時晴間の御願お邪魔を不顧休足をいたします佐野のわたりの雪の日を  
 貧と福との違ひながら御志は常世の君に勝る情の雨の段雪より深お恵みとそんじますト言廻したる其洒落は不禮  
 の言葉に似たれども昔語を引ことに主を賞する挨拶は時頼朝臣を新作たる芝居のおもむき松下の禪尼と見ても憎か  
 らぬ尼の風情に岑次郎はゆかしくおもひ烟草盆などさし出し爐にたぎりたる蘆屋釜の湯を汲紫蘇の香泉をいれて尼に  
 あたへ 考「サアお湯を上やせう即時にお茶をこしらへるけれどもマアそのゆかりを一口お上成被そして其所は端近だ  
 最些此方へ寄て雨の晴るまで寛とおはなし成被まし私に常世の 佛もなひがお前は故人中村大吉が 中村大吉は歌舞伎役者  
 なる名人 勤た松下の禪尼より増つた風俗でお在だが定めて常體の尼法師ではお在なさるまひ子エ奥ゆかしい様なお詞  
 だといふ中尼は岑次郎の顔を情々うち詠め 尼「モシ貴君は當時目上にうれひがござりますなしかにこれはお父上さ  
 まてござりませう然も目上に御兩人ト言つゝ目を閉指を折て何をか算へ 尼「不躰ながらお一人は伯父御までござい  
 ませう是は早く御用心を被成まして何卒愁ひのない様にしてお上被成ませト言におどろく岑次郎 考「ハテ子それは思  
 ひも寄らない事た勿論親父は病氣だが持病の輕いのだから何も其様に苦勞にする程の 尼「イエ／＼それは御油斷て



春色梅美婦禰卷之二了

ございます今日晝の内は變りございますまひが夜に入りますとお命の危ひ事がございます其時は早く當時までの醫者をして東の方のお醫師の薬をお上げ被成まし然もなさらないと御全快はございませぬ又伯父御さまの方は旅の路での御難儀がございまして其上日數十日の中に盜賊の御災難があつて是もお命にかゝはる大變夫をお救ひ被成ますには三十里程の行程を明後日あたりから貴君が支度被成ましてお迎ひなされないければ助りませぬ其代り然被成と當時貴君が種々と御苦勞になさる御三人のお身の上も御案じなさらずに絆が熟談様になりました衆人御繁昌になりますか  
 らかならず左様被成ませト言出したる尼の言葉疑はしけれど親父と伯父の旅も病氣もさし當る事にしあれば空言とは氣なしもならぬ大事の教へ岑次郎は暫時言葉もなかりしが 考イヤこれは思ひがけない事を聞きますがお前は何様して其様なことを知ってお言ひさなるか寔に奇妙な事たねへ 尼なる程お疑ひも被御座ませうが雨舎りの御恩返しとぞんじて私の存知た道をもつてお知らせ申ばかりでございます御念ばらしに最一事申ませう今貴君のお心の中に戀慕の情がありながら遠慮してお在被成事がございませうがこれも前世から定まつた御縁で義理ゆへ彼是と憤んでお在被成でも両方がお離れなさる様にはなりませんねト心の底まで見貫く神眼通の尼の一言少しも違ぬ様なれば疑念を晴し岑次郎 考なるほど身に覺のあるお前の教道實に感心いたしましたがお前はマア何様いふお方でございます子エト尋ねに尼も膝を進 尼ホンニ貴君のお心では女の身にて仔細らしい高慢な奴だと思し召しませうが何の縁でか人相の道を好みまして若年時分から精を出して其業を習ひ覺へて一ト通りの事は少しも違ひのなひ様に當ことばを我ながら女のいらざる無益の所爲と途中捨て仕舞ましたが兎に角おぼへた業くれが他の爲にも益になる時がありましたゆゑだんだん尊び相學易術辨へて察れば此身の上も不及願ひに心を痛め苦を求めぬの愚痴の念が悟られました儂倅と過し事をも語り出たり





江戸 爲 永 春 水 著

第五回

這より暫時春水が老婆心にてつゞる異見ぞと察し尼の詞を假用て兒女達へ教訓すると心得たまへ然ば例の人情本の讀くせならず古き草紙を其儘にうつすがごとし再説彼尼は岑次郎に向ひ〇問ず語りの聞くるしく言ずもがなと思さんが一樹の蔭の宿さへ他生の縁と聞侍ればゆるして聞解たまへかしそも我身の上は幼き時に父に別れ母と兄とに養はれ世に便りなく活業せし中母もほどなく身まかりしに兄なるもの、身もちよからず心も悪き不道人酒と色とを過すのみか勝負事さへ常の所爲只一人なる妹をも哀とは思はずに其身の強慾非道から此身の十二になりし年廊の娼家に賣れはべりたまへ人に生れ出幼き節より苦勞をかさね他家の娘の花の春正月小袖の美ましと思ふ間もなく川竹の流れの中に沈られ浮む瀬もなき悲しさに涙で過す月と日は夢のごとくに成長夜を畫とする勤の身友傍輩や紋日の氣難苦しみ多き廊の常敷きの數と客人の逢さ切るさの其中に人相をよく觀察お方永く通ひてこの身を哀れみ相學の事を信切に教へられたる其後に自身で移す鏡の表情此身の人相を考へ察るに幾度か欲目で見直し見改めても自然に定まる運不運面部の備へ我ながら備はらざるを觀察てはまた詮方もなき因縁一生涯を浮草の憂を重ねて開運せず孤獨の相と悟りしより悲しき中にも發明し天をもうらみず情なき人を咎める念を憤み迷ひの雲のはれし後は他人の榮へも羨ず昨日と暮し今日と立。さりとも兎角眉墨のいたづららしき髮化粧。心細くも老にけるかなと詠れし古き歌をさへ今は我身の上と

諦め最恥かしき苦界の年の明るを待て其節より直さま姿を此ごとく改めて心も清々しく縁を願ひし黒髪を捨て衣を墨染にかはる浮世の吉凶を心に止ねば氣も安く一所不住の安樂さ我身の一代を知りたるは人相を學びし此身の徳幼なひ節の儘にして中年相を觀事を習ぬならば一生涯及ばぬ願ひに心をくるしめ叶はざることに氣を惱まし安堵する時はあるまじきに數ならぬ身も陰陽の道と五行の生刻を學びしゆゑに貧しきも苦にせぬ今の悦ばしき貴君も年の壯く在せばまだ種々の苦と樂が此後とても在さんが心を鎮め身を養ふ事をたしなみ給へかし長物語を申せし中に雨は嬉しく青空の日はまだ西に没たまはず又後日今日の御禮に參りなんと云つゝ縁を這下りて飛石づたひに庭を出るを岑次郎は立上り今暫時とどめても答さへなく出行けり世にも稀なる尼ならずや〇是より又例の詞癖にて綴る

岑、イヤ奇妙な人が雨舎りをして思ひがけもなひ事を聞せられたが何様したものだか何にしても本宅の爺さんが今夜大病になると聞ては斯しては居られなひ伯父さんも道中に異變があるといふはなしては捨て置れなひ事たといふ所へお京は立出 京兄上さんお見世の辨助どんが參りました 岑、ハテナ何ぞ用が出来たのか知らん此所へ呼ぶ吳な 京、ハイ只今足を洗つて居りますといふ所へ手代の辨助は勝手口から縁側の方へ出來り 辨、はい御母公さまから御口上でござります 岑、左様か何の御用だの 辨、イエナニ御用と申すのでもござりませぬ御母公さまの被仰ますには今朝程から大旦那さまの御持病が例よりか何分お悪ひ様子で被御座ますから今晚は些お見舞ながらお出なさいませし夫とも貴君もお氣遣くは明日でもよろしふござります多分お案じ被成ほどではござりませぬが念の爲にお知らせ被成ます夫に青森の旦那さまも御道中で御病氣で何とかいふ宿に御逗留だと申て御手紙が參りましたといはれて偕はと思ひあたる尼のおしへに符合の知らせ胸轟きてあきれしが 岑、ナニ人が不來でも今日は今ツから爺さんの見舞に行ふとおもつて居た所だ直に同道に行ふお京さん淋しかるふが能留守をしてお吳よ夫とも淋しくツて行なひならば私と同伴に本宅へお出か 京、イヤお兼どんやお隣家のお繁さんと遊びますから淋しくはござりませぬお留守を致しますヨ伯父さんの御



病氣が何卒早く全快御成被成ばよふござりますヨエ先刻のお咄しの様子では、考エ先刻のはなしとは。ハ、アお前もアノ尼の教て呉た事をお聞のか、哀イエ委しくは聞ませんが何だか種々と卜占の様なことを申ました中に、考ム、ウお前の氣にかゝるのは伯父さんが道中でお煩ひだといふ事の噂をお聞のだからそれが私が今夜を過せば爺さんのお醫師さんを症に合たのと取替てそれから直に途中までお迎へに行からお案じてなひヨト他の思ひを忽地に察してや、さしき岑次郎が心立なら姿なら申ぶんなき好男但し浮薄てなひゆゑに惚れられもする惚もして皆それ〴〵に不實を不爲愛相盡さぬ了簡なれば他見て見るより苦勞も多く凡程よき人と他人に賞られ娘や唄女に惚らるゝは中々心配のものにして容易き事にはあらざればかならずしも羨み求めて好男と呼ばれたがる事なけれ又人情には少しも行渡らず衣裳形容と手道具にばかり氣をもみ三文も錢の入事には友達へなすり付け他見第一口先暗愚驚しの若衆當世の流行なり嗚呼心底恥かしとは思はずや流石に人情本でも讀たまふ人々には然いふ様な氣障人なし自然世間に通達し給ふゆゑか夫信實の人情とは何をかいふぞ萬事實意にして察心深く物のあはれを知つて腹を立事なく家業を精出し折々は身分相應の樂をして保養を心掛他に否がられぬ者をこそ能人情にゆきわたる好男とは賞すべし不用お世話は置にしてお京が惚たる心の中を再應しるせば岑次郎が出て行たる其跡に遊びに來たるは隣家の娘お繁と稱婀娜女、しげ「お京さん只今はお兼どんをありがたふモウ、今日は偏屈屋の老女さんが朝ツから母人さんの所へ咄しに來て子、哀ヲヤ偏屈屋とは何處でござりましたつけ子、しげ「ホンニまだお前には咄した事が無ツたつけが子アノ米屋の家の伯母さんで以前藤替の御武家に御老女を勤て居たといふ老女さんだが子モウ、否な老女さんサ夫が面白くもなひ他人のことを悪くいふ噂ばかりして居ますから家内に閉て居るのが否て、ならなひところへお前さんが呼によこしてお呉だから能幸ひに逃出して來ましたは、哀ヲヤ然てござりますか御老女といふものは根生のわるひに極つて居ますか子へ、しげ「ヲホ、然てもありませんが老女だからわかいものには氣に合なひのでござりますせうヨトいふ時しも風がつたへて聞ゆる淨留理

「まよ、田舎も住よかるとは好た同志の身の願ひうら山賤の手業さへ何日おぼへて繕はぬ笑貌に愛もこぼれ萩下略

しげ「ヲヤ、美音だねへそして何様も淨留理の文句にはモウ感心ことが作つてあるねへ、哀私には何様も不解事がありまは田舎に生れたものは自然てに野暮に育つから悔しうござりますヨ、しげ「ヲヤ、然お言だがお前さんを田舎に育つたお嬢だといふものは一人もありません子私なんぞこそ繪土ツ兒の顔よごしといふてござりますはト正體もなき事をいふ事にはや春の日も西へ没入相の鐘しづかに聞えもの淋しくぞなりにける、是よりお京が父の粹岑次郎の父の粹などを續けて説ば其道理は解りやすかるべき事なれども例の人情本の看官に怠屈をさせ申す様になるべき事を恐れ此次の處はおなじみの木八婀娜吉などののはなしに移りて岑次郎の父と伯父との談は後々著て看せまゐらせんと言

第 六 回

梅の花折らばこぼれん我袖に匂ひは移せ家土産にせんト素性法師の詠れけん實に花を惜み花を愛する深き心は左こそあるらめ寒梅の雪間に開く頃よりして立春の日敷を算へ花曆に其季候を知る事をはかる風雅の遊人又は物いふ花の手を誘引梅見を樂しむ舟の中洒落に杉田の遠路を好むもあれば臥龍梅の草廬を問ふ古風振古きも捨ねと新しき花を尋ぬれば百花園も早年立て新梅やしきとは言ぬぞ流行に遅れざる人と喜久得が庭の梅文好むてふ客人に酒をたしなむうかれ男も四季の詠めに欠る事なき東の名所こそ浮名に隅田川の甲斐あるけしき都鳥我思ふ人と同じ舟に乘ても思ふ儘ならぬ戀の癖から氣にならぬ所爲もうしやの雁木に着人種々の梅見舟堤の上より棧橋へ下る兩個の手弱女の梅の笑



顔にまだ咲ぬ櫻の目元ほんのりと畫し美人に勝りし唄女前髪の斑々するを細少指にて撫上ながらあだ吉米さんマアお待ナ子エ根生の悪ひア、苦しひト笑ひながら雁木を下るは例の婀娜吉なり料理茶屋から欠出し戯れに路の前後を争ひ來りし事と推察たり先に立し米八もうつくしき貌を櫻色にして彼りしき眼元でちよいと脊後を振向眞白なる齒を少し出して莞爾と笑ひ 米「ヤヤ、何だねへ何も根生の悪ひ事を仕も爲なひのに其様な事をお言だヨお前が足が遅くつて負た癖にヲホ、ホ、ホ、あだ「夫だつてもお前なんぞアサアツ競だヨといふより早く私を突除て先へ欠出した癖にア、引無術々々ト胸をさすりながら棧はしへかゝる船頭二人舟より上り笑ひ顔にて 舟「ア、モシおあぶなふ被御座ますぞ何を其様に喧嘩を被成のでござりますア、マアお前へお這入 米「ア、何故だエ 米「なぜでもサト眞貌に成て際にいたる あだ「サア米さんお這入な 米「ア、マアお前へお這入 あだ「ヤヤ何故だエ 米「なぜでもサト眞貌に成てイみ居る あだ「アレサおかし子エ何故然して居るのだ子エ エ米さん 米「ナニ子些見て居様と思ふ人が有からだヨ あだ「何を見るのだへ衆人は何様でぶらぶら來る筈だから打捨てお置な私やア先へ這入るヨト言ながら家根舟の家根裏へちよいと手をかけて膝から先へ客間へ這入る米八は舟の表に立て居て 米「エ、モウじれつてへヨウト何をか氣にしてじれながらこれも程なく舟へ這入る船頭は家根越に艫の方へ行棹にて並びし舟と小べりのあたるを乗開く一人は家根の内へ向ひ 舟「米さん何を其様に肝癢をお發し被成子後から衆人さんのお出被成までまた御兩人でお樂しみ被成ましお燭を付ませうか 米「ア、アイありがたふヨ何最早寔に今日は子酔て行なひヨそれだから些醒してまた看ませうヨ ノウ婀娜吉さん あだ「ア、然被成ナそれは能がなにをお前はじれるのだへ何ぞ氣に障る事でも有つたのかへト聞けば米八は莞爾として 米「ナアニ何も其様なことがありは仕なひが子ト笑つて居る あだ「何だか寔に分不解ヨモウ私やア又じれツ度なるは子ヨウ米さん何だかお言なじれつた子エ 舟「アハ、ホ、ホ、兩女でじれて早くお仕舞被成米あだ「ホ、ホ、ホ、ナニサ何も其様に氣をもむ事もなひが子丹さんが子 あだ「エ 米「ひよつとすると此所まで來る筈だ

からサ あだ「ヤヤ、實正にかねへ米さん空言だらう 米「イ、エ實正サ あだ「なんだか啞らしい様だ子へエ啞かへ實正かへ 米「ア、トわらつて居る あだ「エ、モウじれつてへ實正にお言な子エ 米「夫御覽お前もじれるじやアなひかねへ あだ「それだつてもお前がじれつた言様をするからだは子實正じやアあるまひ子 米「どふだか あだ「それ御覽な 則じれさせる様な事をいふじやアなひかねへ 米「お前が其様に氣をもむから言ふ子 あだ「ア、實は子 あだ「丹さんが來るかへ 米「啞だヨホ、ホ、ホ、あだ「それ見たことか啞だらふと思つたけれども 米「けれども胸がどきどきしたかへ あだ「ナアニお前じやアあるまひし 米「ヤヤ、否だ子其身も私が然言つたらば顔色を變らしてじれつたがるじやアなひかねへ あだ「ヤヤ大騒にお言だヨまさか然でもなひは子お前も又何故其様な出たらめを言つたのだエ 米「ナニ子ちよいと雁木に立て居て見たらば子斯いふ時に丹さんに約束をして後から來て貰つたことも在たツけと思つたからお前をもじらして遣ふとおもひ付て然言つたのサ あだ「左様か子へモウじれつてへ乍併何様も實正でもある様だハ 米「ヲホ、ホ、相變らず疑り深ひねへ あだ「ナンノお前だつてもうたくり深ひ癖に 米「そりやアまた似たものは夫婦じやアなひかねへ あだ「然サお前と丹さんだは 米「私ばかりかへお前は夫婦じやアなひかねへ あだ「そりやア夫婦の氣で居るけれども 米「否にお言だ子エ夫婦の氣でなひといへば丹さんに言告て遣ふと思つたけれどもマア堪忍して上様子あだ「ナニ堪忍して貰はなひでも宜ヨ堪忍爲なひのならば何様被成だ 米「丹さんの代りに斯して上るヨトちよいと爪捻る あだ「アレサ痛いヨお前が然すると此方も負やア爲なひヨサア私が丹さんの代だヨ。コレ其方丈夫を爪ツて濟ふと思ふか 米「ヤヤ、否なおさん茂兵衛だ角太郎さんの所なんぞへ誰が行くものかホ、ホ、ホ、あだ「ホ、ホ、ホ、アレサ折角私か丈夫にならふと思つたらお前が言紛仕舞から行なひヨホ、ホ、ホ、ト和合同志が睦ましく最初の恨み引かへて心底盡の姉姉張あふ意地の仇事も解てかたればなかに素人の不及人情なるべし 米「それは左様とあんまり手間がとれる子エ あだ「ア、子エちよいと看てもらはふ力子 舟「おむかひに行て來やせうか子 米「何卒然してお呉なしかし行な



ひても宜らふか婀娜さんと私は寔に酔てせつなひから先へ行て舟に寐轉んで居ますと言つて来たんだから跡で落着て遊んで居るだらふヨ 舟「左様でござるますか私ち等も大そふに酔ましたから兩人ながらおいとまを貰つて先へ来て一眠入能心持にやらかした所へお前さん方の聲がしたから漸々に眼が覺たのサお前さん方も衆人さんの来るまで横になつてお在なせへサアそして酔をさます薬をあげませうこれを少し上ると又直につけて呑ても酔ひませんぜ 米「ヲヤヲヤありがたふ梅の雪かへこりやア酒の毒消には寔に妙だヨ 米「ドレ私も貰はふヤア能句ひだねへ 舟「サアお湯も二ツ汲ましたヨ 米「あだ「ありがたふ」お前よく此梅の雪をもつて在だツけ子 舟「エ、昨日やましろ河岸の旦那にお貰ひ申ました 米「ヲヤホンニ津藤さんは久しく私達を呼んでお呉てなひねエ 米「あだ「ア、その筈サ衆藝人がはなれずに付て居るもんだから滅多に私達まで呼れる様には出来なひヨ 米「ドレ此横にならふやアお前もお寐轉びなトちよいと横になる婀娜吉も横に轉び 米「あだ「米さんこれをちよつと枕に被成ヨ房吉さんの撥箱があるヨト探して遣る 米「ア、ナニ能ヨお前のまくらに被成ナ 米「あだ「ナニ私きやア這だヨトいひながら茶の口取をいれて来た金平糖の菓子宮の六角にこしらへた振り出し箱をまくらにする 米「あだ「ナニ私きやア這だヨトいひながら茶の口取をいれて来た金平糖の菓子宮の六角にこなる段取なし何れの巻を讀くらべて合事なるかと迷ひたまはん夫は次の條下を讀得て知るべし

春色梅美婦禰 卷之三了

春色梅美婦禰二編序

人情一家言の元祖。梅唇を辰巳園に開闢より以來。惠の花の四方に薫ひて。英代談語の興味。いよ／＼ふかきに。猶篇述す梅美婦禰。看官大人の好評好らん事を。板元はもとより爲永社中に至るまで。日本國中は大平一流。和語が通辭るほどならば。唐天竺の端土へも。御鼻負ねがふ米八婀娜吉。實に古今の果報者。春鶯が生國てすら。米八の所行をしたひて。米吉と改名せし。歌妓の現に在にて知るべし。はつか兎の毫の筆頭より。愛敬は世に婦佳川の。狂訓翁は大江戸の玉川なりけり。其處で尾張の春鶯も。身は御當地に壽美だ川。梅見の船の臙へなりとも。わりこむでもらひたさ。せめて師匠にゆかりの色香。萬代不易愛敬の。こぼれを。此處に拾ひがき。是でも序文の代作へ。御邪魔ながら願ふになん

東都人情本一流の元祖。狂訓老人の門葉にて

尾張名古屋の好男子

今年よりして江戸ツ子の仲間入する爲永連

市谷 芳訓亭爲永春鶯謹述

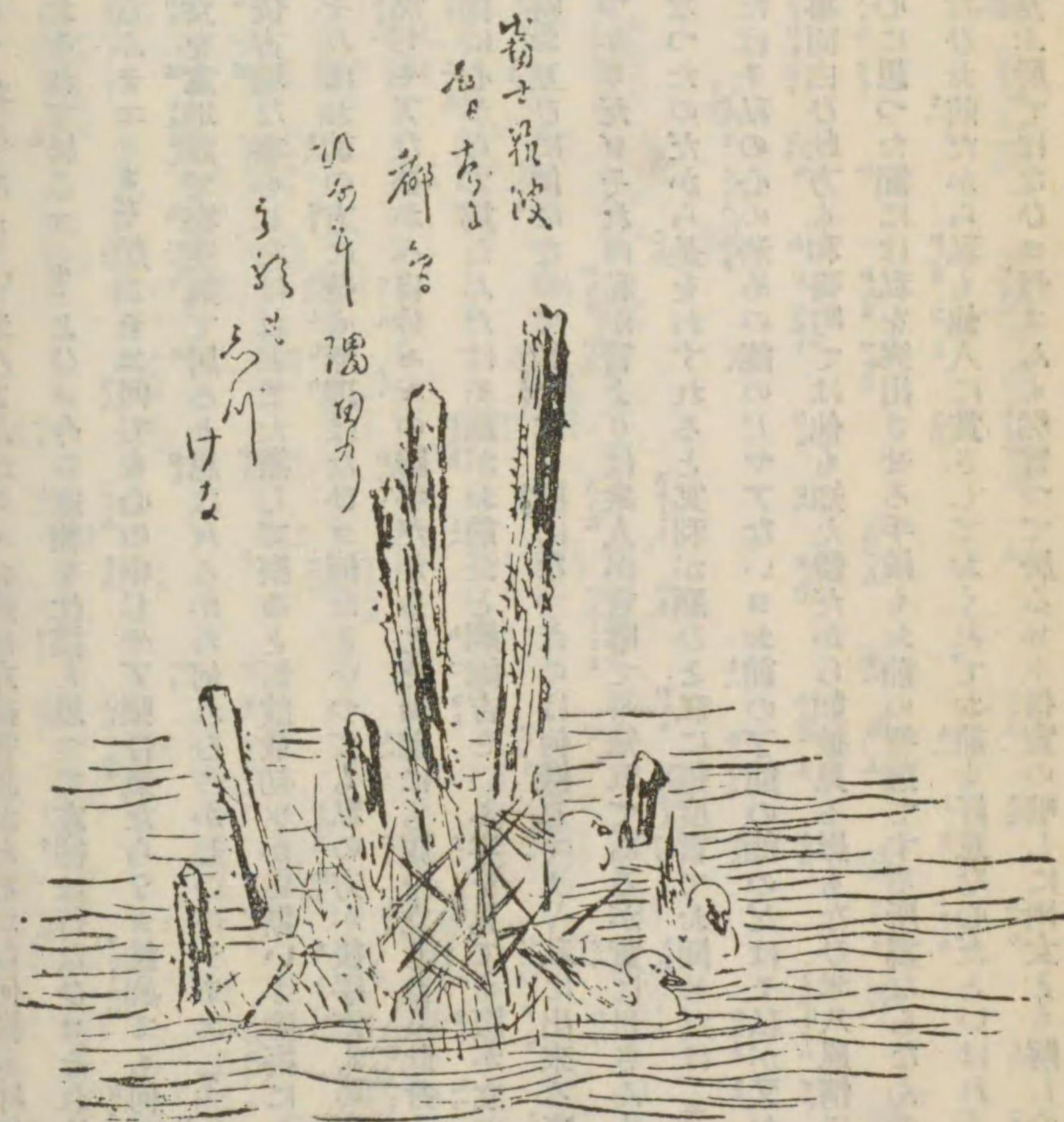


第七回

あだ「子エ米八さん自分勝手だが今日の様にして来ると気が張らなひから實に酒も呑過るねへヲヤお前の袴元の風體が違つた様だ子 米「左様かへ否だねへ向ふの兼吉さんに剃てもらつたが子最初に抜とき二三本抜込んだ様だと思つたつけ私やアモウ袴元なんぞを無理にこしらへた様なのは寔に嫌ひだヨ あだ「ア、私もサそれだが子お前の袴は何も否に剃てありは爲なひヨ格好よく剃てあるから夫て聞たのサ 米「左様かへそれに此程は間がわるくつてお前と剃合なひから何様も氣に入らなひ様だは あだ「然かへ此頃にもまた剃合ふ子エ 米「ア、ドレお見せト婀娜吉の袴を撫て見ながら米「ヲヤお前のも例より些と格好が違つた様だヨ誰に剃ておもらひだ あだ「誰だツけかヲ、忘れた。アノ何サお前が可笑嬢だとお言のおとめさんが無理に剃て呉たんだア子 米「ホ、否な嬢だねへお前また去日中の様に丹さんに袴をぬいてお貰ひなら能のに あだ「ヲヤ何日私が丹さんに袴なんぞを剃てもらつたらふねへ其様な事をしておくれの事は一度もなひヨお前は毎度丹さんに袴をこしらへてお貰ひか 米「ア、其身の氣に向た時は何時でも剃て呉るヨ今更お前は啞を吐ねへ あだ「ヲヤ何故エ 米「それでも丹さんが毎度然いつたものヲ婀娜吉の袴はお前のより袴足が多分とあるお前のは法體袴だのなんのと私を悪く言たは子 あだ「ヲヤ啞をお言な子エ ナニお前の袴足が悪ひものか子そして私袴の袴を剃てお呉てなくつても袴を見るぐらひの事は有ふじやアなひか 米「左様サそりやア同床に眠る時にはねへ

あだ「ヲヤ否にお言ひだねへ 米「夫でも剃て遣る時の事を然言たものヲ あだ「左様かへ夫じやア言ふが子二三度丹さんに袴を剃てもらつた事もあつたヨ 米「それお察ナ實は丹さんが其様な啞しを仕た事はなひが子然言つてお前を齷て察たのサ あだ「ホ、おそろしい米八さんだ子エお前は左様智慧があるから何様も叶はなひ夫だから丹さんが寔に〳〵お前にはおそれて居るヨ 米「よひヨ今の返報を仕様と思つて左様は行なひヨそれは然とまア房吉さん衆さんは何様いふ了簡だらふ子エ あだ「然さ子エ何でも心の中じやア張合氣だらうヨ姉娣でも何でも此道ばつかりは詮方がないヨ岑さんも兩女を意地競て察度氣で居ると思はれるから何れむづかしいのサ子エ 米「一旦はお前も私も意地をはる了簡でお互ひに依古地な事もしたけれどまた斯して察ると何故最初ツから斯いふ驪梅にして貰はなんだかと思ふ様だヨ あだ「ホンニそれはお前の方に些も無理はなひヨ何だといつても私の方が後手だものヲ他人業にしてお察な先の方へ肩を持つのが當然ぢやアなひかへ自分々々の勝手だからこそお前にも腹を立したり此身も無法に氣をもんて他人に後指をさゝれる様に心がらて爲たんだは子私がお前だと婀娜吉といふ字を見ても腹が立て風上にも置たくなひのだけれども斯して當時お互ひに便になつて和合する様になつたのは何様して〳〵私に出来る事ではなひヨ不殘お前の心のおさめ様が能ばつかりだヨそれは私が言よりは衆人が言噂でも知れてあるが實に丹さんも夫ばつかりは米八の了簡一ツで斯いふ譯になつたのだから是をわすれると冥利が悪ひと私に毎度言てお聞せだは 米「お前の様に然行届ひた事は言はれなひものだは子私の心の治めの能のじやアないヨお前の了簡の能のだけは子私か又お前ならば米八といふものが以前に在ば猶の事面白ひ此方も和哥町では他も知た體だから如彼見る影もなひ米八風情に張合負をしては他人のの笑ひだとお前の心に思つた節には私を突出させる手段もお前の智慧とする所爲ならなんの造作もなひ事だらふけれども其意が如在てなひお前だから私も他人に賞さしておくれとお前も好意な心だといはれる様に噂をさせるのは何様しても私なんぞが及ぶ所ではなひヨ丹さんも然言つて居るヨト信實の啞しに兩女とも解し心の猶やさしく酒の癖とて





吉野の舟  
名 吉野

舟の先へ立出  
土手を看上ながら

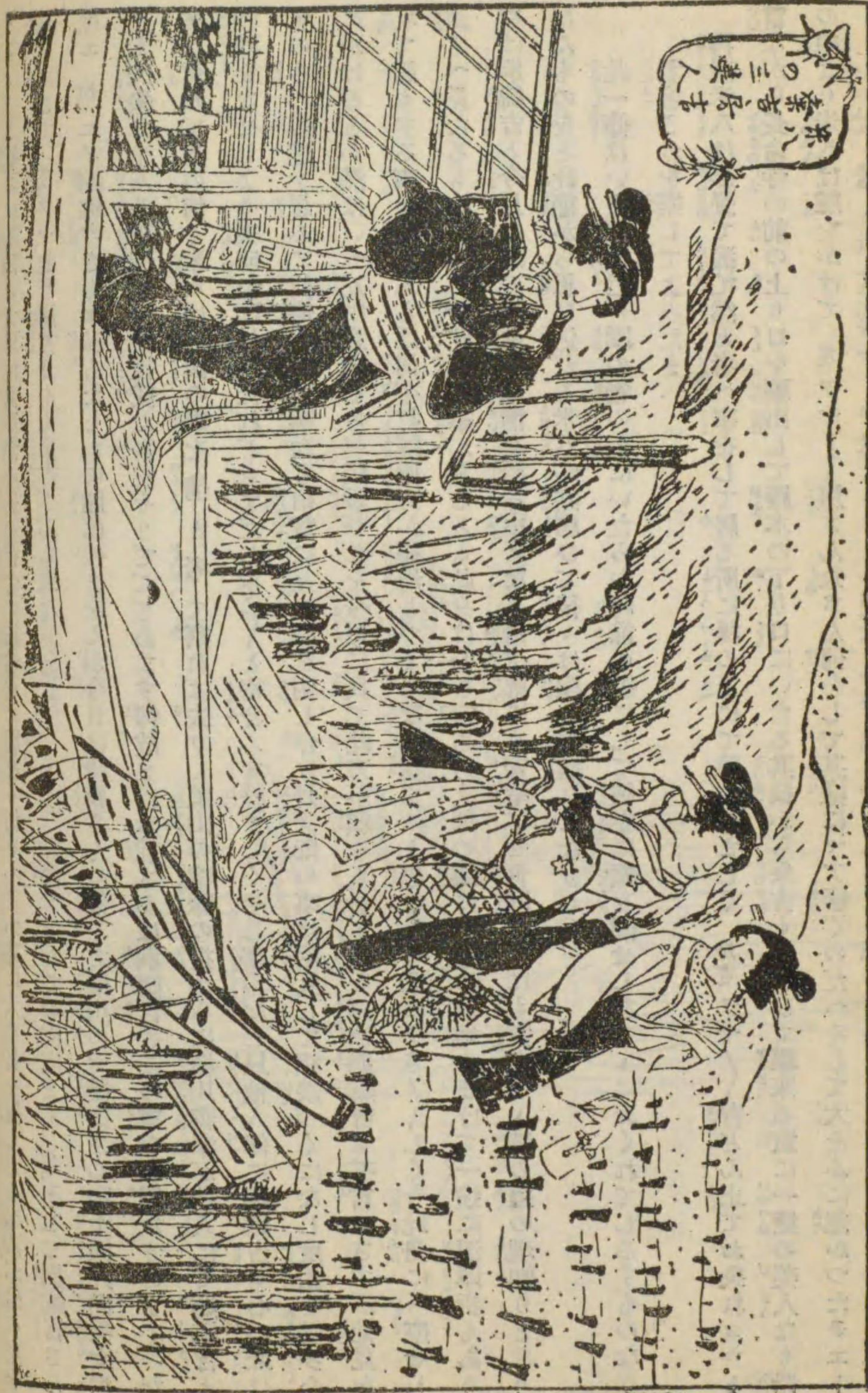
米ヲヤ  
米ヲヤ

うとくと眠るは隅田の太郎河島高瀬の船の行合に田舎詞の聲高く何をか言が耳に入り目を覺したる米八が船の中を  
見まはして 米ヲヤまだ房吉さんも衆吉さんも來なひのかへ 船どう左様サまだて被御座ます 米、そして婀娜吉さん  
はエ 船、エイ婀娜吉さんエ私もたしかに聞はしませんか今日は津藤さんの催して櫻川のヤ榮次さんと十様凡而唄女衆  
と大夫衆で十人斗平清へお出被成た筈だそうでござります何故またお前さんは婀娜吉さんの事をお聞なさいますのだ  
子ト言れて氣の何く米八は前後の事を情と考て察れば去りし頃山の喧嘩の折からに櫻川善孝が仲人にて婀娜吉と  
和睦をなせしより表向をば打解たれどもまだしみぐと寄合ふて陸ましくせし事もなし只他人傳に婀娜吉も心の底は  
世の中の義理を思ふて後悔し成可事なら信實に互の心を明し合ひ丹次郎の事は兩女して相談つくになし度由を朝夕心  
にかけるとか然はいへ互に意地くらべ張争ひしを今更に負て此方が頼みもせず誤り詞は婀娜吉も不言はさすが他見を  
恥て居もする事か然もあらば何卒打解兩方が頼母しづくになし度ものと思ひしゆゑにまさしく今此舟に一座せし  
夢さへ見たるものなるか譬此後何事があるとも此身は心を定め丹次郎の爲には戀の意地もまげて一途に濃厚折もあり  
なば婀娜吉と今見し夢の睦しき風情を語る中となり丹次郎にも安堵させ世間の人にも賞らるゝ情の道の理知りとなり  
なんものをと此節から思ひ込だる米八が寔届ひて後々は願ひの通りになりしとぞ

此一條は  
看客これを察してよみたまへ

再説米八は夢覺て猶忙然と考へ事をして居る所に堤の上にて聲かしましく 房吉ヲヤ、吉どん止てお呉れヨウト  
言ながら長命寺の前の上り口を騙出して雁木の下り口にいたる其後から衆吉もつゞひて驅來る實に一雙の美人なり船  
の中より米八は聲をかけて 米ヲヤ、房さん衆さん何をして其様にマア騒ぐのだへそして大そふに遅かつた子エト  
いひつゝ舟の先の所へ立出土手を看上ながら 米、三人で恍惚合て居るのだから長ひはづだ子エ 房ヲヤ、啞をお言





な何恍惚て居るものかチエと言ながら雁木を下りて棧ばしへかゝる 桑アレサ房さん何て私を置逃に被成だ子へト騙  
下りて先へ舟に乗にかゝる  
岸に在む三美人三幅對の花の貌その畫像は國直子がさし畫に摸寫せん筆にて知るべし  
金の波を樓から見下す河岸に蘆の瀬を切開きたる新規の堀割うしやの雁木へ眞直に乗るも嬉しき自在の葎の浪  
間をわけて都鳥も遊ぶなるべし

第 八 回

歸るさの道に關屋の里もあれや隅田河原のあかぬ詠めに。とは照高院御門跡御下向の時隅田川の船の中にてよませ  
たまひし御歌なりとかやそも〜此隅田川の説むかし彼是と言ぬれど古のさまは知らず今の詠めの風流なる四季の  
風景和らかに流れに遊ぶ鳥の名の都にまけぬ名所とは都人も賞られしぞ東へはむきの耳言にはあらず實に絶景の詠め  
にて猶更ものいふ花の堤に絶ず舟と陸との遊び雪月花の風流三國無双といふべきのみ爰に彼米八が乗りし家根船はう  
しやといへる茶屋の雁木にもやひありしが米八は夢の覺たる折しも茶やに残りし桑吉が房吉の脊後より欠來りて舟に  
乗しゆへ ふうアレサお待な子へト争ひながら乗後れ急げばよろめく下り坂舟頭は飛出して「ヲツトおあふなふご  
ざのみますト手をとつて舟の中へ伴なふ其跡より船頭吉五郎折詰を三ツ四ツ手に提げて岑次郎の供をしてぶらり〜と  
堤を下りて 吉サア旦那御乗船被成ましおあふなふござのみますヨト言ながら港板を押へる 定ヲイ來たト手を出して  
吉五郎の持來りし折詰をうけとり 定旦那大分お手間が取れました子ヲツトおあふなふござのみます 桑アイ〜大丈  
夫サドレト言つゝ港板を引よせる様に手をかけてちよいと飛乗り見れば今先へ乗たる桑吉房吉米八の三人ともに寐た  
る風俗をして居るゆゑ 考ヲヤ〜不殘寐た振をして居るのか 燕が巢を造た様だトいひながら客の間へ這入る「ヲ



ホ、ハ、ト三人が一時に起上る。米ヲヤ岑さん寔にモウ待草臥ましたらサア此所の眞中へお這入被成ヨ  
くめふき二人、サア此所へお出被成まし。考、ドレ、如斯かア、チツト突屈だナア、引酔たく、何も角もわすれるやうだ  
定、今日は旦那おめづらしく大呑を被成ました子。考、何親した事か其様に呑も爲なひで強勢に酔やしわ前後をわすれ  
る様サ。イヤ忘れるといへば今の枝を何様した。考、今の梅の枝かへ水溜の中へ手桶のこたなり入れてござりますヨ餘程  
能木振だ子エ。考、然かそれは能お心付れました子堀へ鳥渡寄るから持て行て遣らふと思つて折らせて来たのだが喜久  
鳥が庭の梅は別に能ように思ふから可笑ものだ。米、イ、エ何様しても別に能ござりますは。ふき、アノ梅を慈愛がるも  
のはお祖師さまを信心するものだトサ。くめ、ヲヤ、何だか些不解様だ子ホ、米、ヲホ、實にすこしわか  
らなひ子エ。考、折節如此わからなひ事をいふから可笑ヨ。ふき、ヲヤ、それでも淨心寺のお説法で然言ましたは。考、そし  
て梅を變愛がる人といふも可笑梅を愛す人と言ば能のに御説法で然いつたも無もんだハ、舟、アハ、女中衆  
のお供をして歩行と年中妙な言ぐさを聞まずセハ、サア出しますヨ宜ござりますかへ。考、ヲイよし、考、能ヨ  
お出しナ。舟、ヲツト来たト水棹をとる。くめ、ヲヤ、定さん新規の堀割をお通りな。定、ハイ、新規の堀割を通りますほ  
んとうに此所から眞直に堀の棧橋まで一漕に乘で行れるから何様も餘ほど奇妙でござりますヨ子エ旦那。考、然サのふ  
成程山谷堀の衆人も活氣な事をしたヨノウ。舟、左様サそれといふのも庄家さまだの舟が、りのお役人様だのがお慈悲  
深ひ御心から出来ましたのサマア私等をはじめ向ふへ来るものは大きに宜ござります向ふ越の衆もよしサわづかの河  
普請の様だけれども幾程の人が悦ぶか知れやア仕ません。考、然サのふ左様言中に此所が新堀の堀わりだハ、米、サア  
米、サア、衆さん新堀の所へ来たヨホ、くめ、ヲヤ、然かへ實にねへ眞直だけ好情な様だ子エ。考、アハ、本か  
繪じやアあるまひし何でも新らしい事をば新板といふから可笑ノウト言折から舟ははやくも金波樓の下の棧橋へ着て  
衆吉房吉次郎は山谷堀の船宿若竹のお津賀の處へいたる米八は衆で岑次郎に頼み置し私用おれば能に寄きて此

糸に逢ひ彼おるらんの情人半次郎の身の上の事などを信切に尋問此糸の爲に廊外の事は米八の身に承諾て世話をす  
は丹次郎と其身の中を此糸に首尾して貰し恩返し這米八が實情の生質ぞと察したまへ爰に又岑次郎は衆で戀が窪の廊  
に家業の事用談ありて若竹に衆吉と房吉を留置只一人にて出行若竹の二階には姉二個がさし向ひ意屈なれば四隅  
をながめ。ふき、お衆さん淋しひねへ。くめ、ア、意屈だヨ下にも衆さんばかりだは。ふき、ヲヤお津賀さんはエ。くめ、ア  
ノウ今子司さんの所まで急用があつてお出だとサ。ふき、然かへ道理でしづつかだと思ひましたは岑さんも能加減に歸  
つてお出なら宜ねへ。くめ、ヲヤ、お前の様に岑さんくと戀しがる者もなひねへ。ふき、ヲヤ何も戀しひといふのじ  
やア有ません子お前じゃアあるまひし只斯して居るのが意屈だから早く歸つてお呉ならば能と言たんだア子お前の  
様にお屋敷者じゃアあるまひし何其様にしつゝこく爲ますものか。くめ、ヲヤ否な事をお言だ何時私が濃濃した事があ  
ります其様な事を言てお呉てなひヨ氣障だねへ。ふき、ヲヤ大變に腹をお立だ子エそんなに怒心おなりて無ても宜は子  
おかアしい。くめ、ヨイヨ可笑くつても何様でお前の様に才智じゃアないから他に馬鹿にばかり被爲居ますヨ。ふき、ヲ  
ヤ誰が馬鹿にしたへ。くめ、アイサ誰だか當て御覽な。ふき、何様して知れるものか子お前に付て歩行は爲まひし  
くめ、ソレお察ナ。姉のお前でさへもその通り馬鹿にして言込るものヲ他人は馬鹿にする筈サト言ばお房は憤然となり  
少し膝を突寄ながら。ふき、ヲヤ私には知れなひから知れなひと言たのがお前を馬鹿にするとお言のかへおかし子エ  
其様な無理を言もんじやアござりません何程目上のお前だからといつても餘りだねへト言をお衆は聞よりも眼に角た  
て、お房を見つめ理害を言んと座をすゝみしが追に馳しき御小姓育ち情前後を考へれば身のいたずらから兩親のゆる  
さぬ戀の私事其罰ゆゑに我夫と思ふ男を姉の爲にあらそふ様なる此仕儀を他人が聞なばはづかしき姉弟して戀草の  
結びも遂ぬ所爲とや言れんたしなむ場ぞと堪へつゝ顔をそむけて物言ずお房も無口で他所目をなせしが不圖目に留り  
し鸚鵡石の古本を手に取上ひらきて見れば正に是



おのゝ

岩井紫若

松ノ木もさうもさうも父のや母の別もある  
 おのづから血脈の信情あればその心底米八仇吉の旨と違ひ情と義理の意味ある體を推量して讀み給へといふ  
 又曰此次の巻は春も過卯月もたちて臯月より六月にいたるものがたりなり

ト讀見て俄に心付宮城野信夫を其身の上に思ひくらべて恥かしき姉へ不幸の我儘勝手今さら何と言解もなま中隔て改らば腹立事も餘計ならんと思索してはや涙ぐむ女の情 ふさ姉上さん くろエ何だへ ふさコレ御覽此時の芝居は紫若が寔に能かつたじやアありませんか子エ くろアそれは梅が死去少し以前にした白石齋のあふむ石だヨ私

ヤア先刻一人で讀んで居たヨ寔にモウ宮城野信夫の姉妹を梅我と紫若の兄弟で勤めるのだから寔にモウ情がう  
 つゝて見て居る中に涙がこぼれて私やア顔が上られなひようだったは實正に如彼兄弟はなひ子へ ふさア、子エト言  
 ながら桑吉の貌を見れば涙を膝へはら〜心の底は知られねど戀といふ字を他にして察ればたしなき姉妹澤山そ  
 ふにせし事は勿體なひと後悔の涕を思ふ姉心詞にそれぞと言出さね互に泣が信實の涙に顯す和合頼母しくこそ思は  
 るれ

春水 曰右にしろす桑吉と房吉は彼米八と婀娜吉の趣意と同じ然れどもお桑お房は實の姉妹にして戀争ひの中に  
 おのづから血脈の信情あればその心底米八仇吉の旨と違ひ情と義理の意味ある體を推量して讀み給へといふ  
 又曰此次の巻は春も過卯月もたちて臯月より六月にいたるものがたりなり

春色梅美婦禰卷之四了







それ姦しと讀せる文字の綾最むづかしき婦人の人情なか／＼穿つに容易からず元來今日は梅巻に寄集りし唄女の  
數々凡二三十人の人々なれば所存々々のことをはなし合て梅を紫蘇巻にしらゆる賑はしき通客兼て知りたまふ  
べし

斯る果なき事なれども面白き物語の有もやするかと思ふ通君のありと察て此梅巻の日を聞定めて遊びに來り  
種々肴などを取寄せて馳走する事も多くなればしとなれり

茶屋女房「サアお燗が出来たから些氣をお付なあんまり精を出すよ 蠅が出るヨ」  
「ハイありがたう最些だか  
ら巻で仕舞ますヨ」女「ナニサマアお休ヨまだ餘ほど有だらうは子」  
「みな／＼」  
「イ、エ不殘で一升ばかりでございませは  
夫だから仕舞てと申すのでございませヨ」女房「寔に速いねへ一斗五升の梅だから何様に速くこしらへても二日の餘日  
も懸るだらうと思つたのに大勢といふものは早い物だ子へさぞ衆人がお勞れだらう」  
●「ヲヤ紫蘇が足ませんヨ  
女房「ヲヤ左様かへ喜助や漬市さんが大の屋に居るさうだから紫蘇をとつて來なヨ」喜「ハイト言ながら出て行折から見  
世先へ清元富士太夫來かゝりて」  
富士「ヤレ／＼騒々しい事だぞ」  
「トいながら多くのげいしやを見まはし」  
富士「いづれを看ても  
山家育」  
「そめ／＼なんだとへ富士さん悪くお洒落でないヨ」  
小野「小町衣通姫といふ美人が居るは子」  
富士「そりやア何所に  
たみ」  
「私だヨ」  
「憚りながら」  
富士「ハイ／＼恐入りました餘り手強くツてモウ後の詞が出なくなつた」  
「たみ」  
「ヲホ、富士さ  
ん閉口かへ」  
富士「ハテサ色氣のない悪口は」  
「たみ」  
「好男のたしなみかへ」  
富士「違へねへ」  
「たみ」  
「それは左様とお前は和歌  
水の旦那かへ」  
富士「左様サ即時に呼によこすヨ」  
「たみ」  
「なんぶん宜く」  
「そめ」  
「はやくお出な子エお喜名さんが待てお在だ  
から」  
富士「へん色じやア有まひしト言ながら行過るほどなく表を通りかゝる婦多川の米八此梅巻の中にまじり居たる  
唄女に知己の者あるゆゑ立止まりて」  
米「お袖さん此間は久しく」  
そめ「ヲヤ／＼米八さん寔に久しくお目にかゝらな  
つた子エマアお寄被成ヨ」  
米「ハイマア鳥渡花屋敷まで往て参りますヨ」  
ト大勢の藝者にも程よく挨拶して別れて行跡に

て廊の藝者衆が何とか難癖付る筈少しは疵もあるべきを賞るばかりで諷り人なく自然なる愛敬に世界へ廣く行わたり  
し此巻中は言に不及梅ごよみから御馴染の米八ゆゑと知られたり

宅抱唄女にあつたらふか不思議だヨ子エ  
△「ヲヤ／＼宅抱唄女だからといつて見板の唄女だからといつて別に人間に  
變りがあるものか子エ」  
□「然サ子おめらんも辻君も元は只の娘だから別にされちやア悪ひ役に當つた人間が迷惑だヨ  
そめ」  
「ヲヤひどく理窟をお言だ子エそりやア人間の種の變りもあるまひが私の様な愚鈍もあれば米八さんとやらの様な  
發明な者があるから不思議だと言たのサトつまらぬ事を争ふも心隔のなき故にて氣に障るといふ事もなし折しも五  
歳ばかりの可愛らしき男の兒を背負ふて來る女」  
門口から  
女「お染さんお民さん和歌水へお座敷」  
そめ「アイヨ愛兒様  
能お使にお出だ子へ」  
▲「些お上被成ました」  
□「ヲヤ／＼お否かへト云ば兒を脊負ひし女は氣の毒そふに」  
女「アレサ  
お頭をふるものぢアございませんアイと被仰まし」  
見「乳母や尾張屋の伯父さん所へ行ふヨウ」  
女「サア参りませうと  
わらひながら衆人へむかひ然ようならば誰人も」  
みな／＼「ハイ左様なら／＼」  
此時お染は奥の方を看て大きな聲  
そめ「御内室さんへ眞にモウじれつたふございません子エ」  
女房「ナアニ早くお出ヨまだ大勢お在だから直に仕舞はれるヨ  
お座敷が濟だら歸に急度お寄ヨ御馳走をするから」  
たみ「ヲヤ／＼嬉しひ樂みにして往て参りませうト立上り跡に残る  
唄女たちに會釋して」  
たみそめ「ハイどなたも何卒」  
▲「早く明たらお出なねへ待て居ますヨ」

斯て長き日はや未ノ下刻となり梅も大概巻仕舞て婀娜と好意との藝者達も手を洗ひ帯を結び直しなどして各々  
指の先を眞赤に染なしたるは爪紅をさしたるよりも潤はしく其四邊を片付縁先をはうきにてはき出す折しも諸商  
人の往來して  
「飴や芳飴名代々々」  
植木屋ア／＼  
「けいじや」  
ヲヤ／＼  
能箱庭だねへ  
▲「ア、ホンニ子エ咬へ紗の切を覆にして螢を  
入たら宜からふ子エ」  
●「ア、ねへ然したら嘸涼しい様だらふ」  
△「ヲヤ最行て仕舞ヨ」  
●「憎らしい最些見せれば能のに



▲「意地の悪い植木屋だヨウ ●モウ近日に午の日だから九郎助稻荷の御縁日へ行てお買な ▲ア、然せうねへ  
 毎月午の日京町二丁目九郎助稻荷の縁日として小間もの商人植木屋など種々の見世を出して賑なり因に云抑九  
 郎助稻荷大明神と申奉るは往昔保元年中より今天保亥年まで凡六百八十餘年の舊社にて舊地は田町砂利場の邊  
 りに有しとぞ九郎助の名の發意を尋るに右大將頼朝卿の御治世に下總の城主千葉介自胤の一族千葉九郎助といふ  
 人專信仰せしゆへに九郎助稻荷と其頃の俗の稱初しと言傳ふ然ば其昔廣々たる武藏野の端手淺草の原の田家  
 の者の利益を蒙る事數々にて中むかしの頃までは今よりも猶名高き社にて明暦の頃にいたり益々靈驗著く感應  
 神德擧てかぞへがたし爰に明暦三年元葦原今の地に引移りし頃神社一字無之仍て此御神の德を慕ひ家内安全愛敬  
 の護を願んと則ち蒙御免當地へ遷座なし奉り廊中の鎮守の神と崇尊信せざるものもなく毎年七月廿一日當社の  
 祭禮有之太兵衛といふ人始て練物踊り等を出せしより八月にいたるまで廊中の諸所より種々の思ひ付にて踊り狂  
 言などを出して廊の賑ひ十倍の繁昌なりしかば毎年の稻荷祭を怠らず面白き趣向の絶ざりしが何時となく九郎助  
 稻荷の祭禮に付て出し初たる俄狂言の基をわすれ只俄の催しは廊の遊びの全盛とのみ心得たるは最本意なし斯  
 りしかば九郎助稻荷の神德も漸々に隠れ五町の町には町毎に稻荷の宮を勸請し九郎助の名は廊外に知られた  
 れども里には却て信心をわすれ京町二丁目の稻荷と思ひて年久しき間廊最初總鎮守と知るもの既に絶んとせし  
 を當時の廊に好古の老人寄集ひて神德を古代のごとく尊み靈驗を祈らせ氏子の繁榮あらまほしと再興なしたる九  
 郎助祭り月々賑ふ縁日の催しこそは最めてたし  
 右は戀が窪のむかしを當時の廊に准らへしるせしこの物語りに因廊の茶亭一文舎がはなしを其儘に著つ好古の諸  
 君當世の流行子に告奉りぬ

第十回

富士の高根を軒端にぞ見ると詠せし歌の江戸自慢そのなごりにや今は猶數を移す夏の富士多かる中にとりわけて貴  
 賤の群集賑はひは名にし應に北の里に近き小丘の淺間の宮居の側の細路次を富士長家とさへ稱來て五月の晦日六月  
 の朔日の日の參詣は所がらとて炎天に素貌の雪の美人も多く大悲閣より引續く馬道通りの往來は行合押合富士屋と山  
 野に入て休足するも又お山に縁ある心なるかさて參詣の其中に唄女と見えたる風俗の娘二人手に麥藁細工の蛇の筐に  
 付たるを提て同じく芥子細工の蛇のさし込を三ツ四ツ響へつけて前後に歩行は廊より出し富士參りの戻り道その序  
 に觀世音へ廻りしと察て隨神門よりの四辻大の角を北へさして速足に急ぎ小形扇にて胸の所をあふぎながら先に  
 なりたる傍輩の唄女を呼かけ ふじアレサお夏さんお待なね、寔に速ひ足だヨ なつ、イ、エ私の足は早いのではない  
 ヨお前が遅ひのだヨトいふ折しも三味藤といふ人來かゝりて 藤、モシとんだ論が始りやした子私が仲人に這入りやせ  
 う なつ、ヲヤ藤さん如麥さんおそろひで 藤、モシ毎度美麗でござへます子 如、夫だから彼人が 藤、あつくなつて居な  
 さるも無理はない子 なつ、なんでございませすとへ憎らしひト扇にて打形をする 藤、トキニ最お歸りかへ なつ、眞の信  
 心參りてございませ夫に今日は約束もありますし早く歸らないと見番がやかましくつてなりませんヨ ふじ、はかない  
 身の上でございませす子エ なつ、察してお呉被成ヨ 藤、ハイ、お察し申しますとも 如、早く引取つて貰へばい  
 なつ、何卒宜くと莞爾笑顔のうつくしさ。いかなる人の花なりや後の條下にくはしく記す なつ、藤さんへお前は餘  
 りでございませす子 藤、何故エ なつ、何故ぢやア有ません三絃は今日入用でございませす子 藤、先刻小僧に持せて上  
 やしたつけ夫ぢやア大かたお前と行違ひに成やしたらう約束を間違る様な實なしぢやア有やせん  
 作者曰這藤といふ人は實名吉野伊兵衛とて鳥越四丁目木戸際の三味線師なり俳名を不二丸といふ洒落人にて廊中



男女の藝者達をはぢめ大概此人に三味線を誂へ頼む近世稀なる三味線細工の上手なり

なつヲヤ夫ぢやア私の留守になつた所へ届たんでございます手堪忍して上ませうホ、、、 藤ハイ夫はありがた  
い子マア彈で御覽なせへ何様に彈能なりやしたらうアノ糸巻に少し疵が有やしたから取替て置やしたヨ なつヲ夫は有  
がたう 藤鳥渡と榎木へても寄やせうか 名物のそば屋 なつヲイ、エ然しちやア居られませんヨ其代 明晩松風亭へ行  
ませう 藤なるほど其方が宜らふ子彼人も是非つれて往やすぜ なつヲイ、エお前様と如麥さんばかりで澤山でござい  
ますヨ 藤へん甘味いふもんだ子彼人ばかりで澤山だ聞いて呆れやす ふじヲサアお夏さん遅くなるよ能加減に恍惚情  
演なねへ。如麥さんお前はんと私が迷惑でございます子エ 如アハ、、、 違へねへ なつヲヤ夫ぢやア藤さんと私が  
情人の様だ子エおかしな お富士さんだヨ 藤アハ、、、 承け居て然思はれちやアつまらねへ夫なら何れ松庄で  
なつかならずとも 藤お夏待て居るぞいノウ 卜役者のせり 如イヨ紀の國屋ア引 なつアレサ戯言じやア有ません急  
度でございますヨト別れ行後見送りて 藤お夏嬢も鵬居さんにやア餘程墮落て居る様子だノウ 如大キにサしかし何  
様も婀娜な女だヨ 藤辰巳風で廓の人品を等分に調合したといふもんだから好意で下卑なみから當時の利ものサ  
如三味線も能彈そふだが一中節も巧者に語るといふ事だ 藤諸藝暗からずサ 如イヤ此間仲之町で婦多川へ往た米  
八を見かけたつけが何様も感心する風俗だノウ唐琴屋の宅藝者の時分から別段に評判も能つたが今ぢやア大達者にた  
つたといふ噂だが成ほど少しも言分のなひ唄女だノ 藤然サ寔に名の高いものになりやした。イヤお富士の此頃は明  
浄と能なりやした子 如容儀も美麗歳の往なひに仕ちやア如才でない嬢サチへトはなしながら随神門をくぐりて觀世  
音へ詣て東谷の石段を下りて三社の方へ歩行宮戸川の床机に休らふ此の時すでに巳ノ刻の鐘聲辨天山より告げ渡り炎  
暑堪がたくして奥山の樹下茂り枝に涼風を待人のみぞ多かりけれ  
春色 梅美婦 禰 卷之五了

春色 梅美婦 禰 卷之六

梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水 著

第十一回

神社佛閣繁榮の名所多き其中に例も賑はふ參詣は觀音大士の靈場にて名高き美人の茶屋娘愛敬て上手に客を招程よ  
き年増女も順ぐりに絶ぬは道理老女から三平自慢の女にも夫相應に利益ある老女の辨天お多福と呼ならはせし辨才天  
色の中店情の奥山 樂多き境内は筆に盡せぬ壯觀なり然れば西谷東谷勝りおとらぬ茶見世の軒喜久家といへる門先に  
て互に行合ふ三四人何れも俳諧の友達と見ゆる風俗なりその名を理喜象。象丸などいふ人 象イヤこれは山谷の  
大將達如何 如ヤこれは女殺連の好男子方 藤なんどマア嚴しい暑サぢやアござへませんか 理喜實に如 仰堪へ  
難ひ暑氣サ子 藤トキニモウ御歸庵のお心か子 理喜ナニサ是から富士參詣サ 如ハ、ア夫ぢやア何所へか御通行の  
お戻りだ子夫なら今一度山中お附合は如何 象山又山のお付合か子 理ハ、、、とんだ山姥だ然らばまづお足休の上  
の事サト喜久家の見世へ這入る ちやみせの女房ヲヤ理喜さんは衆若達も能う被爲入りましたト茶を汲出し烟草盆を運  
びそれ／＼に挨拶をする中客は新たに掛りし軒の提燈願主の名をよみ又額面を看ながら 理ハ、ア面白い發句の額  
が出来やした子六花庵の評で軸が大玄居か 藤これは何所から掛らした 女房ハイ六花庵と被仰ますのは新堀の御方  
で私どものお客様でございます 藤ハア然か子何れも面白い句だ 如トキニ理喜先生は山内の仙とも謂つべき仁だ  
がいまだ虚談ばかりで實録の墮落絶てなしといふ事だが何様も不働事だ子不佞杯が奥山へ日々這入込居様もの



ならば揚弓場茶店をはじめとして凡境内の娘子どもは門並墮落させて人種を盡させやすぜアハ、しかし左様女に  
 氣をもませるも罪か子 兼、いや大そふな御詫言が出た 理喜、何とも挨拶に困る子 女、モシ理喜象子が心意氣て一句う  
 かみやした 兼、ハテ子何といふ秀逸だか早く承はりませうハ、、、 如、文付やひとりも出来ぬ娘の子サアハ、  
 ハ何と秀逸でござへませう 藤、とんだ晋子のもちりだ子ハ、、、 理喜、ヘンそねむなく、能有鷹は爪を隠すとむか  
 しかと言通り何れ色情師といふものは世間へ仰山とさせずに深情を催ふすのが極秘サ燕雀なんぞ大鵬の心知らん奥  
 山に墮落在事をサ 如、イヤハヤ大壯な事を申上るノウ然言へば此方もまだ言事がありやすまづ足下の色情といつば  
 藤、ハ、、、 何だか古風な言出したのウ鳴物師でも頼まうか物語にでもなる様だ 兼、まづ暫く東西々々 如、頃は  
 彌生の始つかた 理喜、こなたの亭には雛鳥の如、コレサ、然ませつけへしちやア行ねへ 藤、時候の所はまア止て子早  
 わかりになせへ 如、然サ左様いたしませうエ、まづ理喜象子がさる矢場の娘に大恍惚て其所の宅へしけ込ふと  
 いふ心底で住所を聞た處がよく、貧窮な客と見たものだから 理喜、エ何エ 如、マア無言で聞被成。エ、引其故で  
 能加減に會釋て猶豫を挨拶をして本宅を些も教導なひそうサ 理喜、モシ、お言葉の半途だが彼女の宅へは以前に行  
 やしたゼト眞顔になつていふ 如、大方見世を仕舞て歸る所を送り 狼、でか子 理喜、やツかましいモウ、洗濯やの門  
 口連中には困るぜ 女房、モシ理喜さん大分誹謗お言れ被成ますねエト、いふ處へ此茶店より程近き名代の手打蕎麥龜玉  
 庵から十六七のかわゆらしき娘出来り理喜象に向ひ腰を屈め愛敬を捨て 兼、理喜さんお歸りに些お寄被成ましヨ  
 理喜、ヲイお龜嬢今に往ヨ 眞、偽言ちやア否でございますヨと言捨てあどけなく欠出してゆく跡にて理喜象は高慢ら  
 しく友達に向ひ咳ばらひをして 理喜、へ、ンあの通り論より證據十目の見る所十指の指さす所 好男の本家本元はこ  
 れて被御座 兼、イヤ倦れた狂氣だ足へ灸でもすへなせへトこれより理喜象を大勢にていじめ遊びしがはや黄昏の景色  
 となれば衆人茶店を立出て離離門より美味齋を推のがへと歩行けり往來は群衆の富士詣廻内はしづけき猿寺の長家に

觀の一人住ころは洒落ても浪人の不自由多き判次郎繪岸より此所へ移りしも此糸が地意と情の實心に隠して見繼  
 ぐ憂苦勞さぞかし心を痛めるならんと思へど當時は何事も任せぬ身なれば詮方なく情の合力か籠略にはせしど朝夕氣  
 を付て勝手元から小遣も詰て費を厭ふゆゑさすがに全盛此糸が手當に不足あらざるほど前後をはかりて安堵させん心  
 がけにて衣類をばはづかしからぬをたしなみて實におみらんの間夫なりと他人も羨む衣裳の好み常々心を用ゆれば自  
 然と好風なる身のこしらへ元來女に好る、風俗土地がらとて近所にも婀娜なる年増女美麗娘も多き軒並朝湯の歸り  
 に寐起の笑顔互に挨拶かさなりていつしか心易だても惚た情から馴染も早く氣づまりもなき判次郎の宅ゆゑ出入る五  
 六人いづれも年齢十八九から二十六七の婦人と察したまへ ▲判さん今お起か昨日私が少しおそく起たらば晝過まで  
 づゝ寐られちやア丈夫になるものが迷惑だ今ツから氣を付ない困るのなんのと他人の事を悪くお言て自分はなんだ  
 ねへモウ先刻辨天山の午刻をうつたは子私なんぞは最早毘沙門さまへお百度をあげて歸りに百觀音さまの地内で久ア  
 しく遊んで来たんだア子 判、ナン一朝ばかり世間並に起たといつて其様に自慢をする事があるものかそして今朝の  
 お百度は彼情人の爲に百度参りをしたのだから何も賞られる程の朝起てもないはナ ▲ヲヤ啞をお言な何其様な事て  
 毘沙門さまへ参るものかねへ母人が 判、叱言を言ません様に情人と何所へ参つてもやかましく言れない様にして何  
 卒富の札を拾つてそれが突留に留まらして三百兩當つてそれで二個が十分美服を着ます様にと願つたのだらう ▲ホ  
 ホ、ナニ其様な勝手なことを御願掛にするものか子お前はんぢやアあるまいしト、折しも浴衣を抱て風呂から  
 歸り来る娘、表口より ●ヲヤ何だエ朝ツから夫婦喧嘩をして ▲ヲヤ今湯にお出のか遅い事たねへハ、ア昨夜は何  
 だ子夫じゃア今朝は起られなひ管だ憎らしい ●ヲヤ、たま、他人より先へ起たと思つて其様な事をお言てない  
 一年中朝寢坊の癖にト言ながら判次郎の貌を見て ●判さん便りがありましたかへ ▲ヲヤ誰の便りがへ ●アレサ  
 廓からサ ▲然かへ私やアまたお好さんのことかと思つて悔しかつたは ●ヲホ、、、とんだ他嫉妬だ子へ ▲ホ



ホ、夫だつても衆女が此様に判さんを慈愛がつて上るのに情人にもならなひて折節来る廣耕地のお好さんなんぞに情人になられちやア間尺に合なひは子此糸さんは實正の御内儀さんも同様だから詮方がなひが他の女と情通を被成だと合點爲なひヨ。X「お前とならば能といふのかへト入来る又一箇の婀娜者。X判さん今朝は私の所へ来て御飯をお上りな美味ものがあるから。A「フヤ、私の處でも子今朝は判さんの好な館かけの御豆腐を母人がこしらへたからお茶のお飯をあげるといつて今私が湯から歸りがけに呼に寄たのだア子。X「フホ、、、茶飯を焚て判さんをお呼びでは判さんが念佛講の坊さんの様だ子エ。●「フヤ私も判さんもお茶の御膳が好だから母人がわざ／＼焚たのだけは子念佛講なんぞと否なことをお言てなひヨ今日はお富士さままだは子縁起のわりい。A「フホ、、、

第十二回

姦と。讀とはいへどもうら若き。女同士は自然言葉に花も愛敬もあればさすがに憎からず娘一人に聲八人のたへにあらで判次郎の獨居を問て朝夕に寄集たる婀娜の達今日もかはらず遊びに來り雨の降日のつれ／＼とて腰を居たる長咄し各意種々の方言ことも興ある色の世事愛相いづれも劣らぬ娘の中にお園といふ茶店の娘まだ年齡十六七最温厚風俗なるが判次郎の側にありし中本を手に取上。その「フヤ判さん此本は面白そふだ子エそしてまだ彫刻にならない草稿らしいが寫本のか子エフヤ繪も出入てあるヨ。判「ナニそれは販元に少し故障があつて板行に出來なひが寔にもしろく著作した本だヨマア鳥渡讀て御覽。その「然かへト言ながら他の娘の種々なる咄しを耳に入らずして五六冊ある中本の上中下を撰出し外題をはじめ序文と口晝不殘念入讀風情は人情本の博覽にて梅曆と春告鳥をば暗記文句をいふ娘なるべし。その「フヤ妖艶だ子春色乙女雛形の「フヤ、此作者の名も例の人とは少し違ふ様だ子エ。エ伴さん此字は狂詠舎かへ

判「然サさすがに人情本通だ能讀だの。その「ホ、、、博識だらふ子狂詠舎爲永春曉作。フヤこれは狂詠亭といふ作者の通葉かへ。エ判さん。判「ナニサその爲永といふ作者の連中は弟子か師匠か些も無差別だヨ山谷堀の若竹のお津賀さんの校合た條下が澤山あつて春水の著作た所よりかお津賀さんの草稿の方がおもしろひといふ事だヨ。その「フヤフヤそれて中本の中に爲永津賀女と名が出してあるのか子へト言つて首畫と本文の間の條下を讀む。美艶仙女香。とりぐす。初みどり。ホンニ仙女香の白粉と髮垢の薬を買て貰はふヤ。ト口のうちにいながら見るひと心で。看官其心得にて讀せ給へかし「仇にこそ散と見るらめ君にみなうつろひにける花のこゝろを」と古人も今の世も戀の心に變りなく互に思ひ思はれて終にうき身を果すもあればつらみ悲しひ辛苦を凌ぎ行末とげて睦ましく樂しむ夫婦も稀には有か凡戀路の中々に哀れは寔の底意も知れ惚た性根も顯はれて頼母しき事限りなけれど仕合わろき縁と縁はあはれな事も口惜き所爲も堪へて惚た同志倦も倦れもせぬ身にて親の無慈悲や世間の義理に妨られて其限に離れて浮名の立類ひは墓なく悔しき戀ならめ月に村雲花に風春とはいへど更て行隴月夜の影寒き路を忍びて或家の門を窺ふ艶男戸口に寄て「イばやくもそれと知りたるか掛金の際に立寄人氣表の男も察してか聲をひそめて戸に口寄。清「お夏か。なつ「アイ清さんかへお待よといひつゝ戸を明出迎ふは唄女姿の一個の娘歳は二八を多くは越じ寐まきの儘のしどけなく花の貌ばせ月の眉雪の膚は白粉もおよばぬ色の愛敬もの人迷はせの笑凹はあれど今宵は憂にしづみてや涙の眼元露けき袂に拭ふさへ哀れにこそは思はれるれ忍びし男も涙ごゑ。清「未練らしいが實に頃日はなつかしかつたぜト四邊を見廻し。清「母人は。なつ「ナニ子今夜ア裏の奥の家へ通夜に往て酒を呑過して寐て居るといふから心配はなひヨマア其戸をへて鍵をかけてお呉なトそれより床の上に伴なひ。なつ「マア何から咄そふか種々と相談仕度事が溜つて有から急にいはれなひヨ。清「左様言はれて察と悔しい事と腹の立たのもぐにや／＼となつて仕廻ふが此身がお前に逢れない様になつて居るのに此間母人が來て蕪から棒にお夏も左様言から此後はさつぱりと離別て吳るとお前の口上にして談じつけるから此身も男の端くれ



だから腹が立ふてはあはれめへかそれだけでも未練らしくおもはれるも外聞が悪ひと了簡して済したが心の中心やア  
 何様だらう何でもお前の行状を見て其上に覺悟を仕様と思つて胸をさすつて居たアナ なつヲヤ左様かへマア私やア  
 その事は少しも知らなひヨ私やア只此間お前が私の所から借つて行つた金をかへさなひ一件で母人と争つてお歸りだか  
 ら夫で腹を立てお出でなひのだとばかり思つて居たけれども餘り久しく逢なひから文をあげたのだア子それに母人  
 が是非他人の慰者になれといふから左様なつちやアお前の顔も不立私も今まで席勤ばかりで通したのに何も母人の榮  
 花をするために餘計の欲をかはき度もなひから殊に依たらばお前と相談して死んでも仕まはふかと思ふヨト涙を落  
 して男の隣にすがりつく清ヲヤとんだ事を言フウ其様に容易死んでなるものか何も死ぬ程の事でもねへはな なつイ  
 イエそれだが子先達中から經水久閉から母人に隠して醫師さまに看て貰つたら姪身に違ひなひと言から子何様しても  
 只平氣で家内にやア居られなひヨナニ母人といふものゝ些ばかりの金で爺の手を放れて十二の節から今の母人の手  
 に着られたのだけれども最早今まで澤山活業で置たから今私が家を出ても恩にかけられる理はないヨ爺が死に居る  
 と今まで此家に居やア爲なひハ子 清それだつても親といふ名があるから是非とも此方が下に付て萬事を爲なひけれ  
 ばならなひがノ去頃お前が咄した事が有つたけが幼兒節に別れたといふ姉さんの行衛はいまだに些も心あたりの所が  
 知れなひかノウ なつイ、エ少しは聞出したが子その姉さんを貰つた人が田舎へ引込で後に段々仕合が悪くなつて姉  
 さんをば女郎にしたつサそれから私が種々人と人を頼んで閉合して貰つたら子モウ其女郎屋には居なくつて今やア遠  
 くへ身請されて行つたといふ事だから兎ても私の力にはならなひヨ 清ハテナ困るノウお前も此身も親身の縁のある人  
 がなひからまさかの時に心細くツて行ねへ腹變りの兄弟が在のだけれども死んだ母人が無理窟な事を言たので此身ま  
 て日蔭ものになつて成長なつても音信不通だから行なひのサ なつヲヤノお前にも兄さんか姉さんがあるのかへ私  
 やアはじめて聞たヨ 清左様だらうこれまで誰にも咄した事がないから夫だけれども此身のは現在立派な家の旦那が

實の兄さんだつてが今やア根岸の方へ若隱居をして仕まつたといふから尋ても逢様にはなるまひヨ なつそれは左  
 様と清さんお前まア性根をすへて一ツ思案をしてお呉な私やアモウ斯して居るのがしみく否でならなひよト思ひ切  
 つたる顔色にて詞に出さねど惚た身には心の底も推量られて不便彌増男の情 清其様ならば覺悟を極て此土地を放  
 れもする氣か なつア、萬一も二個が添れずば否でも死んでお呉れなト言つゝ涙をはらゝゝ男も堪へず涙に咽せ  
 清それほどまでに思ふのか なつア、慈愛をふだと思つてお呉なト我から心を惱まして戀には曇る胸の闇何となる  
 身かしら露や無分別なる若ひ同志哀れな事のみかたらひける

誑訓亭門人 爲永春曉著

お園は判次郎の傍にて右にしるせし人情本の哀れな段に餘念なく夢中の様になりし間此家に集ひし娘達は忍び足  
 してお園を出しぬき衆女こそと立歸り置遊にする戯れもまた是遊びの常例なるべし斯とも知らず彼お園は本讀終  
 つて眼に涙 そのア、引モウノかはひそふだ子ヘヲヤ私を置遊にして女衆歸たのかへ憎らしひ子ヘ 判ナニ只今隠  
 れる様にお前を置遊にして歸つたのだ そのア然かヘト言ながら涙の眼元その儘に笑顔なして門口を出る折しも  
 此糸の内密の用を頼まれて此所に入來る辰巳の米八丁度お園と摺合ける

此後また奈何はなしの續かなるやその新趣向を知らんとならば第三編をよみたまへといふ

春色梅美婦彌 卷之六了



春色梅美婦禰二編序

近江國坂田郡筑摩の鍋祭は古くよりあり此社は稻食を司り玉ふ。櫛取て鍋にかくれる祭哉ト祭祀にかならず靈應まし〜て是を怖されば一度嫁したる女は一枚をいたゞき。二度嫁する女なれば二枚を用ひ。三度の婦人は三枚を用ひ。神幸の後に供することなりとか。男あまた持りし女は。とにかく見苦しと男の數よりへらして供すれば。たちまち神のたゝらせ給ひて。病ことすみやかなる故に。是非なく數の如くなして。祈れば病をこたるとかや。されば古人の秀逸に

あふみなるつくまのまつりとくせなん

つれなき人の鍋の數見む

と恨たり。また發句には

君が代や筑摩まつりの鍋ひとつ

と。こは泰平の世を祝し。また男女の道の正しきをいひたりける。愛たき秀句と謂つべし。是よりも猶めてたき教の糸は。春水ぬしの書なりけり。元づく所は孔孟も。同じ道なることなれども。かの生こまの持薬でも。鰻のかばやき程にて用ひず。ア、妙なる哉狂訓亭の。筆の癖。これ一流の風調か。濱の眞砂の數よりも。多き中にもこの直作は。たぐひなくまた新らしき。うがちなる。美名との花の人情を。むすめ子たちにしらする爲の船ともならんと。問屋に代りひるき連。子供のときの疱瘡に。一皮むいたる面の皮を。またあつくしてしかいふ

東都眞紫庵

雪

識

鶯のこゝにもなくや梅見船

眞紫庵

酔さめを土手にあゆむや梅見船

鶯雪

覗きこむ月にはづかし梅見船

玉枝

春風にふかれなからや梅見船

梅雪庵

酒の香をはこび入けり梅見船

柳雅

和らかし人のはなしや梅見船

松塘

鶯のやさしき聲やうめみ船

吹雪葺



江戸 爲 永 春 水著

第十三回

麥藁細工の蛇を片手にさげて判次郎の門ぐちを這入る婀娜者 米八判さんお静だ子エト言ながら莞爾笑つて履ぬぎの所より奥を覗く判次郎は中敷居の障子を明けて 判ヲヤ米八さんかサア此方へおあがりな 米アイお獨りかへトいひながらうへにあがる 判ア、獨りサ寔に淋しくつてなりやせん時に大分早くお出かけたがハ、アお富士さまの歸りだ子 米ヲヤそんなにはやかアありませんぞ最早午時は餘ほどすぎましたヨお前はんはどふかしてお在なはる子エ判エ最早そんなか子わたしやア今起やした米今起たじやアありませんヨ。エ判さんお前はんもあんまり然うお仕じやアわるいヨ私も丹さんで覺へがあるが子媚女が斯やつてお前はんを不自由のないやうにして置なはるなア並大體なこつちやアありませんぞ夫にお前はんが浮氣らしい事をなすつちやアあんまり媚女が可愛さうだヨ私がこんな異見がましい事をいふと可笑けれども自分で苦勞をして覺へがあります子が亭主も同様に思つて居る男を手放して客愛をして居るのはモウ氣が氣なもんじやアありませんヨお前はんも些たア媚女の心をも察してお見なはいなト身に入れたる米八が異見の言語に判次郎は不審はれねば稍しばし考へて居たりしが 判米八さんお前おかしな事を言ひなざるのが何様も私にやア不分解何かへ此身がなんぞ浮氣でもしたと思つて言ひなざるのか子 米アレサお實似でないヨしかも私が見届けたからサそれもお仕の事なら仕方ないが子媚女の顔をつぶす様なことをお致じやア折角たのまれて居

る私が媚女にすまなひから。何所までも媚女になりかはつて憎まれ口を利なくつちやアならなひから。どうぞエ判さんあんまり野暮な様だけれども世話をやかせないやうにしてお呉んないナ 判コウ米八さんお前が見届だと言からにやアまんざら種のねへ事でもありやすめへが何所て私が何様したのだエト少し腹を立し思ひ入れにいふ 米アレお前はん腹をお立じやア悪いは子私きやアほんの深切つてお話をするのに然う腹なんぞお立ぢやア何様も話談が落合ないは子 判ナニ腹を立は仕やせんけれども思ひも付ねへことを言はれたからツイ 米イ、エ思ひも付ないとは言はれないヨ然うお言なら言ますが子今私が來る時に這家から出た十七八の實情に可愛らしい娘はありやアお前はんの何だエ 判アハ、アノ娘の事をとやかう言ふのかへハ、米アレサ笑つてばかり居ちやア不分解ヨ 判ナニありやア隣裏に居るむすめサ 米それがどふして來たのだエ 判いま湯の歸りだと言つてちよつと寄つて往つたのヨ 米ヲヤそれに何故あんなにみだぐんで眼のふちをあかくして居たのだねへ 判エ 米お隠してないヨそりやアお前はんが斯うやつて獨身でお在なはるうゑに口前を能くして女小娘とお附合じやア是非左様なるのは無理もないヨそりやアお前はんの方じやアいくら堅くお仕ても婦人の方でおとなしく致ちやア置ないから子それでもお前はんの心ひとつで程々に仕てあいしらつてお置なはるのと又そこへ恍惚迄のとは氣の置所ひとつでありませぬお前はんが何所までも媚女が苦勞を仕なはるのを可愛想な事だと思つてお在なはれば他女がなんと言つても其方へ心の向くものでもなしよしんば義理づくで然ういふわけにおなりでもそりやア當座のことと深く斯うといふ譯になるこつちやアありますまひと私きやア思ひますヨ何も彼も行届いてお在なはるお前はんにこんな事を言ふのは出過た事をいふ様で大きにお世話だと思ひなはらふけれどもこれも媚女とお前はんの事をおもふからの事でありませぬから子悪くおもはなひでお呉んないヨト深實言語にあらはれて行渡りたる米八が異見もさすが馴婦女戀も知りぬいた辰巳風女と知られけりされども判次郎はおぼへなき身の濡衣とはおもへども斯まで思ひきはめし米八今言解くとも實情とせじ折こそあらめ



と心をさだめ 判何時にかはらねへお前の深切ほんに親身もおよびやせん猶此うゑは心を用ひてお前や此糸の深切を無に仕ねへ様に仕やうと聞て米入も心落居て 米然うおもつてお呉んなはりやア私も言甲斐があつてどんなにか嬉しいヨト言ながら懐より一通の手紙と一包の金を出して 米これは此間娘女からお前はんにお届もふして呉るとよこさしたのでありますヨ然して子ト言ながら四隅を見まはして判次郎の耳へ口を寄せて何か私語 米子然ういふ譯もありませんから今夜にでもちよつと往つておあげなはいヨそして今の譯は手紙にも委細しく書てありますとサそれでもちよつと顔を見せておあげなはいヨ 判ムウそれじゃア今夜にもちよつと逢つてお前の實意をなして悦ばせやしやう 米ア、どふぞ左様してあげてお呉んなはいドレ最う私きやア往きますヨ大きにおやかましう 判アレサまア能はナ今茶をこしらへるところだ 米ナアニ左様しちやア居られませんヨ地内の宮戸川に 御ぞんじのお客と桑吉さんといふ唄女衆が待つて居ますから 判エそれじゃアお客先から来たのかエ 米ア、お客に待つて、貰つて来たのでありますヨ情男といふものは餘程可愛ものだ子エホ、、 判違へねアハ、、 米アヤ私きやアこんな氣樂な事ばかり言つて居てもすまなひそれじゃアまゐりますヨ呉々も今言つた通り浮氣は御無用だヨ 判大丈夫サ 米あてにならない大丈夫だヨ左様なら晩にはきつと北廓エト言捨て出行を呼びとめて 判米八さん丈夫によろしくヨ 米アヤ丈夫とはエ 判アレサ丹さんの事だアナ 米嬉しい子エはやく然うなりたいとサホ、、ト笑ひながら出て行跡見おくりて判次郎溜息をホツとついで獨言 判ア、あの嬢も深切者だノウ併今日は何とおもつたか心にもねへお園の事を浮氣でもして居る様に言かけられてトいふ折から裏口より その「嚙お前はん外聞がお悪かつたらう子ト言ながら判次郎の側へ居る 判ア、驚怖したお前時刻からあすこに居たのか その「ア、さつきつからのお話談はみんなあすこで聞きました子判さんお前はんは何とお思ひなはるか知らなひが今米八さんがお言ひのにやアお前はんと私と浮氣でもして居る様におもつてお在じアやありませんかエ 判左様ヨとんだうたがひを請てお前のめへも氣の毒だ その「イ、エ

私きやア嬉しふござぬますは 判エ その「お前はんは身ぶるひの出るほどお否だらうが子米八さんにあゝ思はれてお見なはい最早とりかへしはなりませんせ左様して見ると仕もしない事て他人におもはれるよりはいつそのくされ實正に然うなつてお呉んなはいナ斯ふうちつけに女の口から言ふほどだからよく思ひつめたのを可愛相だと思ひながらどふぞわちきの心をもかみ分て見てお呉んなはいトおもひつめたる娘氣にはづかしさを打忘れ心のたけをぞ口説ける

振り見よと月になびくや夏柳

第十四回

こゝに亦岑次郎は青森より鎌倉に歸りて後も兎角病氣を言立て別荘にのみ在けるが父の病氣の知らせの使と俱に本宅にいたりて看病し其節お京の父が道中まで出て病氣の由を知らせければ捨置がたく俄に旅の支度をととのへ抱への鳶の者二人と手代をつれて路をいそぎ第四日目の夜は奥州白河の此方なる白坂といふ所に止宿しが青森の伯父の途中より先へ登せし手紙の趣と違ひ日敷を多く旅宿に逗留してある様に思はるれば何とやら案じられて岑次郎は連て來りし人々に向ひ 三次今一人は捨五郎 岑エコウ茂助此様なに遠くまで迎ひに來て伯父さんに逢なひ様ではいよ病氣がむづかしいか但し何ぞ故障が出來たかといふわけだらふノウ 茂然てござぬませうか子 小三次エモシ若旦那昨夜止宿した旅宿の噂じやア途中で間違がありやア仕ますめへか子 捨左様ヨなア何でも彼噂の盗人の様な奴が道中に居た日にやア油断は出來ませんせ 岑然さノウ 殊に若旦那の夢見が毎晩悪いと被仰から何だか氣にかゝります子へ 明朝は暗中に此宿を立て白河まで夜明方に行様にいたしましたせうじやアございませんか 然サ、若旦那はお眠くツて御迷惑だらうが私どもがお供をして來て途中のお役に立ない様じやア歸つて大旦那の前へ申解がござへませ



ん何でも明朝は眞暗な中に出かけて盗賊を退治するつもりで出かけやせう。アハ、大分強勢な事をいふが其際へ行って逃出しちやア行ないぜ。×はどかりながら此小三次なんぞが夢にも逃た覺はござへません子。▲イヤ逃ないとも言はれないゼトいふ所へ兼て逃へたる酒肴が來りしゆゑ岑次郎は笑ひながら衆人に酒を吞せ。岑明朝早く起るといつてもまた初更には間があるだらうゆるりと吞で寐るが能じやアないか。×ナニ〜一終夜くらの寐なくつても。▲吞方が能かノハ、×ヲヤ小三次さんが逃た咄しが今出たつげ何處の喧嘩の時に逃たノウ。×ナニ〜茂助さんそれは捨五郎が開放題で被御座まさアはどかりながら逃るなんぞと其様な比興な私じやアござへません子。●それでも今捨さんが證人で逃たといつたものヲアハ、×ヤイ捨五郎此身が何時逃た事がある何程友達の言事でも小三次が逃たと言ちやア承知しねへサア逃た證古をはやく言ナ。▲アハ、其様に立腹不爲でも能やア其方は逃たのを忘れたか然も此身と其方と無常に逃出して其上句に手を支て泣ッ面をして誤つた事があるぜ。×啞を吐きやナ其方は逃も仕たらふが此身やア逃た覺へは些もねへぞ手を支て誤たなんぞと外聞の惡ひ何時此身が誰人に誤たかサア其人を言て聞せや若旦那の前で其様な事を言れちやア明證を立ねへぢやア合點ならねへ。▲其様に言なら逃出して誤つた事を言はるか。岑ハ、夫じやア小三其方は逃たに違へねへか。×ナニ其様な覺は少しもござへませんが捨が偽言で被御座まさアナ。▲アハ、彌々逃た事を言はふト笑ひながら岑次郎にむかひ。▲エモシ若旦那お聞被成て被下まし小三次が手を支て誤まつた一件ハ子斯でござへます久しひ以前に私も小三も親父の前を仕損て子些の間銚子の方へ漂泊まはつて遊びに行て居た事がござへましたが子。×ナンノ阿房めへ夫は古ひ事たア。▲古くつても逃たに違へねへやア。茂マア〜小三さんに構はずに若旦那と私に咄してお吳被成。×茂助さんが他人の事をいふと根を掘て聞たがるのだ惡ひ癖だ子へ。岑マア構はずに捨五郎咄しなヨ小三は酒でも吞がい〜サア此身が酌をして遣ふ。▲下レその中に逃出した一件をお咄もふしやしやう。●東西々々。▲アハ、斯いふわけサ子何ても小三と私が銚子中

を遊び歩いてその果終に銚子の奴等と喧嘩をして三人ばかりを強く打、擲つたのサ夫から後が面倒だから其日直に二人で駈出して此土地へ歸つて參りやした所が途中で腹が空て堪へられなひから居酒屋へ寄つて一盃やらかそふと思つて休むと子酒屋の亭人が私と小三次を、情見てお前方は日中銚子の四郎親方の子分と喧嘩して立退のじやアねへか萬一然ならば早く一盃吞んで逃なせへ今も來た人の噂をきけばお前方を追蒐て打殺すといつて大勢友達を集めて追蒐て來ると言から子小三も私も青くなりやしたのサ旅の事だから此方は二人の外に味方はなし向ふは所の勝手を知つた奴等が大勢來た日にやア叶はないから夜通し逃て歸らうと相談して酒を吞で居ると最早追蒐て來るといふ風聞さ子夫からお前さん酒の代を拂つて其處を出やうとする酒屋で言には兎ても眞直に逃た時にやア追手が追付に相違ないからここから藪越に二町ばかり行て左りの方の杉林をぬけて何とかいふ原へかゝつて逃る左様すれば追付ものはなからう其かはりにはその原中へ折々狼が出るから用心して行と教へやした。茂イヤアそりやア大變だ。岑本街道を逃れば追手に取巻れるだらうし間道へかゝれば狼が居るといふし飛車取り大手を喰つたのだアハ、茂なるほど夫じやア泣のも無理はないノウ。×ナニ泣やア仕やせんが子正直は味氣が悪かつたのサ子。茂アハ、實心だ子。岑それから何様したその藪越に逃たのか。▲何様も詮方がございません往來を逃れば長脇差で。大勢が追欠るから否でも原を通るより外は道がないから藪の中を二三町を欠ぬけて杉の林を越て向ふへ出ると廣々とした野原へ出やした然すると最早日が暮れて月がきら〜と日中の様で路を歩行には能が淋しくつて何所ともなしに物すごくなつて何ても怖い事が有そふサ子夫から小三次が少し震聲になつて。×コウ〜啞ッことを言なへ其身こそ此身を先へ歩行てぶる〜ふるへながら此身が脊後に跟て來たじやアねへかハ、▲イエモシそれからが大變サ子漸々其原を一里餘も來ると右左に細い河があつて道巾の狭い所へかゝると左りの方の森の外路に狼がしかも二疋出て居るといふやつサ子寔に小三も私も途中へ立づくみになつて互に顔を見合せて暫時無言で居やしたら小三が言にやア。狼といふものは義心とやら











覺悟をするとお言のは何様せうとお思ひのたへ 兼ナニ何様も外に能思案もないが子マア私の了簡では末々の處が世間の思はくも悪からうから身儘にならない中に岑さんに別れて翌日にも和哥町を出られさへしたらば直に尼寺へ願て這入て仕舞ふと思ふのサトいひつゝ、落す涙の雫お房はこれを見るよりも思はずワアツと泣出し袂を口に押當て聲もらさじとしのび音に暫時詞もなかりしが漸々に顔を上 房姉上さん今お前のお言の事も先達中だと私のあるのを邪魔にして然お言のだらうと推量して恨みもするけれども此頃では斯して姉姉がうち解て萬事も相談をする様だから少しも此身勝手心はないが子お前が其氣にお成だと私も同じ様に仕なければならぬ義理だは子亦義理ばかりでもなく先達お前がおやしきにお在のときにお呉の書物の中に書て有た歌のやうな心も出るは子 兼ヲヤあの古い歌を集めて講釋を書た本の中の歌かへ 房ア、あの子

萌いづるも枯るゝも同じ春の草の

いつれか秋にあはてはつべき

兼、ホンニ考へて察るとはかない様だ子へトさすが唄女となりぬれど元は醫學の娘にて姉は武家にも奉公せし昔が知れてゆかしけれ

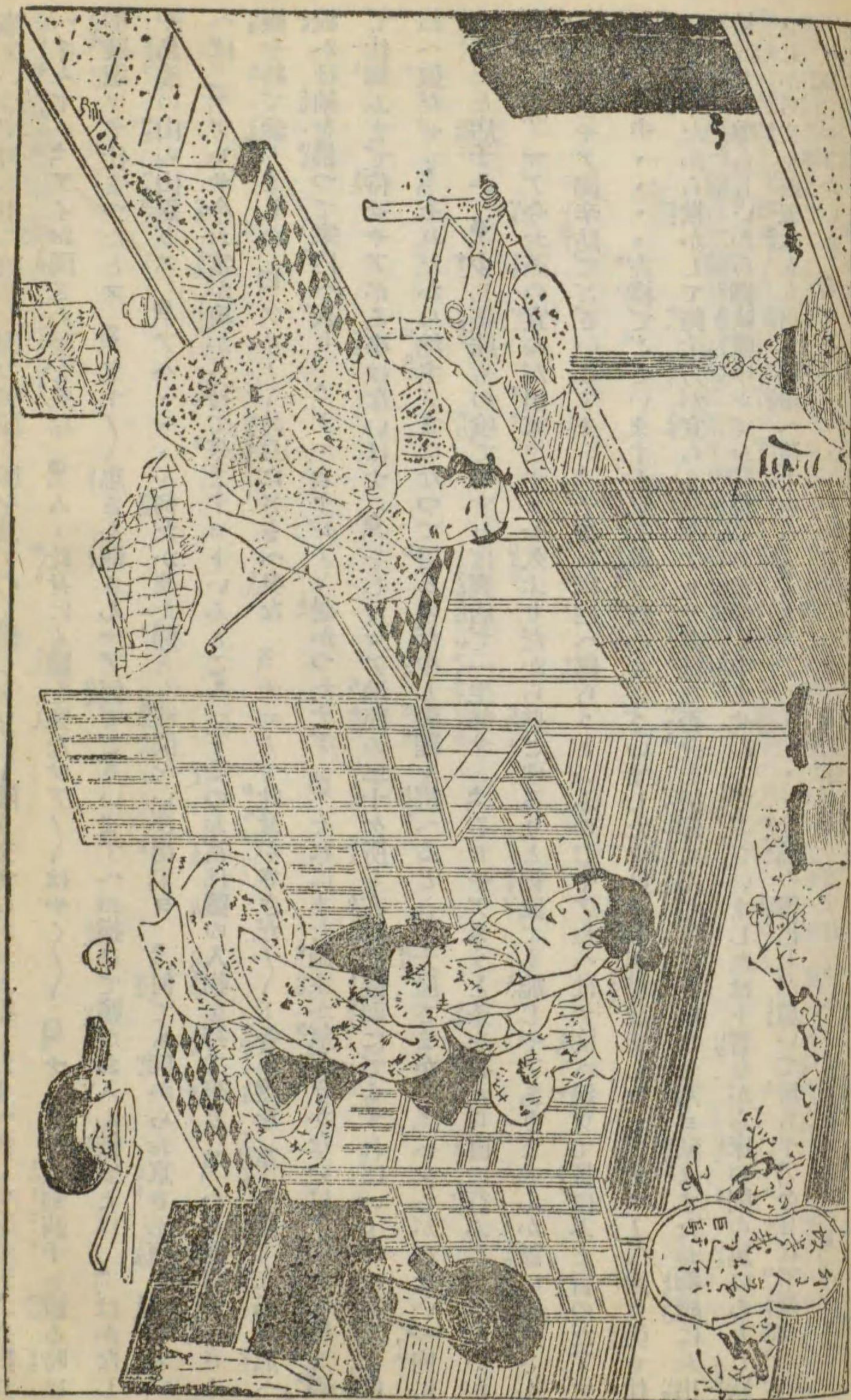
これよりお糸お房の姉姉が津輕青森より來りしお京に出合奇談四編目におもしろく著はせり

第十六回

喜雀長屋の披裏を堤の不へ立出ればこゝにも茶屋の二三軒編笠茶屋の數なるが中に立派な造作は仲の町にもまさるべき住居にて主は見へず店先には十七歳ばかりの娘と下女が二人程送り迎ひの繁昌は其頃案内の第一にて廻から上る客人も大半此店に立よるは娘の容儀美麗く愛敬深き故のみか彼一家の古事を思ひ出して最かたき石の枕はものかは

と無理なる製りも願ふ氣の放蕩男の銚ければ里へは不行この茶店へ娘を拵にわざ／＼とこゝまで遣ふも多かりしとぞ比しも文月燈籠の中匂過て三日めの日もはや申刻西河岸の見世先暑き時分なるべし此家の娘お園今湯あがりの素面に白地の湯衣の京染は銀四十目餘の本眞岡にて木綿といへども縮緬にまさる價を厭ぬは東育の癖にして目立ぬやうに金銀のかゝる風情は花飾る都にかはる好の模様すべての化粧温順花美にはあらで何となく男に好るゝ姿なりしが化粧をするを世話と思ふにや花桶といふ顔の薬の水を硝子の徳利より手の平へあけて顔へ付唇へ紅を付けて黒縞子と紫の花絞の縮緬を腹合せにしたる帯を結び茶籠のきはへ至る折しもこゝへ入り來る客二個尤 馴染の人と知るべしお園は愛敬を含みながら 園ヲヤ専さん兼さんお揃ひでマア此程は何様被成たのでございます子へ餘りお見限りじやア有ませんかへモウゝ影もお見せ被成ないでお憎らしい何處へ戀女が出來たんでありますへト言ながら香泉湯を汲で床机に腰をかけたる處へ持ち來る 兼ナニ／＼私どもは足を近く來るけれども兎角お前が留守で顔を見せないのだものウノウ専さん 専然ヨ此間も節句の日に來た時しかも櫻川に途中で逢て同伴に倚たけれどもお前は堀の若竹へ行たとかいつて向ふ越て平岩だとかいふ咄して留守じやアないか 園ヲヤ然てございますか櫻川と被仰は何方でございますか 専ナニ櫻川を何處のとは何の事たへ 園アレサ由さんか 二代目 新孝さんか三孝さんか知れませんが子兼なる程こりやアお京さんのが尤だ専さんが櫻川とばかりいふから不解のだアナ 専ム、然かなる程此義は此方が鹿忽だツけノ。ナニサ三孝と同伴にサ 園ヲヤ何時頃でございましたツけ子へ 専エちやうど未刻頃サ 園ヲヤ／＼嘘ばツかり其時分はお前様は小梅の小倉庵に十八九の美麗お娘御さんと二十七八の淨瑠璃のお師匠さんらしい婀娜なお内室さんと何だか面白さうにお遊び被成てお在じやアございませんか 専エナアニ何様して其様な覺へは 専イ、エシかもそのとき三孝さんがお前様を見申したさうだけれども何か他目を忍んで隠れるやうにしてお在被成たから三孝さんも御遠慮申てお目にかゝらずに來たと此處へ倚てお噂をいたしましたは 専ナニそれは三孝が人違ひをしたのサ





彌「イ、エ人違ひではございませぬまだ證據がありますけれどもマア今日は申しませぬ 兼「コウ／＼専さんお前は何  
 處も濟ない人だぜ喉程此身が節句の日の約束をしたのに 據なひ用が出来たといつて斷はつて置てから夫じやア彼日  
 には文字花と新道の師匠を連れて迎島へ行たのだノ成ほど友達よりは文字花が大切でござへせう以來はその氣でお交合  
 申しやせう 彌「ヲホ、私が悪い事をいひ出して友達の中をわるくしては濟ません子へ 専「ナニ／＼それは些  
 ない事だから疑ぐられてもかまひはないが兼さんの方にも私に義理の悪い事がありやす 兼「ヲヤ／＼何が悪い事があ  
 りやす子こりやア聞處だ。サア其事をおいひなせへ 専「しからは申し聞せやうか 兼「イヤハヤ大さうな見脈だ 専「汝  
 先達て二丁目の二階に置いて酒興に紛らかして 某が相方の新釀を横槍を以て走か／＼思はぬ敗軍をうけさせたる意恨  
 何の世にか恥を清めて汝に返報とはかりしに 兼「コウ／＼講釋だか芝居のせりふだか不解寐言て罪を五分々々に仕や  
 うとはむしがいゝぜ其様な事は知らねへ知らねへ 彌「ヲホ、今日は何様しても専さんが負てございませぬあぶな  
 く私の留守の言解にまごつく處でございませぬは 専「アハ、今日は大しくじりだト互に笑ふ門口をこれも何處  
 のか福の神となるべき娘の十五六なるが媚茶の大形の浴衣を着て紅の花紋りと紫中形の縮緬はら合せの帯を結び通  
 りか／＼りて立どまり 弥「お京さんお暑ございませぬ 彌「ヲヤお琴さん何處へお出だマアお寄なヲヤ今日は例日より  
 か別して美麗おなりだ子へそれで他人迷はせにお出かけのかへ 専「アレまたお園さんが其様な事を言て颯ちやア否で  
 ございませぬヨお前さんこそ迷ひ人が多くつて罪でありますヨト笑ひながら欠出して行 兼「イヤ何様も美少女だお園さ  
 んにも負ない嬢だぜ 専「ホンに場處がらとは言ながら能女が澤山だノウ 兼「お園さんあの娘は何だノウ 専「人間サ  
 兼「エ、洒落なさん鼻の下を長くして見送る癖にお前は急度あの娘の家を尋ていく底心だぜ 専「ヘン自分がそ  
 の氣だから其様な惡推をするのだとはいふものゝ美女だノウ何卒心易くなり度ものだ 兼「ソリヤ／＼本性を顯はすや  
 っサ 専「夫だつて可愛らしいに違ひない嬢だから仕方がない 兼「誰が方であつても向ふて不承知だらうト何かつまらぬ







春色梅美婦禰 卷之九

梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水 著

第十七回

成は否なり思ふはならずと昔よりして戀種の望み好も縁と縁互に因果のなす所か但し浮薄か知らねども義理と情を辨へて不實の心は一點ばかりも持ぬ男が戀故に他の誇りも笑の種となるも承知でする様に憂身をやつすぞ異變けれこに猿寺の判次郎は此糸の情によつて浪人中の不自由を退れて衣食の不足もなく遊び活業の片手業も氣を慰める好の道伊諧の宗匠となり名を反補と稱けるが或時獨徒然に古き本を繰返し心をいましむ古人の金言

そも伊諧者流の徒社中と稱へて連をなす事はその友達に交る事なか／＼容易からざる實意厚情を撰み連中に加へ何事も陸しくするを誓ひて反かざるの故に社中と呼とぞ其起原を尋ぬるにむかし漢土の惠遠法師といふ人庭の池に白き蓮花を植て其際の舎を白蓮社と言此所に親友十八人を集會して十八蓮社といふ謝靈運といふ才子此社中ならん事を乞ふに惠遠法師不承知

なりこれ何ゆへなれば謝靈は俊才なれども心難くうつり易き性得なるをもつて社中に加へずといふさて日本にては山口素道といふ伊諧師惠遠法師のむかしをまねて伊友に此事をなせし

より今はことごとく社中と稱へさばげど少しも社中の親母しげなし今は社中は朝に斷金の交りを稱へ夕に寇仇の如き行ひあり嗚呼歎かはいしいかな社中の名あつて社中の好意少しもなしそれ伊諧は其徒に狎やすくして心底和らぎ陸しくなるものにはあらず

ト讀かけし本を下に置き 判なるほど違ひなひ事た今の伊諧は各々に上手の心持で高くとまつて他の事を蔭て悪く言ふばかりで風流の心持は些もなひから俗人の交會よりも頼みがたひ事だしかし三千風が行脚文集に

俳風混亂して面々葉落々々になり難文の 闘返書の 闘止時なし漸々動て靜ならんとすれば 密に譏やはらかに漏しかはあれど這も伊諧の故なればならん

判元祿年中に此様な事を書たから後世の伊諧者の氣性に温厚人はなひ筈だト淋しき儘に風雅なる樂しみさへも理窟になりて吠をなし 判ア、引なんだか氣がとぢふさがる様だト獨言いふ折からに辨天山の亥の刻の鐘ポワン／＼判ヲヤモウ亥刻だ詮方がなひ寐様々々ト夜具を取出し床を敷所へ駈込來る堤下のお園裏口よりかけ上り息をせはしく脊後の方を見かへりながら その判さんはやく彼戸口をメてお呉被成ましヨ 判ア、引愉りした何故今時分駈出して來たのだ亦伯父さんと喧嘩でもして出て來たのか そのイ、エナニ然じやアありませんが今夜。アノお前様には是非逢なひければならない事があつて駈出して來たんであります。ア、引怖かつたト胸を撫下して居るゆゑ判次郎は茶を汲て與へながら側に坐居 判何が怖かつたのだ途中で何様かしたのか そのイ、エ何様も爲なひが今夜家内へ旦那の御内室さんが大變に腹を立て振込て來て私とさしちがへて死ぬなんぞと云てモウ／＼寔に怖ひ顔をして大さわぎをやるから私きやアすんでに双物て疵を付られる所でごさみましたは夫だからモウ跡にも不構込出して來たんでございませす 判それはマア大變な事たのウそして家内には誰も居なひのか不用心な事だ そのイ、エアノ其時刻前に伯父さん



が来て居るし下女も二人ながら居てその御内室さんを取押してなだめて居ますヨ  
 そもくお園が誘引茶屋を出せしは鎌倉の大諸侯大佛陸奥入道の御家中小佛善左衛門といふ大身の世話にて俄に  
 僥倖なる身の上とはなりけるなり然はあれども其始よりお園にいやらしき事もなく枕に近付ことはいさゝかもな  
 し只お園には後々にいたりて妻子を世話にもして貰ふべき事もあらふかと思ひ入て此度斯の如くはからひしなれ  
 ばかならず妾圍ひ女などに抱へしとは思ふべからず娘に貰ひし心なりしかなから今直さま巨細事は明されず其  
 際に臨みて自然に理害も解り安堵する様になるべし先夫迄は外面向は我に聞れの體になし見世を繁昌にするを專  
 一と心がけ呉よと言しとぞ

判「そりやア困つたものだ何にしてもその御内儀さんを今夜敷かして追返して仕まはなひければお前も堤下の家へは  
 歸られなひノウ その「ア、夫だから今夜アお否でもお前様の所へ寐かしてお呉被成ヨ 判「そりやア何様でも宜が只無  
 断て此身の家内へお前を止宿たら伯父さんも旦那もむづかしく言ふだらふぜ その「ナニむづかしく言たからといつて  
 私が否だと言出せば誰が何と言ふが詮方が有ませんは子噺何様な立身立世をする事があつたればとて私やアお前様の  
 方の便りが切れる様な事なら堤下の見世だといつても出して貰やア仕ませんは最初にお前様に相談したならば是非然し  
 て貰ふが能たとへ何様なつても見捨は爲なひとお言ひだから茶店も出して貰つたのだから毎時言通りかならず悪く思  
 つてお呉でないヨヨ判さんお前はんは此糸といふ可愛お方があるから私なんぞは邪魔だと思つてお在だらふけれども  
 私きやア去頃米八さんとやらがお前様に異見をお言の時からして不圖思ひ込て無理な願ひを言出してから後は何でも  
 一生放れまひと心を極て思ひつめて居るのに些たア可憐だと思つてお呉被成ましナト涙をうかめて睨くも判次郎の  
 隣へすがり付身をふるはして泣入ば判次郎はお園の脊中を撫て介抱をしながら 判「コレサお園娘泣なさんな何もお前  
 を可愛思はなひ事はなひけれど世の邪魔をして此身の様な者が彼是さまたげになつては思ひと思ふから可成程は

過ぎさかる心がけもするけれど此様な美艶かはひらしいものに夫程に思はれてなかく、齷齪にする氣は無から、必然お  
 もひ被成ナ その「それも私が最初からわるひのてお前様に恨みをいふわけには有ませんが何様も戀くツてならなひか  
 らお前様の顔を見ると無理を言たりわが儘を言て便りにして居るのだから堪忍してお呉なさましヨ 判「そりやアモ  
 ウ此身の様なものを心願にする了簡ならば何所までも力になつてと言つては自惚らしいが不及ながらも相談合手に  
 なつて遣る氣だはナマア何にしても今夜は此所へ止宿て明日の相談とするか その「ア、否でも然してお呉ん被成ナ嬉  
 しい子へト莞爾笑ひ亂し髪を撫上て嶋田の後鬘の格好を直し その「あんまり泣いたら涙で顔が行なくなりまし  
 判「ナニ泣いたら常住よりも猶美麗なつたから今夜何卒温順寐られ、ば宜が何様もむづかしいもんだ その「ヲヤモウ  
 いつまでも愚痴を言は任せせんは温順無言で寐ますからお案じてなひヨ 判「然かそれじやア此身とはものも言なひて  
 夜を明しさへすれば能のか その「アレサ夫じやア否でござります其様な意地の悪ひ事を言はなひて何卒私の氣の安堵  
 様にしてお呉ん被成ナ子へ 判「氣のやすまるやうには今夜ふり込て来た御内儀さんを欺かして歸れば宜らふ  
 その「イ、エナアニアノ御内儀さんが腹を立て歸らずに居様が何様せうが私きやアお前さんさへ見捨てお呉れてなけれ  
 ば他の事は少しもかまやア仕ませんハ子 判「マア、何てもあしたの事サ夜がふけるからはやく寐なせへ調度二三日  
 止宿客があつて夜着も蒲團も借て置たからまさか風邪もひかせなひト言ながら間を隔て敷蒲團此様な縁にしが唐草  
 の模様もかはりし裏表千種結びの露いさゝか浮薄ならねど戀衣かさねくのお園が戀情 その「ヲヤ、其様にマア間  
 隔に寐ますのかへ否だ子へ 判「其夜はこゝにやすみけりこのばのつどき  
 は第四へん目にいたりてくわしくとく

第十八回

こゝに赤岑次郎は病身を言立て兎角別荘にのみ遊び暮しけるが父の病氣より本家に立歸り出入を仰付られし御屋敷



の御用または商賣の仕入もの間屋の掛合彼是と手代の不及事もあれば終に本家に身を落付て萬事の世話をなすゆゑに父の病氣も平癒して此度を幸ひに家督を岑次郎に渡し青森より登りしお京を岑次郎の女房に定めて世間の弘めをなしけるにそお京の父は厚望の叶ひし様に悦び津輕にはわづかの田地を残して別家の者に支配させ先祖の菩提所の付届を不怠勤る様にはからひ其餘の田地家屋敷はことごとく賣拂ひ有金とも合て一萬五千兩餘を鎌倉に取寄せお京が持參金として岑次郎に送り五千兩をもつて婦多川の材木座に隠居店をこしらへて住居ける此時になりて岑次郎がお京お房の二人をば如何になせしぞといふに岑次郎の母はお京のこの様子を聞きしゆゑに親類の因を斷て不通となりしお房の母に和談して種々と談合ひ得心させてお京を婦多川より引取柳川亭といふ寄合茶屋の株を求めてお京母子をばこれに住はせ弟のお房をも頼て宜敷様に世話をなして相應の方へも縁に付てやるべしとこまやかに計ひけるが此節お京も岑次郎の母へ對してお房の事まではさすがに言ひ難くお房の母は元來姉弟の二人とも岑次郎とわけある事は知らずお房をも後々身儘にして呉るといふ岑次郎の母の信切あれば何事も其意に隨ひまづお京を連れて柳川亭へ引移りしがお房も意地つよき生得なれば些も未練なる事を言はず姉のお京をすゝめて母と同居をさせ其身一人和哥町に残りいよいよ至盛に明女をつとめひそかに岑次郎を招き遠慮なき樂しみをなさんとばかり才智をもつてお京お京の二人をも押付て岑次郎の氣に叶様にして看せんと戀の意氣地を磨たて一際目だつ心の花美はこゝに容易解わけがたし

○さて岑次郎は母が内々のはからひにて父は知らずといへども女親の情深くして義絶したる親類殊に目下なるお京の母と和談してお京を其身の妾にして呉たる實意へ對してまだ弟の方を斯々なりとは明していはれず氣の毒とは思ひ乍らまづお房をば其儘に捨置しが櫻川善孝を頼み別に一軒の家を新に造作などさしづして貰ひ西宮の名目を借て鶴次の姉分とし望みの如く座敷を勤めさせて家内の活業は岑次郎の許より不自由なく計ひけるが實に人情の趣く所は諺にいふ無物貧は富が有願の人の難にして岑次郎はお京をもお京をも可愛からざるにあらねども

手放して置房吉が奈何にしても可憐おもはれ家内の用事の間を見合せて出かけるのみか屋敷の用事間屋の用事何に不依手代の役をも自身に勤める様にかこつけて段々に募り果は五日三日づゝ家に歸らず免御和哥町へいたりて房吉の許に居續し手狭な住居と奉公人への氣がねのなひが樂しみとは物好ながら當人の心になれば尤にもある事か作者はかく余吉が身を引くとより房吉もともに引こみてひさしく

ふき 岑さんおまへ今夜ア此方に居てお呉んなさるだらふ子ト わが家の出格子のそとからゆかたをかへ 岑 ヲヤ房吉か惻りしたアママ宅へ這入んねへナ ふき イ、エ今いそぐから左様しちやア居られなひヨ今日は櫻川の善孝さんと榮次さんが約束しておくれのお客で私と大吉さん鶴次さん菊次さんと大勢で今平清へ行んだア子 岑 左様か大造に早ひお客だの夫りやアいゝが晩にはおらア居ねへからお前は則り西の宮に寐がいゝ ふき ヲヤなぜへ今夜ア此地に居ておくれなねへ 岑 夫だつておれも種々用があらアナそして今日で三日といふもの歸らねへから母人さんはいゝが父御さんの前へ濟ねへハナ ふき フウムそれよりかお京さんの前へすまなひだらふ子それじやア能からモウ最私の方へお出でなひ憎らしいトいふ時しも隣家にて稽古の新内節

ほれて逢ふ夜はありたけの胸の奥底打あかしじつと底心情見せ對な肌着のひよく紋若むらさきはお心のもし醒よかと氣にかゝり文言傳の返事さへ來ぬとまつほの恨みわび思ひもしほの身もこがれ下略

岑 また其様なつまらねへことをいふヨ此方が家の首尾を取そこなはねへ様にしよふといふの間を見てお前の借た西宮の方の金を算段して早く都合をよくしてへと思ふからだアナ今おれが家を出てもするとなほくお前に苦勞を餘計にさせる様にならアナ ふき ハイく御尤だ御免なさいましヲヤそりやアいゝが今日お前さんお宅へ御出被成たら津藤さんに此間の事を 岑 また其様な方角違へを言付るヨ徳町とやましる河岸とは何程道が隔つて居ると思ふナ ふき ヲホ、左様かへ私やアまた近所だとばかり思つて居ましたはトいふ後から御存の和十うじのはやりツ子なり



和十「格子情人は法度だよ。ふき「ヲヤ悔りした和十さん何所へお出だ。和「此宅へサ。ふき「ヲヤ〜何ぞ用があるのかへ。和「ア、岑次郎さんの所へ情人から文を届られたからちよいと。ふき「ヲヤ和十さん昨日の題をこしらへたが何様も出来がわりいから間に合まひてこれよりか前にお前のこしらへた方が能さそふだ。和「ナニ〜番敷が多いから一人て考ると何様も同じ様になるからト障子をあけてはありながら。和「房吉さんおはありだらふ子。ふき「イ、エ私はモウ参ります。それじやア子ト格子へ顔を押し付ける。岑「なんだ。ふき「アノウト後は小聲にてあしたの晩は急度歸つてお呉れヨ。岑「ウム今夜は裏のお吉老女さんを留主に頼むぜ。ふき「ア、そして子トまた何やら考へて居る和十は笑ひながら和「イヤモウうるせへ子だぞ能加減にねたが事をお言なせへ他所の人が笑ひやす。ふき「ヲホ、夫じやアまア参らふ子岑さん何も用はなひかへ。和「まだ未練が残つて居るのだ子。ふき「ホ、アレモウうるさひ子。和「ヲヤ〜何方がうるさからふ。ふき「ヨイヨおかまひてなひうるさくつても。和「ハイ〜おかまひ申ませんから随分御ゆるりとおのろけ遊ばしませ。ふき「ヲヤ遅くなるからモウ参らふ和十さんハイ左様なら。和「ヤレ〜〜漸くハイ左様ならが出たノドレ朝ツばらだが請負の御馳走になりやせうよ房吉のあと見送る房吉は二足三足行過しが亦立戻り。ふき「アノウみねさん。和「ヲヤ〜まだかへアハ、ふき「ヨイヨ和十さんお前に然いふのじやアなひは子。岑「なんだナ其様に幾度も呼び出してト格子へ顔を出せば。ふき「アノウ今夜お前さん何方のお宅へお止宿被成ルンだエ。岑「ナゼ夫を聞のか見世の用があるから行のだアナ。ふき「夫なら能けれどもアノ今夜は姉上さんの方へ止宿ちやア否でござぬますヨ。岑「ナニ〜何様してお糸の方へ行て居られるものかそして今日は母人さんがお京を連れて伯父さんの所へ止宿がけにあそびに行といふから本宅へ歸つて老實になつて居なひと治りがわりいはナ。ふき「ほんとうかへ夫じやア明日の晩此方へお出ても大丈夫だ子。岑「何が。ふき「アレサまた私の方へ来て頭痛がするの氣色がわるひのとお言ひじやア否だといふ事てござぬますト笑ひながらいふ折しも櫻川善孝由次郎の。善「サア〜路くさをくつて居ちやア行なひお急ぎだ

春色梅美婦禰卷之九了

お急ぎだ。ふき「ヲホ、善「善孝さんモウ支度をするのかへ。善「モウ〜選ひくらゐだヨト言はれて房吉は欠出して行岑「由さん些とお上りな和十さんも来てお出だから善「ハイ有がたふちよいと一ぶくいたゞきませうか子。和「善孝さん昨日は大きに。善「イヤ和十さんさぞ昨日はお勞れてホンニ目録が私の所に届ひて居ますヨトこれより何か二ツ三ツはなして居る中に寺町の巳刻の鐘ゴラン〜〜引



春色梅美婦禰四編序

蓮池庵の主人近來一家の文法を起初て一家言數十部をあらはす予是を讀了に其中間に笑的あり喜的あり悔的感  
的誰的恫的逢的諛的ありて人をして讀了又讀了檢て手に在て放すことを斷ざらしむその由は何ぞや實に江湖上  
の千般萬様の事見聞すると一様無二なればなり此書を讀了這心を辨了這夫主を學び此小官家を做ひ這大妨々を學び這  
小妨々を做はゞ人を善道嚮導ものにして酸海中に入らしむる事なく眞に一種の教諭書といふべきか予目時肚裏に思ふ  
處をもつて此書の卷首に誌了看官夫これを何といふや

辛丑之秋日

靜春主人

春色梅美婦禰卷之十

梅園英對の拾遺

江戸爲永春水著

第十九回

再說岑次郎の母親はお京を嫁としお糸を圍ひ女の如するも種々の氣配にて縁者の人々を説つけ亦岑次郎の父をも得  
心する様になせし慈愛を思ひはからばわが子ながらも岑次郎が母を大切に孝行を父にも盡し家業の事も油斷はあらじ  
と思ひし所此頃は兎角家内に腰を落着す遊びにのみ出しかばお京は姑の機嫌をはかりかねて心配をなせしかば姑  
はこれを不便に思ひお糸の方へ伴ひ行政めて姉姉の盃をさせお糸をも折節本家へ呼び寄せてお京とならべて遊びを  
させ何れも勝負なく愛憐しかば兩女の悦びいはん方もなし然るに折あしく岑次郎はお糸が本家に来て居る時は家内  
の用事なども調へお糸が家に歸り行時分には房吉の方へのみ行様になりしゆゑお京も母もお房の方は心付ずお糸の方  
へばかり岑次郎は行遊び居ると思ひければさすがに女心とてお糸母子を恨みけりされば或時岑次郎の母はお京を連  
て柳川亭のお糸が許へ至りしが少し顔色をあしくして奥へ通り座に直るをお糸の母は挨拶しながらお京を見れば泣貌  
にて居るゆへ怪みながら會釋をし夫より二階に向ひお糸を呼べばこれをとどめて岑次郎の母 岑母 今日はお前に種々  
とお嘸し申度こともあり亦此嬢も此間中から兎角氣分がすぐれずにぶら／＼と鬱情様子で困りますからチツトまた此  
方へ置てお糸と二人が和合して此子の病氣をも岑次郎に看病させ度から連れて參つたのサそして今日は岑次郎は何所へ  
か出ましたか子 母「イ、エ只今化粧をして着物を着かへて 母「アレサお糸の事ではござるませんは岑次郎は何



所ぞへ出ましたかと申ことサくめ母「エ岑次郎さんかへみね母居ませんか手くめ母「イヤ〜お宅ではござのませんか此間は久しく此方へはお出でなひからお衆も案じて居りますけれども私が申すには何も案じる事はなひ大略お見世がおいそがしいから夫で此方へお出なさるお間がなひので在ふと申て居りましたみね母「ナニ〜何様いたして家業のことを手傳ひでもする様ならば申分はなひけれども久しぶりて家へ歸つて間もなひのに旦那のこれは岑次郎の父をき前を取直してマアお衆を嫁にする様にしたり亦お衆のことも餘儀なひわけだと思ふから此所の家をこしらへてといつた所がお前方母子衆が恩がましくお聞てなひヨ不殘岑次郎の爲にした私の苦勞それを何とも思はずに遊んで歩行も宜ひけれどせめてのことに晝半日夜は二更とか三更とか時刻を極て家内へ歸る様にすれば何にも用のなひ身分だから私も此嬢も氣はもまなひが他へ出たりといつたら五日も七日も家へは寄つかず此方へばかり来て居ては内外の者の思はくも悪ひばかりか私が世間へ聞えて濟なひ我子の行儀第一お衆も可憐そふて於衆女はよからふけれども此嬢の心を汲わけて義理といふことを思つたら岑次郎が長居をせぬ様にお衆がして呉てもよさそふなものだと私は思つて居るけれどもお前は變腹姉嬢マアお衆よりお衆の方を本家へも入度様にお思ひだらふけれども然すると私が猶の事最初から苦勞をした甲斐がなし同じ縁者の娘でお衆もお衆も私の爲には姪の事だから兩方ともに可憐心に變りはなひけれどもお衆を嫁にしたのは田舎の身上を仕舞てお衆を岑次郎に添せ度といふ親の願ひまた賤しい心だとお思ひか知らなひが夫に付ては大金を岑次郎の方へ送られる義理もあり四方八方の能ようにと私が骨を折様にして治めたのだから岑次郎が私へ對して何程母でも少しは恩報しに氣を休めさせても罷じやアありませんかトいふ中にお衆は化粧をして下へ來り伯母へあいさつをもちつちとけてそれよりお衆とお衆を下さきににおき母親同士二かいへゆきさけさかななどとりよせてきはらきながら岑次郎のみもちのよろしからざるはなしける〜此時お衆お衆の二女は下座敷の中間にて三味線を出して遊ぶ茶見勢の方は客もなければ下女が茶籠筒の際に居るのみ兩女は淨留理をかたり居る

上照へよしあしびきの山めぐり四季のながめも面白や合梅が笑へば柳がまねく風のままに〜さはらびの手を引そふて彌生山合つくらふ花の仇さくら 食もは氣まゝに山吹も見はてぬうちに 合春過てはや卯の花とはながつみ 食そしてあやめ菖蒲やかきつばたはつそりと時鳥合あれ夕立にぬれしのぶすゞ風がへ 食鷹がとゞけし玉づさは合小萩のたもと合かるかやに返事紫苑も朝顔の 食おくれ咲なるうらみわび露にもぬれてしつぼりと合伏猪の床の菊がさねヨイ〜ヨイヤサ〜よいやさへ行初しくれ松も杖つく老の坂 二上りテン

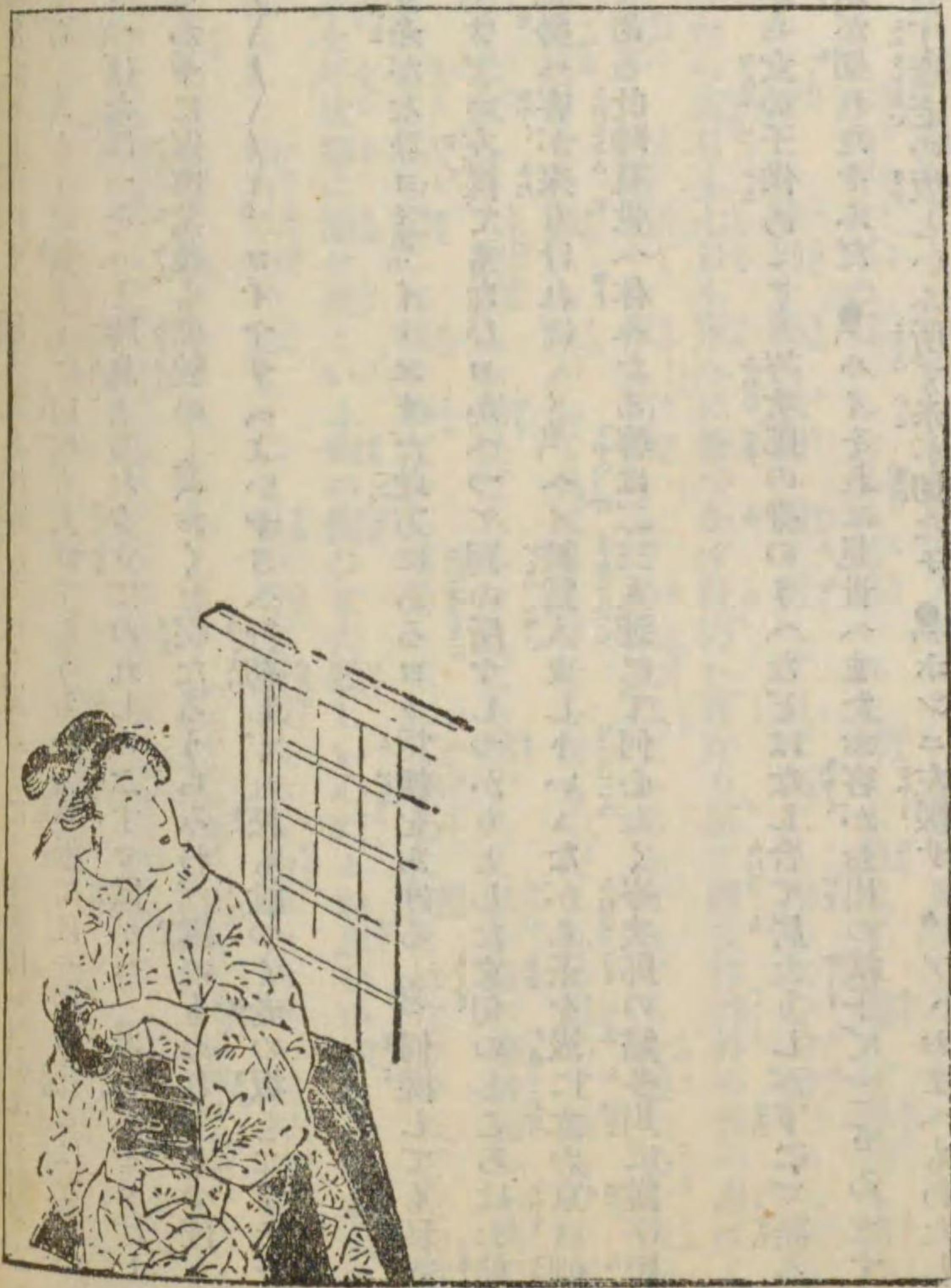
ボツン 哀「イヤ〜いけないねへモウ糸がなひヨくめ「イ、エまだ此方にあるヨト戸棚をあける 哀何様しても私きやア義太夫聲が出てならなひ子へ くめ「ナアニ左様でもなひヨかへつて詞の所やしつかりとした文句のところはお前のはしやんとしてよひヨトいふ折から見勢へ客が來りければ くめ「へい被爲入ましといながら茶を汲に立お衆は側にありし田舎源氏の十二編をあけて見てゐる此時見世へ休みたる客は二三人連にて何心なく岑次郎の婦多川に遊び居る噂をして歸りしとぞ

再説 ▲岑次郎の母 ●二階にて酒くみながら女の子供のこと岑次郎の身のうへなどはなし合て居たりしが下にて語る淨留理を聞ながら ▲「イヤおしい所て糸が切れたそふだ ●「ハイそれに見世へまたお客がお出の様子でござのません ▲「ハア左様か子道理で止たと思ひました丁度老の坂といふ所て糸が切れた子 ●「ホンニ左様サ ▲「ア、おまへもわたしもモウ初老の坂をば一ツ二ツづゝ越て今になつて見ると子どもゆゑに兩親のことをおもひ出します子 ●「ホンニ左様でござのませんとも併手前勝手にマア親のことよりか子どものことを案じますか何様も子どもは其様には思ひませんヨそれだから親馬鹿とむかしから申しますがホンニ違ひないかとぞんじますヨ ▲「イ、エそれでもまづマアお前は寔に仕合だは子お房ぼうでもお衆でも揃つておとなしいことをお見何様してあの様な娘子どもは當時はすくなひヨあの

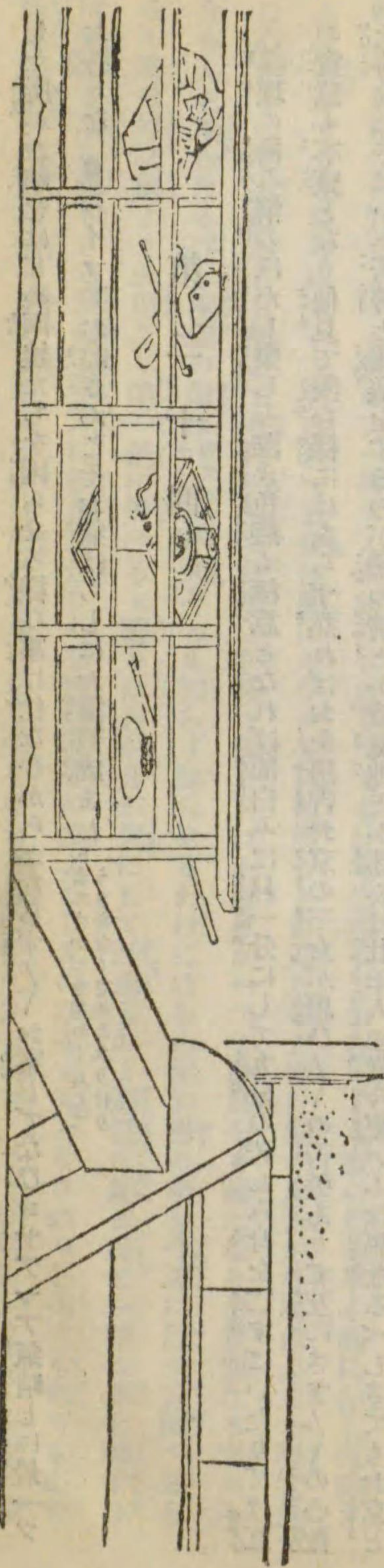
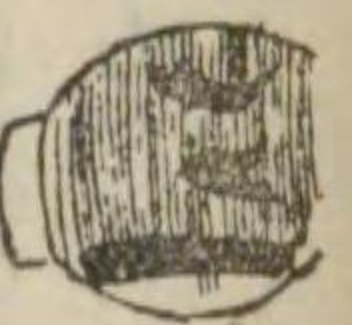


マア岑次郎が娘ならば何様したもんだ子マアひるき目していへば情人の一人や二人は堪忍もするけれど下に居る娘達と入かはつて御覽なそれこそあの性わるでは打捨てはおかれなひは子 ●「フホ、まさかに女の御子ならばまた放蕩も被成ませんは子へ全體御生れ付がおやさしいから私共の子どもをもちあはひそふだと思召てお世話を被成て被下たからツイ子ども等も此様になりましたので實はと申ますとお房やお衆がわるひからの事でござりますは子 ▲「イ、エ左様ではござりませんヨ實に今日お京を連れて此所へ参つたのはおまへにも少し

恨を言ふしまたお衆にも義理を知らなひ仕方だといふ事を異見と小言とならべて言ふと思つて来た所が ●「フヤフヤそれは何様いふわけてござりますか ▲「サア私が推量には岑次郎の此間中本家へ歸らなひのはお衆が此家へばかり呼寄せて置のだらふと思つて手迎ひにお京をよこそふといへばあの娘は姉さんの前へ嫉妬らしく思はれては濟なひのはつかしいのと内端なことがかりいふから夫て私がお京を連れて来て岑次郎



つ居たらばア今しがた見世へ来た客人たち  
の噂では此家へも寄つかないの子の不埒な  
ものではいはれなひは左様して見ると此末お  
衆やお衆かかはひそふなことにもなるだらふと  
疑にてア苦勞じやアありませんか何をいふにも  
兩娘たちは愷氣嫉妬といった  
ら少しもせずかこれにもまた  
因るねへ何にしても先刻の噂  
を大開裂して是非岑次郎の心を入かへるか但  
上た親をも兩娘達も思はなひくらゐならばい  
て今度お勘當として仕舞はなひければ私  
も旦那の前へ對して濟なひわ  
けと言つた所が左様なると岑次  
郎故に苦勞させた娘達に氣の  
通なりホンニモウ／＼私ほど子どもを氣をもむ  
者もあるまひと思ひますヨト言つて少し胸を痛  
めて心細く他を思ふは身を思ふもしや岑次郎の  
心が變り女郎か情人か娘女の  
爲に勘氣を請たら猶の事意氣  
地をたてる相手の女定めて男  
の身を嫌ひ是非ともみづく心となるべし左様な  
時三人の娘も是まで苦勞をせし甲斐のなき  
の女ならず實情のお房お衆か心の底命も捨る不  
下顔を出し兼まじき戀の欲もしもの事があるな  
らばいかでなさんと胸を痛暫時言葉もなかりし  
が心を推してものやはらかに ▲「ナニ子左様





した所がお前をはじめ兩娘たちを困らせる様な事は仕なひからかならずくお案じてなひヨサアア氣晴しに最一ツお呑りな ●ハイマアお前さんこそお氣ばらしにお重被成ましトまたきかづきをめぐらして

第二十回

義理の柵み情のほだし樂しみ深き色戀も極意となれば面白みは只一分にして九分の苦しみを亡すにいたりては互の實意も不實となり他見て羨む様にはあらず然ればお糸房吉お京の三女が思ひくくの苦勞ありて互にさまざまの心配止時なしさはいへ苦勞と難儀をするのが戀の情とか意氣地とか迷ふは壯年人の常今更いふは愚なるべしさてもお京とお糸は見世前にて往來の人の品定めして遊び居る其姿花にもまさる美麗笑顔にもるゝ愛敬の自然なる人品にて殊にお糸は唄女風にて婀娜なれども賤しげなくお京は元來位高き様なる生得を姑の好にて幼少化粧し乙女風往來の人も立留りて見惚ながら二女を賞て行ゆへ何となく恥かしければお京は壁の方へ向て狂歌俳諧の摺ものゝ張ませの様に張たるをながめて居る書畫の大人の會日あるひは俳諧の題をしるしたる月並の法條そのほか番附など張てあり 哀ヲヤヤ何れも奇麗な畫だ子へその中でこれが一番能ねへ くめ何れへ 哀これサ此畫が寔にいゝねへ

面白き鞠にうかれておもはずも

桃江園主人

ほうとかけたる鶯の聲

くめ「ア、それは山しろ河岸の藤さんといふ旦那に貰つたのだヨ毎年奇麗な摺ものをお拵だとサ 哀ヲヤ左様かへ岑さんんも狂歌をお詠だ子へ くめ「ア、その柱かくしは岑さんだヨ 哀ヲヤ「これがかへ くめ「イ、エそれは文亭さんといふお方のだヨ其次が岑次郎さんのだは道理で手が似て居ると思つたは畫は誰だへ くめ「畫は子英泉の弟子の英一といふ人が畫たので子あの額に英泉と寄合書だヨ 哀ヲヤ柳亭種彦といふ名が書てある子へ くめ「ア、あれは子

寔に久しい以前に田舎源氏の作者が詠たのを岑次郎さんが覺て居てお書のだヨモウ二十年ほどになるとサ 上野山花の吹雪はいとはねど

あたりに箕の輪笠森もあり

くめ「それは能いが岑次郎さんは今日でモウ幾日ほど宅にお在てなひのだへ 哀ナア二日中は折節お歸りだけれども夜は少しも宅へお歸りてなひから母御さんが此方へばかり来てお在だらふと思つて私を當分姉上さんと同居に置とお言のだから私きやア寔にお前さんへお氣の毒でなりませんは くめ「左様かへ夫じやア先刻のお客達の噂ばなしがなひと私も母人さんも疑れる所だつけ子へ 哀ナニ私きやア少しもお前さんをわるく思やア仕ませんが母人さんが父御さんの岑次郎の父を 前へ濟なひといつて氣をもんでお在なさるのだから必ずく私をわるく思つてお呉てなひヨ、姉さんくめ「ナニわるく思ふものか子夫よりか私きやア先期のはなしだと急度岑次郎さんが婦多川の唄女か圍ひ者の家へばかり行てお在のだと思ふは 哀「ア、急度然だヨ憎らしい子へヲホ、アノ子姉上さん私きやアまだお知己にならなひけれどもお前さんのお姉御のお房さんとかお呼のが和哥町とかにお在じやアありませんか其お房さんにお前さんが能頼んでお遣なら宜らふ子へ私の方へ岑さんが歸りてなくつても此宅迄歸つてお在だと本家の用も早く間に合し母御さんも案がすくなひの子へト言はれてお糸は胸にギツクリ只他所ごと聞なせど實は姉の房吉が外にはよもや岑次郎の心をうつす方はあらし然とて今は引別て此所と彼所と隔たればお房はかへつて此姉を身儘になりて氣樂なる事のみならんと羨むなるべし兩個の母は岑次郎の母夫ぞとも知らず知らせるわけにはあらずお房の事を今更に母ヤ世間へ知らるゝ時は岑次郎よりお房より第一他に笑はるゝ誇りはわが身が先にして淫蕩ものよ悪性な姉と姉と一個の男を戀争ひは何事ぞ恥を知らざる親姉姉互に欲から起りし事親類までの顔よごしといはるゝ元となりぬべし兎ても角ても心を改めお京を本妻お房を妾と定めて此身は尼ともなりなん然もせざる時は相互ひに一生心はやすまるまじと思案を極



めてあるぞとも知らねばお京は猶彼是とさも睦まじく語合て其日は姑ともろともに柳川亭より本家に歸り只向に岑次郎の事を案じて其行先を問尋ひそかに其所へさがし行んと心を惱し居たりける其後お糸は覺悟を極母とお京へ遺書をして心強くも忍びやかに我家をはしりいで早くも駕籠を雇ひつゝ垂を下して他目を隠れ尼寺さして急ぎけり

果しなく物思ふらん長繩手

尾州一ノ宮

浮世は旅の前路なりけり

狂花亭 春蝶

頃ハ六月中旬なりけん小夜更わたる町小路涼みに出し人々も臥戸に入りて門淋しく往來も絶たる折なるに十四五人の若衆が町の木戸際に寄あつまり ▲「サア、些も早くやらかして仕舞ふじやアねへかだん、に夜がふけらア」 ●「ホンニモウ丑時だらふナア。ヤイ、鐵ヤイ地口方燈の棒を不殘抜てしまやナ」 ●「モウ片側は抜てしまつたア」 ●「然かそれじやア此大方燈ばかりだアサア、油のある中にやらかせ、ト木戸の上に高く組上し大方燈の兩側に二階の屋根の軒から明に貌の色雪にもまさるうつくしきが素足の儘に息もせはしく背後の方を見かへりながら欠來りつゝ若衆に突當り 女ヲヤ眞平御免被成ましツイ急ぎましたからトいふを此方に居たる若衆が見て笑ひながら ●「ナニ、あやまらずと能やア子お前の様な美麗のに突當られりやア本望でござへやすト戲言いふを聞娘は心ならざる體ながら 女、アノ鎌倉の尼寺へ參るには何様參つたら宜ござめませうト尋る返事もせぬ中に足音高く地ひびきさせてたしかに 娘の追手かと被察たる二三人がはやくも其所へ近付ける 必、竟此娘の安否は奈何亦追來りしは者どもは何者ぞ其委しきを知らんとならば次の巻をよみたまへかし

春色梅美婦禰 卷之十

春色梅美婦禰 卷之十一

梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水 著

第二十一回

そも、牛頭天王と申奉るは神代に御勢ひ猛き御神にて素盞烏尊といへり然ば人皇五十六代清和天皇の御宇に播磨國より山城國八坂の郷に遷座ありて本朝武勇の尊神と崇め奉る事最古し其故は清和天皇の貞觀十八年より今天保十二年までは九百六十六年になれど猶それより古く人皇十二代景行天皇の四十年に日本武尊東夷を征伐の御時夷退治の大願を素盞烏尊に祈り給ふとて始めて東國にこれを祭り給ふが最初なりその素盞烏尊の鎮座まします御社は武藏國豊島郡忍の池の西北なる根津大權現 則、これなり實に武運長久怨敵退散病魔除の祈りには江武におゐる根津權現に勝る神靈はあらじ名にしおふ日本武尊の武勇にて尊み給ひし御神なれば素盞烏尊の神功は申もなかく、龜略なるべしここに根津の社は千七百二十二年のむかしより在せば山城國なる祇園の社より古き事七百六十餘年の以前なり亦牛頭天皇と異名を稱申兩部習合の説にして諸書にしるしてありそも神代の遠き昔素盞烏尊の餘りに猛く荒々しく在しければ天照太神の御勸當をうけ給ひて日本の國の中に住給ふことかなはずはるゝと琉球國までさすらへ巨旦大王といふ人の家に近付宿を乞たまへども巨旦は情を知らぬ財主なれば厳しく斷て尊を入れず却て害し奉らんと計る此節は蓋烏尊も勸當の御身にて勢ひなければ詮方なく其所を退き蘇民といふ貧しき者の家にいたり宿を求め給へば蘇民はいと貧しといへども慈悲深き者なれば尊を勞り御宿をいたし粟の飯を進め奉る折節異國より暴疫鬼の押來る事を察し給ひ



蘇民が家の入口に茅の輪を造り神法を行ひ這を除給ふ其翌日より一村の人ことごとく疫病にて煩ひ死にけれども蘇民の家内は障なく疫病をのがれたり斯て尊は蘇民に別れたまふ節仰せられけるは此後もまた疫病の流行時あらば蘇民將來子孫と書て門口に張置ば疫鬼の家内に入事あたはじと教へ給ひしといふ實にも勇々しき尊の御功ならずや後生いよく神力あらたに在ゆ多日本國中此素葦鳥尊牛頭天王申たてまつるを祭らざる所なし別て繁花の町々には此所彼所にて尊の神輿を修造て氏子中を渡し疫病を追しりぞける事を祈る六月の祇園會は三才子も知りたる事ながら因に依てここにしるせり再説天王祭りの神燈大行燈を仕舞かゝりし其所へ周章廻來る一人の娘間もなく追來る二三人先に立たる一人は出刃庖丁の研すましたるを右手に引提後に續きし二人の男は三四尺ばかりなる棒を持って駈來る娘は若衆の四五人立し軒下の暗き方へ隠れるを若衆は早くも推して背後の路次口へ入れて遣る所へ近付三人が 虎 照 平 八 一 月 今此所を十八九になる娘が通りは仕やせんか子 ▲「エナニ娘が今道を開たツけ何だか息をきらして駈て行たア 虎 何所の方へ行やした子 ● 然さ何所へ所たか先は知らなひが此先の横町をまがつて逃て行たアまだ遠くは行めへ 平 こそふてござへますか子 虎 憎ひ女だア盗人めがト言ながら欠出し行春後見送りて壯年等が娘を隠せし路次に入小聲になりて信切に ▲トキニア危ひ目に合所だつけノウ ●「さればサ一人の野郎めはびか／＼光る双物を持って居やアがつたぜ X エコウ姉さんお前マア何様したのだから何でも餘程悪ひ事でもしたのか彼奴等に捕まると殺されてもする様だぜ双物を持って來た奴は大方お前の丈夫だらふ ● 何でもおそろしい面をして追欠て來やアがつたがお前の丈夫じやアないか ▲「縁があつて此様なに隠して上たくらみだから其筋道をはなしなせへ兎てもの事に難儀を救つて向ふへ掛合を付て上やせう X お前一人が逃出して來たのか密夫も同伴に逃たのかへト四五人寄し壯年等が密夫などとして丈夫に見咎められ逃出したる様に推量なせしかば其趣に問かゝれば娘はいとと恥かしく亦悔しければにや涙ながらに身の上をあらまし咄して聞せける これ本交しつばらひはなほ女が以前へもたたりて女のこゝろはけなき千種にすだく此の聲亦二ツ三ツ飛盛夜風は

涼しき時置の時置宙を飛する四ツ手駕籠掛もせずはしりつゝ往來よりは一丁ばかり西の芥なる森の軒の茅家の前へ駕籠を下して かこ虎「サア姉御此方へ出被成 かこ平「ヤレ／＼足に正體がなくなたア かこ熊「コレ／＼愚痴を言やるナ肩と足を勞らした代には今夜親方が樂んだ跡じやア此方等にも樂しませて夫から何所へか連れて行やニト包になる品物だア有がたく思やナトいふ中にはや手を取て駕籠の中より引出すは月の光に潤はしき色をましたる一個の美人四邊を見まはし驚く風情これ 則別人ならず彼婦多川に居たりし桑吉が柳川亭をも振捨て尼寺へ行んと途中に雇ひたる駕籠の者どもが思ひもよらざる悪人にて鎌倉へ行路を違てかゝる所へ連れて來りしなり くめ「ヲヤ／＼こゝは道中の宿屋てはなひねへ 虎「知れた事サ本街道をうか／＼行とお前の家内からは追人が懸らふし此方の胸算用を悪ひから田舎道を横筋違に此様な所へ連れて來たのサ。サアまづ今夜ア此家へ止宿と極なせへ不斷は明てある宅だから諸道具もなし火の氣もなし不自由でいけねへが其代りには隣家は遠し往來の人は通らず高聲をしても聞人はなし何を何様せうと遠慮は不入のス

ト勝手なる戯言を吐ながら三人かゝりてお糸をともしひいと古びたる草の家の内へ引入れ燈火を照らし兼て調ひ置ぬるか酒肴など取出しお糸に酌を言付て酒汲かはす其風情はなか／＼駕籠かきの體にはあらず昔繪本の大江山酒呑童子の有さまにてお糸をさながら我ものと言ぬばかりの取扱ひ頓て不法の行ひもなしかねまじき様なればお糸は怖さ悔しさに物をも不言居たりける

虎「コウお糸其様に鬱情で居る事アなひぜ此身をばわすれてしまつたか。コレまんざら知らねへ顔でもあるめへがくめ「ヲヤ私やア些も覺へて居ませんヨそして駕籠やさんに心易くした事はありませんものヲ 虎「コウ／＼其様に此身を安く下直に言つて呉る事はなひぜまさか此身も腹の中からの駕籠かきではなひはナこれでも近頃まで深川通とも言はれて一人や半分は和哥町に情人も持て居た藪やの虎さんだア今じやア零落て此様な所へ來ては居るが内證まで駕



籠かきを仕ては居なひぞ以前其方が衆吉と呼て出た始めに知己になつた事もあるぜ其時分から念がけて居たが縁があればこそ此様な珍らしい所て出合はれる事が出来たのだ。モウ斯して隠れ家まで見せた上じやア否應は言せねへ所詮此方は命がけてする仕事だから覺悟して自由になるが能ト憎々しくも手込めの詞退れがたなきお衆の難儀詮方なくぞ見へにけり

斯て三人の悪人等は飽まで酒食を盡しければ虎八はお衆の膝を枕とし其餘の二人も酒機嫌に倒れて正體なかりしがお衆は一生懸命に神佛を祈つゝ頓て其家を逃出し東西南北の當所もなく右よ左と欠走りやう／＼に町家へ出て彼天王の火行燈を仕舞場所へ逃來りしなり此旨趣を壯年等にはなしければ祭場の人々は齒をかみならし

▲「イヤハヤそりやアまアとんだ噺しだアそれが實正ならば今追欠て來た奴等ア勾引だナアト言へば友達も一同に●「エ、コレはじまりから其わけを聞いて居たのだと彼奴等をたゞき倒してこり／＼させて遣るものヲ ×「脊後を追欠てもモウ捕へる事は出来ぬへか ●「イヤしかし盗人猛々しいといふから今にまた此所へとつて返して來るも知れなひからマア／＼頭の宅へても連れて行て止宿せてやるが宜からふト

さしも實意の壯年氣質俄に人々が頼母しくお衆を介抱して其町内の頭だつたる人の家にぞ伴ひける

第二十二回

夜は更たれども涼風に働き安しと夏の空星もきらめく銀河自然と秋へ近くなる冷氣を催す時刻なりしがお衆を頭の家へ伴ふ若衆のはなしを聞て立出る二十二歳の婀娜なる女此家の娘にて名はお稻といふ。お衆と顔を見合せていなヲヤ衆吉さんかへマア何様被成だへサア／＼お上りな くめヲヤ／＼小稻さん寔にお久しふござるます子エト互に挨拶をするを見て此家の主市郎兵衛 市ヲヤお稻の友達か いぬア、和哥町に居た時は姉妹の儀に爲たんだア子

市ハア然か夫じやア猶更の事た遠慮なしに奥へ行て娘と二人ではやくマア休み被成定めて勞れもあらふ。サア／＼かまはず奥へ行なせへくめハイ有がたふいなアレサ遠慮なくお上りな私ばかりで誰人も外には居なひは子ト無理には伴ふ奥の方市郎兵衛は子分の若衆に向ひ 市サア／＼餘り夜がふけるから些も早く休むが宜らふ残つた片付ものは明日にするが能せまた間違ても出來ると悪ひから「ナニ最早不殘片付て仕ひやした残つたのは職のわくばかりだから兎てもの事に片付て仕ひやせうトいふ折から表の方にて何やら物騒がしく若衆の聲にて ▲「ヤイ／＼逃すな逃すな頭の家へ引ずり込がいゝ太エ奴だ ●「はやく白双をたゞき落さなひと行けねへぞ長薦てたゞき倒せ／＼ト大勢さはぐを聞付てお衆を送り入たる若衆も得物々々を引提々々木戸の方へ欠出し行ば市郎兵衛は驚き乍らも表の戸をへ支度をして一腰を帶し 市「お稻ヤ此身が歸る迄は鍵をかけて置いて戸を明るなヨト言捨にして市郎兵衛は喧嘩の場所へ欠出し行

斯て市郎兵衛が欠付て見れば前段にしるしたる籠虎籠熊籠平の三人がお衆を追蒐來りて見失ひまた欠行しがとつてかへし様子を聞付て若衆にお衆を隠せしならんと咎め懸りしが争ひとなりし事なれば弱きを助ける壯年の氣性も揃祭の元氣元來非道の悪者を憎み腹立ありける所へ身の程知らぬ虎に熊強しといへども人面獸心また籠平も平なる奴にあらねば天罰を恐れず刺客の只中へ飛て火に入虫同前こゝに憂目に出合ふは疫病神を拂ひ清める牛頭天王の神徳なるべし

●「ヤイ此盗人めエ女を勾引損なやアがつて此方等に向つて懸るとは呆れた畜生だぜ ▲「ナニ／＼かまはず踏倒して繩で轉るが能 ×「面倒だアたゞき殺せ／＼ト大勢集りて双物を打落し頓て三人の者を繩にてぐる／＼巻にせしかば市郎兵衛は壯年等をなだめて強くは打せずされども餘りに 公をおそれざる曲者なれば後々の見こらしめにもなるべしとて文注所へ訴へ奉りしかば聽衆の頭の糺させ給ひて三人とも首を刎て後々の悪人を懲しめ給ふぞ難有けれ這は乍併 日數も過て後の事と察したまへ借も其夜も明ければお衆はお衆に食事などを進めし上父の市郎兵衛に終夜聞た



る由にてお桑の者の上を委しく語り聞せしかば市郎兵衛これを聞て笑ひながら市なるほど女子どもとは言もの、餘り氣の狭ひ了簡を付たものだノウ誰人も六借言わけでもなひのに自身ばかり落度の様に三人の中で只一人身を引て尼になるなんぞといふ不所存な事があるものかなをしてマア其様な美麗顔て夜道を一人歩行をするから昨夜の様なあぶなひ目に逢だらふじやアなひか折能夜中に若い衆人が往來に居たればこそ此家へ隠して貰ふ様にもなつたのだマア必ず氣を少くもつて親姉に歎げきを懸る様な事を爲被成ないが能子マア二三日お稻と二女で和合遊んでお在被成其中に自己が考へて三方四方の治りの宜様に落付て上るから何でも私に任せて置被成ト市郎兵衛が信切に請合ばかりか小稻は姉姉が久しぶりにて出會しごとく陸ましくお桑の側を片時もはなれず實意を盡すにぞお桑も嬉しく心安堵市郎兵衛の詞にまかせて此家に四五日身を忍ぶ様にして居たりしが柳川亭にてはお桑の母は書遣を見るより狂氣の如くお京の許へも内々にて知らせしかばお京は驚き悲しみて母にもなかく隠し置事ならずと其趣を告るにぞこれと同じく悔りして詞も出ず周章騒ぎ早速柳川亭にいたり涙ながらに兩母同志火急に相談を遂て心利たる人々を頼み尼寺の方へ遣はし途中より聞合せて貰ひながら尼寺まで聞合せけれども一向に似寄し事もなしといふ沙汰にて尋ねに行し人々の手を空しく歸りしゆへいよゝ歎き悲みて尼寺へ行と遺状をしたれども海河へなど沈みしか又は途中にて不慮の災難を受けて身を苦しめ危き事に逢ては不居かと案じ憐れ如何にとも詮方なければ兩母は神に祈り易者を頼み種々なれど便なく途方をうしなふばかりなり然らば柳川亭の隣家の者も隠すとすれど聞傳へて見舞に来る各々實意の世話をして彼是と尋ねに如在はなかりしがお桑が家を出しより三日目の日中過夕立雨の降て往來の人も途切れたる折節茶見世の戸を半分おろしてあるを這入るは隣家の内儀一人の女を伴ひてお桑の母に驛すすめ彼女を奥へ通しければ長屋の内儀も言合せしか表と裏口より二三人入來り母なる人に挨拶し各ひそめき寄合つ一人が立て茶碗に水を汲來り盆の上にて載てさし出すを母は請取り隣家の内儀が連來りし女の前に備へて水を手酌るに及けり是なん降巫と

いふものにて斯る折には人々が避る重ぬる所爲ながら又無理ならぬ女子達の人情ならんか譽も降巫は出口と水酌られお定りの言出しも濟し時兼々降巫に間上手と噂をされる長家の内儀さまお可曾といふが膝をすめベソアノウお桑さんかへエ違ひなひかへ ほかの女「アレサ其様な疑ひを言すとお桑さんらしいから何所に居るか夫をお聞きなベソ」然かのウ。アノ子お桑さんお前マア母御さんが此様な泣あかして苦勞にしてお在だのに何故便りを被成てなひ子エとして遺書と違つて尼寺へも不行に何所にお在だト問ひかけられて彼降巫はさも悲しげなる聲音にて生口なれども哀れなり いち「今さら後悔を仕ますがナア家を出るより思ひがけなひ人達に取圍まれて幾世の難儀を爲ますにナア母じや人の案じて被下苦勞より私が母さまを案じわづらふ辛苦の悲しさはマア何様にかまさるつらさも恨めしひ人の障りに母さまの側をはなれる不孝の咎も定り事が何様ぞして今一度は顔を見合せ度ござるにヤア引」「ヤア」お桑さんにしては否な詞遣ひだ子へ「マアだまつてお聞ヨト互に前後の内儀達が顔を見合せて氣味わるそうにして居るお桑の母は始終顔に袖をあて泣て言葉もなしベソそれが子お桑さんお前も家内へ歸り度おなりなれば直に歸て來られそうなものだ子へ いち「ヤレサア夫はナアア言はれませずと歸る事がなれば悲しひ目をば爲ませねど右も左りも怖ろしひ人が前後を用心して油斷を爲ねば一足も出られる様なおろそかな透間といふがなひ故にイ飛立ほどのかなしさを従容と堪へて間を見れど十日の間に出来ぬとモウ一生涯母さまのお顔を見る事はなりませんまひモシ然うなれば此世を去も同じ身を哀れと思ふて被下ヤア引トいふを聞より一座の内儀思はずワア引と泣出し涙の雨に夕立の空猶曇るありさまなり

此節になりてお桑の母身を振して歎き悲み何卒お桑が恙なく家内へ歸る様になる除をして吳よと降巫に頼み其外種々氣をもみて片時も忘るゝ事はなかりしとぞ嗚呼世の中の親心子故に迷ば賢きも愚痴になるこそ哀れなり

春色梅美婦禰卷之十一了



江戸 爲 永 春 水 著

第二十三回

再説お糸が家出して行衛も知れずなりしかば柳川亭の母もお京が方にては知らされず彼是と内々に周章騒ぎしが斯る節になりてもなほ岑次郎は家に不歸依之兩方の母も愛相の盡るほどあきれて岑次郎の事は先さし置只お糸の行衛をのみ案じ入て苦勞に心も亂れしごとく涙にのみ暮けるがお糸の家出したる四日目の朝兼々心易くせし遊藝人萬蝶が柳川亭の門口から萬ヲヤ／＼大變に朝寐ぼうだ子エモウお客が来て休む時分だのにお見世も明ないてトいふを開けて奥より出るお糸の母「ヲヤ萬蝶さんお早ひねへ 萬ナニ／＼些も早くなしサ。此頃お糸さんの寐ぼうにお母さんまで引ずり込れて朝遅くおなん被成たのだ。サア／＼お糸さんお起被成萬蝶が急用があります。アハハ、。サア／＼遅ひ／＼ト例のお株の元氣よく座敷へ上り 萬ヲヤ／＼中の間でなく奥でなしお糸さんは二階へお寐ン眠かへそれじやア朝遅ひはづだアハ、。母「アレサ萬蝶さんお糸は寐ては居なひは子ト言ながら涙を浮めしを萬蝶は早くも見とめ 萬ヲヤ母御さん涙ぐんでお在なさる子何様か納成たのかへそしてお糸さんはマア何所へお出のてござめます 母「ナニサ何所といふ當があれば案じは爲無けれども些も行た先は知れなひからモウ／＼私しは苦勞になつて頼が痛んでならなひのサ 萬エ、實正の事か子 母「ナニ啞を吐ものか子今日でモウ四日目になるけれども少しも便りがなひのだから柳川へても言入は尋まひかと可憐そふてならなひトいふも鎮りて涙の聲言すがに萬蝶も元

氣をうしなひ母の側へ腰の披たる様に動止坐して 萬イヤそれはマア大變な事が出来た子エ何様いふ事て於衆女が其様な氣になつたのでござめますか何ても深い理害のある事てござるませうが私も今から不及ながら尋ねに出て上様が少しも心あたりはなひのかへトいへば母はお糸の書置萬蝶に出して看せる 萬是ても鎌倉の尼寺の方へは 母「影もなひといふから途方に暮るは子何様ぞ仕様はあるまひか考へてお呉ナ 萬ハテ困つたものだ何様も外に斯といふ能知恵はなひが此上には是非在家を探して見るには飯糰權現さまの法を願ふのだ子ト是より萬蝶は飯糰の御利益を委しく語るゆゑ母は命も代りたく思ふ我子の事なれば亦其相談に及しが 母「マア何にしても岑次郎が些も家内へ寄付ず何所へ行て遊んで居るか此家へもモウ十日の餘も貌を出さなひからお糸も案じて居る最中實家のお京が岑次郎の母と同伴に來て此方にばかり岑が居る様に思つて恨みを言たものだからお糸も氣を惱出して此様な事になつたのだから困るは子お前は岑次郎に外でお逢ふことはなかつたかへ 萬ナニそりやア逢ますとも實は昨夜岑さんの所へ止宿て夫からお糸さんに用があつて來たのでございますのサ 母「エイヤ岑が宅とはエト言れて萬蝶もこゝろ付き 萬エ、ナニ何サ岑さんのお宅ぢやアない岑さんが常に心易くする家へ行て其所に岑さんがお在被成てから私がお目にかゝりましたのサトさすがに物馴て如在なき萬蝶なれどもお糸の行衛知れずといふ大變に心驚しゆゑ岑次郎の隠してある房吉の家の事を放心と言出したる事なれば言葉のさしつかへしなり母は元來お房の事は心つかねど岑次郎の放心居る所が在ならんと察して居たる事なれば萬蝶に向ひ 母「アノ萬蝶さん何様でモウ斯いふ大騒ぎが出来て娘の行衛が知れなくなつた程の事だから何も角も最早隠して物をする様にしては居られない事だは子マア岑の居る所を委しく聞かせてお呉れナ夫が出來すばお糸の家に居ない事を咄してはやく此家へ連て來てお呉ナ 萬何様も困つたものだ 母「オヤ／＼何故其様を事をお言だモウお前は岑に逢れないのかへト聞れて暫時萬蝶もさしつかへしが。兎ても斯六借騒ぎの出來た上は何事も隠す道理もなしと思案を極め 萬實にお前さんに明しては些わるひ事だけでも何様で知れずにも濟ますまひし第一



さしかゝつてあのお子も大變に苦勞をして泣てお在だから夫で私が今朝此方へ欠出して來たのだから 母「イヤお前何をお言ひのだエそしてあの子とは誰人の事だネ 萬「ナニサ房吉さんの事でございませすはナ 母「オヤ／＼お衆の事をお房が聞いて泣て居るといふのかへ 萬「ナアニ何様して其様な事を彼地で御存知のわけはありやせん私も今此所へ來てお聞申たのだものヲ 母「ホンニ然たらふねへ夫にしては何故お房が泣て苦勞をして居るのだから 萬「さればサ岑次郎さんが腫物が出来て十日ほど絶食同様でわるくすると命にかゝると醫師がいふから岑さんの苦しむのを見て房吉さんは泣ながら看病して居被成し亦何程岑さんだからといつても實家へ久しくお歸ん被成なひ中に火急の大病だからさしかへる事もあり房吉さん一人て看病も出來ず萬一の事があつた節諸方へ知らせずに置ては濟すお醫師さまは治り難るといふから其所で早くお衆さんをお呼申度といふ譯サト聞いていよ／＼驚く母親亦一増の苦勞の一件呆れて詞もなかりしが 母「何様してまた岑次郎が不 快からといつてお房の宅へ行て床に付たもんだ子へ 萬「ナニサ病氣が發つたから房吉さんの所へお出被成たのではなしサ房吉さんの宅に寢てお在被成て夜中に痛み出して急に大病におなり被成ましたのだから大變サ 母「イヤ／＼それじゃア岑次郎は辰巳へ行て始終お房の所にばかり居たか子エ 萬「エ、マア然てござりませう 母「イヤハヤ呆れた子どもだノウ他様に開れても親達が目なわけだト溜息を吐ばかりなり

是より萬蝶はお房と岑次郎の深き中なることをはじめ姉妹の心々にてお衆の義理合房吉の意地づくの事まで委しく話して相談に及びける

○夕立や只時の間に他所の雨

爲 永 春 泉

斯る緯のありぞとも知らねどお京は發明にて岑次郎の行衛をはやく尋出さばお衆の行衛も思ひの外に知れる事もあらんかと彼婦多川なるお房を尋て對面し是に問ば大方は居所も知れるわけとなるべし亦然なくともお衆の家出せし事を妹なればお房に告てその了簡をも聞にしかじと心付しゆる母の前へは内々にてその心を告彼婦多川の榎木座に臨居

せし父の胎へ行おもむきにて下女と小僧を連て家を並出婦多川にいたりしが下女と小僧をば父の胎へ御せ置父にも隠して只一人和哥町なる房吉の許へやう／＼と尋ね行委しく聞ければ此節は家内に病人ありて見板をも引て居るとの事ゆゑ先お房の門口から密に内の様子を伺へば 萬「アレサ岑さん氣をたしかにもつてお吳よヨウ岑さん其様に苦しひかへ。アレ何様せうのう。サア此お薬をお上りヨト泣聲にていふお房の聲岑さんと呼聲を聞てお京は胸さわぎ思はず表の格子をば案内もなくガラリと引明け中敷居の障子を明ながら 萬「御免被成ましお房さんのお家は此宅でございませすかトいへどもお房は岑次郎の病はげしくとり詰し苦痛を勞り前後をも辨へがたき程なればお京なりとも心付す入口の方を見向もせず 萬「お咲さんおりよさん知らないが鳥渡アノ茶碗へ水を汲てお吳被成ヨ。アレサ岑さん引ト呼ぶは岑次郎が氣をうしなひたる體と看ゆるゆゑお京ははじめて來し家なれど遠慮して居る所にあらねば臺所の方へ走り行茶碗を探して水を汲岑次郎の床の側へ持來りしをお房は請取口にふくみ岑次郎の顔へ水を吹かけ泣聲にて 萬「岑さん／＼ 萬「イヤ／＼案じなさんな 萬「岑次郎さんお氣が付きましたかトいふ節岑次郎は少し眼を開き四邊を見まはし 萬「イヤお京は何時の間に來たのだ 萬「アノ只今參りましたヨ。未お房さんに御挨拶もいたしませんヨト言はれてお房は悔りし 萬「イヤ私きやアお隣のお咲さんだと思つて居りましたヨお京さんでござりましたか眞平御免被成ましヨ。ア、引怖かつた萬一これ限りにお成ならば私きやア何様せうと思ひましたヨ 萬「私も表から這入ながらお前さんが泣聲で岑さん岑さんとお呼びのを聞きましたから胸がドツキリとして案内もいたさずお宅へ這入りましたヨ堪忍して被下まし 萬「イヤ、エ何様いたして私はまた逆上て夢中の様になりましたからお前さんだかお隣のお内儀さんだか知れませんから直様に水を汲てお吳被成なんぞとお遣ひ立申ましたは御免被成ましヨト互に漸々義理合を述る中にも岑次郎に心を付て介抱は勝り劣らぬ兩女の實意なか／＼筆には書寫し難し彼是する間に岑次郎の苦痛も思の外に治りし故お房は安堵して 萬「アノ夫じゃアア些手を放しますヨ折角お京さんが始てお出被成たのだから



「哀、エモウ些もお構なさるますナ私、は此様な事とは存知ませずお前様に是非お目にかゝらなひければならぬ事が出来ましたから急に参つたのでござりますヨ、何故母人さんが何とぞ言つたのか、哀、エナアニ然ではござりませんヨ私が内密でお房様にお咄しがあつて参つたのでござりますからお前さんはマア氣をお惱被成ますナ亦御病氣がわるくなると行ませんヨト言ながらお房の側へ近付て聲をひそめ、哀アノ子お房さんお前さんも岑さんの事で氣をもんでお在中だからお知せ申ては悪いけれども捨て置れなひ事だから申ますが子未御存知ではござりますまひ子エ、ふき、ヲヤ何でござりまするか此頃は岑さんの病氣にとり紛れて何にも外の事は知ませんヨ、哀、エ他の事はござりませんが子ト是より、彌聲を低くしてお桑が遺書をして家を出し始末を委く物語ればさすが姉姉の事ゆゑはなしを聞中にお房は胸を轟かし眼には涙をうかめつゝ顔色變りて泣伏ける

お京はこゝに岑次郎がお房と情合のある事を始めて知りて驚けども嫉妬の心は更に發らずなを細やかに語合ける

第二十四回

こゝに亦猿寺の地内に假住居せし判次郎は彼お園の欠出して來りし一件にて終夜彼是と相談して眠りもやらず在けるが枕元なる方燈の明るくなりつくらくなり消んとしては亦明るく夜風の音も何となく物づく聞ゆる折しもあれ誰とは知らずしづかに枕元へ來るものあり此時判次郎は總身しびれて動事ならず最々異變覺へしが臆氣なるもの枕元に座して「サテ其許にははじめて而會に及びますが縁あつて不便に思し召被下お園が父にて小佛善左衛門と申者此末にもにお園をお見捨被成ぬ様にわざ／＼今晚お頼み申に罷越ました程の事また先刻堤下の茶店へ推參いたしてお園へ不法を申かけ恥かしくも嫉妬の念にて拙者が深ひ思案も知らずお園に迷惑をかけ夜中に其許までを騒がせ申たる事氣の數千萬兼々心がけいたして拙者が死後の義を其許へお頼み申さんと覺悟いたして居たれど拙者が絶命の一途今日に追

り是非なく俄に罷出お頼み申す其旨細は最長々しき愛着の愚痴殊に混雜ましたる必死の難儀久しく心配いたす利害にて彼堤下へ昨夜中参つてお園に迷惑をかけ申したる彼愚妻に拙者が存生の中得心致す様に申聞ては遺に武家の恥と存知て家内をば立去まじと思案を致し難題を申かけ追出しましたるは拙者と俱に命を捨て申まひと深き所存の底ぞとは知覺申さぬ女の淺はか尤拙者が切腹の際に臨んで他人に知さず親元へ遣はしたる遺状の中にしるし置ましたるを後日にて愚妻めが讀ますれば心も解て後悔いたしお園をはじめ其許へもお託を申て萬端の事をお頼み申す義と相成ませう然もござりましたらば胎内の小兒をお園の乙と致しお園を實子同様に仕れと業通も致さふが不足所は其許より宜しく解分下されヨト細密に頼むと思へば眠りは覺て枕を上つゝ四邊を看ど變る事なくはや曉の鐘の音の程近ければコラン／＼と陽の氣を發して告渡り頓て朝日の朗に閨中の雨戸へさし入て朝勤めのお經の聲は本堂の方にて聞え

倍こゝにしるしたるお園は小佛善左衛門が以前浪人して在し時園ひ女にしたるお八重といふものゝ腹に出生したる娘なり未當歳の時母と俱に縁を切て大佛の家へ歸參して父の家督を繼けるが父の死後にいたりて過し年父が一味の者を語合主君大佛の家を押領せんと巧みたる事家督を繼て十餘年を過し此節になりて漸々に顯はれる様にならんとするをひそかに善左衛門に告るものありしゆゑ其身は少しも知らざる事なれど實の父がなせし舊悪子として逃るゝ道もなし元來國家の重役なれば切腹の覺悟を極めしが其身のなせし悪事にもあらずして子孫を斷は先祖への不孝なりせめて血脈を残さんと過去りたる事を思ひ出て音信を絶せし實子お園を夫となく尋ね出し茶見世の株を買つてとらせ且女房の里も斷絶してなかりしゆゑ死後にはお園と同居させてわが種を産出したばお園の姉か舎弟にして育させんとはからひし事なりとぞ

判「コウ／＼お園さんモウ目を覺さなひか。巳刻だ／＼」その「アイお屋敷の爺さんはモウ歸りましたかへ」判「エ何だ



といふのだ。その「ヲヤ私きやア夢を見たのか子エ。アノウ今迄の旦那といふのは私の實の爺さんだと言つて委しく私に過た節の事を言つて聞せて今夜其方の所へ行た女は義理ある母になるのだから大事にして舎弟が生れたらば繼母と二人で守そだて、先祖の跡を立る様にして呉ると言ましたは、判ハテナ然して察ると此身の現に見えたのも、その「エイ夫じやアお前はんも何か夢をお見のかへ、判然ばサ何でもお前の爺さんだと言つて種々の事を頼む様であつたが夢の様ではなかつたから何様も不思議な事だと言ながら、雨戸を不殘くり明て四邊を片づけて掃出さんとして床を敷たる枕元の方を看れば紙に包みし小判二十兩あり小佛善左衛門と書付てありいよ、常事ならざれば判次郎もお園も互に顔を見合せ溜息をつくばかりなりしがさすがにお園は娘の情なれば親とはきけども氣味悪く前後を見まはしながら、その「判さん何だか怖ひ子へトいふ折から縁頼の外にて何の音か知ねどガタ／＼ガラア引と響きわたれば猶驚き、その「アレエ引と泣聲になり判次郎にしがみ付き色青ざめて身を振はし縮みあがる其時に障子の外にて猫のいがみ合ふ聲。ギヤア引キヤア引ニヤア、判、なんだちくしやうめへ猫が喧嘩をするのだそふだ、その「ヲヤ／＼然かへ寔にモウ／＼何様に怖りましたらふア、引怖かつたコレちよつと此胸を押へてお察何様にマア動氣が仕ますたらふ、判「ドレ／＼その「アレサ其所じやアなひヨホ、おかアしひ子エ。ヲヤ私キヤア些も氣が付ずに居ましたは何様せう子エ、判「ナニ何様したのだ、その「アノウ昨夜素足で欠出て來る途中で怪我をしたそふで足に血が付て居ますは、判「然か些と氣に掛るノウドレ看せな痛みは爲なひか、その「イ、エ些も痛かア有ませんヨ、判「然ならば能が怪我をさせては濟なひ大事のお娘子さんだからトいふ時しも隣家に住娘の聲にて、判「さん昨夜はお客さままでございます子、判「イイ、エ、判「ヲヤお隠してない可愛人の聲が聞へますよお園さん些私、私の所へ來て戀情談な子エ、ホ、ホ、その「ヲヤ私きやア只今來ましたヨト言ながら莞爾笑ひ判次郎の顔を見て嬉しそふなる姿は千金にも代難く思ふなるべし

春色梅美婦禰第五編叙

源氏は堅横の並びあり。謂所空輝夕顔は。帚木の堅にして。紅梅と竹川は匂宮の横なるなど。這は最正しき文法にて。企及ぶにあらねども。僕が策子も横堅縞。鼠が捨れば媚茶を織入。それでも時代だと革色やら。紺桔梗やら染込で。ゑたいも分らぬやたら縞。爾ば米八婀娜吉を辰巳の園にて結局。はや雲がくれと思ひのほか。英對談語に黄粉をつけ。最一つころげて梅美婦禰。又呀返る物語りは。堅を横なる格子縞。筆もかすりに織立しは。恥を晒のあさあさしく。末摘花と赤らむ顔を。潭の篝火あつかましく。近江の君程海口でも。女三の猫でニヤアンにも。知らぬ作者が筆拍子。乙女の巻の幼婦子等。みゆるし玉へと願ふになん

若紫の夫ならて横雲棚引曙の梅花の中に筆を舐りて 爲 永 春 水 誌



春色梅美婦禰 卷之十三

梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水 著

第二十五回

九時の拍子木の音「コン／＼／＼／＼」はるかに聞ゆる物賣の聲「蕎麥イ／＼引」  
 「按摩ア引ト宵の騒ぎに引替へ  
 ひつそりとせし唐琴屋の表座敷へ送りし客を床におさめて次の間より静かに廊下へ立出るお園胸なておろしてホツト  
 息。折しも來かゝる雛妓此花しんなるべし。夫と見るより駈寄つて「花ヲヤお園さん治部さんは寐さしたんざいます  
 かへ。そのア、漸々寐かしようしましたヨお前はんの前だけれども娼妓も悪ふありますヨ宵に揚りしつたとき鳥渡顔  
 をださしつたばかりだから只てさへ六ヶ敷屋の所へ娼妓は見へず可憐そうに此袖さんんなるべし。が獨りて困りきつて  
 居なはるから私が種々譯を言つてやつとの事て床へ納めたんでありますヨ。花私も急度然うござませうと思つて氣を揉  
 きつて居イしたけれどもあいにくと今夜ア方々が落合つて詮方がないんざますからお前はんに譯を頼んで治部さんが  
 強く腹を立たせませんやうに爲て貰はふと思つて駈出して來たんざいますヨ。そのア然うでございましたかへ私きやア  
 また今夜ア判次郎がお出なはるやうな咄しをちらりと聞きましたから急度夫でかと思ひましたは。花ヲヤ夫を何様して  
 知つてお在なますエ正直の所は宵に初會が二軒あつたところへ海老屋の一文字屋のが一所に揚らしたもんざます  
 からお前はん所の座敷とも五軒ござませう其所へまた寺内の判次郎をさがす。が今方來さしつて何だか眞な咄しであります  
 ものを娼妓も離れにくいのござませうから察して進てお呉なましト言はれてお園はグツトせしが態と笑ひに紛らして

そのアヲヤ夫じやア無理もありません子エ私も辨さんに言傳をたのまれた事がありました。たつげヨ何處の座敷だか序に  
 お目に懸つて往たいものであります子エ。花ア、然うお爲なましアノウ薫さんの座敷の隣にござますから。そのアヲヤ夫じ  
 やア奥の突當りてあります子。花ア、あの角の六疊にござますヨ。然してお前はんお内が宜かア後刻まで遊んでお在なまし  
 なお前はんに進やうと思つて取つて置たものがありますから。そのアヲヤ夫嬉しい急度でありますかへ又空言じやア御免  
 だ子エ。花ナニ今夜ナア實正に美物にござますヨト言ひながら駈出してゆく。

什麼このお園が過し夜に判次郎方に止宿し時父善左衛門の亡魂の夢現となくあらはれて過來方の物語りを二個  
 に報知たるのみならず二十兩の金までも枕のほとりに遺しあるにぞ是に仍て判次郎は善左衛門の妻。母に對  
 面して其夜の事を物語り遺言のとふり取はからはんと實意を盡して相談せしかばそれよりさきに善左衛門の妻は  
 夫の自殺を聞のみか遺書までも屋敷より届けられて既にはやお園を夫の子なる事まではじめて知りしうゑなれば  
 其身の思ひ足らずして我子とも見るお園に對し嫉妬の餘りはしたなき事のかづ／＼置りしを今さら口惜く恥かし  
 けれども夫が自殺せしうゑは屋敷へとても歸られねば萬事を判次郎に頼むにぞ判次郎も安堵して屋敷へ歸參の慥  
 ふまでは先此家にあるべしとお園にもあらためて母子の盃を取かはさせかの二十兩の金を元手にいよく商  
 賣に怠りなきやう拔目なく世話をししかば母子ははじめに引替へて血筋のごとく睦ましく素よりお園は人愛よけれ  
 ば日毎に客の絶間なく今宵も此系の客を送りて唐琴屋へは來りしなりこは這はじめに説べきを此所に縮めて綴り  
 しは例の作者が筆癖と看官よろしく察し給へ。

再説お園は此花に廊下で別れてひそ／＼と奥の方へと赴きつゝかねて夫ぞと聞置しまはし座敷へ忍び寄り様子いか  
 にと窺ふを内には夫とも此系が知らねば二個さし對の何かもつれし咄し聲。此モシエ判さん主しやア何故そんなに浮  
 氣がますへ私がこんなに氣を揉もの些たア察してお呉なましな。判コウそりやア何を言ふのだ。な此身がこんな身分に







此糸は目に持し涙を膝へほろりと盈し 此判さんは是て私の胸のうちをも推量してお呉なましな 判「そりやアモウお前の深切は察しきつて居るけれどもお園の事を頼むといふのはどふも分解ねへノウヤつぱり此身が何様かいふ情曲があると思つて逆も然うなつたうゑなら詮方がないから躲れ忍んでされるより奇麗に爲て貰ふ方が寐覚が宜ひといふ了簡で今のやうに言つて呉れるのじやア實に恨みだぜ 此イ、エ然う思つて呉なましちやア私の方こそ恨みまますヨお園さんの身のうゑは深く頼まれた事があるンぞまますから末始終私も姉嬢の積りて居ますから主も其氣で見捨て進てお呉なまますなヨ 判「何様もなをく分分解ねへそして深く頼まれたとは誰に頼まれたのだらう 此その頼人まますかへト言ひかけて少し鬱氣ぐ 判「ソレ見ねへ出たらめだもんだから早速頼人の名が思ひつかれめへ 此アレサそんなに疑ひなましちやア罪まますヨその頼んだ人といふのは那嬢のお爺さんの小佛善左衛門といふ仁まますが主も大方知つてお在なませう子 判「エ何様してマア那仁が 此サア是には寔に怖いやら悲しいやら今おもひ出して凄然するやうまますが子五日ばかり跡の晩に雨がたそ降つた事がありましたらう子那とき私まますやア獨りて座しきに寐て居ますと夢も現ともなく其善左衛門さんといふ仁が枕元へ來なましてモウく悲しい身のうへ咄し段々様子を聞て見ると私の爲にも義理のある伯父さんまますノサ其とき伯父さんが言ひなますにやア此身が死だ其跡までも不便なのは娘お園同様いふ過世の因縁だか判次郎を戀慕ひ他の男は持まいと處女心に思ひ込んで判次郎は何處までも和女に義理を立通し外面はゆるく見せかけても心の鏡は外さぬ様子はも見上た心ばへ然ういふ情合と知りながら枉て頼むは子故の闇和女が今にも廓を出て判次郎と夫婦になつたら否でもお園を引取て妾とまではゆかずともせめて判次郎の側へ置て折々やさしい言葉でもかけて呉るやうならば其身は素より草葉の蔭で此身も何ほど嬉しからう呉々頼むと言ひなますからそりやア私が請合てお園さんとは姉嬢ともなり二個で和合よく判さんを大事にする様に爲ますから必ず案事でお呉なますなと言つたら伯父さんが手を合はせて拜まつしやるやうまましたが夫限り見なくなんなましたヨ私もあんまり不

識まますから人を頼んで様子を聞て貰ひましたら伯父さんの死なした事もお園さんの身のうゑも夫に違ひない事まますから主の心を聞たうゑで私の胸をも明そうと夫で先刻のやうに言つたんまますから何卒お園さんをも私をも見捨ないやうに爲てお呉なましト眞實の物語りに判次郎は言葉もなく溜息ついて居る折りしも廊下先より姉嬢の聲にて花モシ娼妓エ急用まますから鳥渡來てお呉なまし 此「ヲヤ何だノウまたはじまつたかへ今往くからと然う言つて置なまし 花アレサ直まませんと大變まますヨ 此「エ、世話しない宜うまますから先へ往なましト言ひながら泣顔を直して 此「夫じやア判さん鳥渡往つて直に來ますから何處へも往ず待つて居てお呉なましそして今この事も後刻までに考へて置てしつかりとした返事をお聞せなましヨト言葉を残して此糸は一間を出んと爲たるとき障子の外に忍び居しお園とおもはず顔見合せ悔りせしが小聲にて 此「お園さんまますかへ その「娼妓堪忍してお呉なはい是でありますヨト物をも言ひ得ず手を合せふしおがみつゝ泣入れば 此「アレサそんな泣顔を爲て誰ぞ見ると悪うまますヨ夫じやア今の事を聞なましたのかへ その「ハイ私まますかへお前はんの御深切は死んでも忘れは爲ませんヨ 此「ナニサそんな譯じやアないが子。ホンニ丁度宜ひ折まますから此上襲を斯う着なまして子ト言ひつゝ卒度脱てお園に着せながら耳に口を寄て 此「子。子。宜うまますかト言はれて顔を赤らめながら その「夫でもそんな事を爲ちやア何様もお前はんにお氣の毒でありますものを 此「アレサそんな心配が入るものか子何でも判さんが私だと思つて種々な事を言はしつても無口てさへ居なませば宜うまますから思入れ可愛がつて貰ひなましト言ひ捨て此糸は上草履までお園にわたし其身は素足でさぐくと表座しきへ外しゆく心の中こそ頼母しけれ

作者曰當時廊中の通言を聞くに古代の廊言葉と違ひ多くは素人の娘のごとし今此糸も是に倣へど作者も深くは穿得ず只通客の批評を俟のみ這は言はでものことながら往古の事跡を今様ぶりに寫しなすなる策子にあなれば専流行におくれまじと此様な事をも言ふンまますヨ











寔に最う草臥て、房、ホンニ然うてありませうともお前はんは別して内にはつかりお在なはるから其管てありますヨ夫におまけにお百度を踏たので猶の事子エ、哀アレサそんな勿體なひ事をお言ひだと罰が當るかも知れませんヨ房、ホンニ然うてありました子エ悪い事を言つたヨ何様爲ませう、哀ナニうつかりお言ひのだから宜うござりますハ子私きやア是ほどの思ひをして參つたのだから屹度お利益があらうと思ひますは、房そりやアなくツちやアなりませんヨ、哀何卒一日も速く知れるやうに爲たいものでござります子エ、房私きやアこれが萬一知れないやうだと生ぢやア居られませんけれども先刻頂いたお籤の様子では近々に思ひがけない事て便りが知れるといふのだからマア樂しみかと思ひますはト言とき表の方よりして二十八九の一個の婀娜女鶴の儘にて入來りしが房吉を目ばやく見つけ、女ヲヤお房さんト言ひながら莞爾笑つて駕より出るは梅唇にてお馴染の小梅のお由と知られける

第二十八回

借もお由は思ひし通り千葉の藤兵衛の女房となりしより流石に派手な商賣柄とて夫につれて小口も利けば和哥町の唄妓達にも大嬢と立らるゝにぞ房吉は下地より米八の仕込ゆゑ別てお由の世わにもなり最負にされし事さへあれば夫と見るより駈出して、房ヲヤ千葉の貴嬢さんお前はんも折の内さまへお參りのでありましたかへ這處てお目に懸るとは寔に不思議でありました子エ、よし、私きやア先刻お前はん達がお百度をあげてお在のとき見かけたからお房さんと言つたけれども知らない顔を爲てお在だ子こんな婆アに同道になられちやア困ると思つて空耳をはしらせたのかへ憎らしい子エ、房ヲヤマア否にお言ひなはるヨ正直の事些とも知らないんでありますものを、よし、ホ、ホ、アレサ然う眞にうけられちやアお氣の毒だヨ眞實は子先刻見かけた時は何だか一心になつて拜んでお在だからわざと聲もかけなだけども能く小川か這處に休んでお在だらうと思つたから私もお百度をあげたり何かして歸りに駕の人の顔を見て

氣をつけて貰つたら丁度這處にお在だから寔に嬉しかったヨ、房ヲヤ嬉しい然うてありましたかへサアマア此方へお上んなはイト言ふうちお由は座敷へ通りお京に對つて、よし、ヘイ貴女宜くお參りてござりました子たしか這嬢は岑さん。ノウ房さん、房ヲヤ何様して知つてお在なはいます子エ、よし、ナニ何處てかお見かけもふした様だから、哀ヲヤ然うてござりましたかエ私きやアさつぱりお見それもふしましたヨ、房お京さん此方は千葉の藤さんのお内儀さんで子私もお衆さんも寔にも種々お世話になりますは、哀ヲヤ、夫じやア千藤さんのお在なさいますかへ夫てはたしか私が別莊の方に居つたとき、よし、ハイ七種を見に參つた歸りにお寄りもふして御馳走になりましたヨ、哀、ホンニ然うてござりました子エ私きやア斯ういふ放心だから寔に困りますヨホ、ホ、ト此うちお由も酒肴を取り寄せ、盃の遣り取りありと知るべし、よし、ホンニ房吉さん此間は岑さんが御馳梅が悪かつたさうだが最う快おなりのかへ、房、ハイ、其方はマア心配もありませんけれども姉さんがとんだ事を爲て呉たので寔に何様爲やうかと思つて居るんでありますヨ、よし、姉さんとはお衆さんの事じやアないのかへ、房、其お衆さんでありますが子基を言やア私が悪いのだから這所にお在なはるお京さんにも濟ない義理であります處をかへつて此お嬢が深切に力をつけてお呉なはるから夫て今日も折の内さまへお衆さんの事についてお參りを爲たんであります子お籤の表が大造宜ひから些とは樂しみかとおもひますヨ、よし、アノウそんならお衆さんの往つて居る所はお知りでないのだから、房、ハイ夫が知れて居るくらひなら氣を揉は爲ませんけれども一向に手がかりもないのでありますから此様に騒いで歩行ますのサ、よし、ヲヤ夫てはまだお前がたの方へは知らせてないと思へる子エ、房、ヲヤ知らせてないとは何ぞ手がかりでもあつた事がお前はんのお耳へ這入つたのでありますかへ、よし、ア、ナニ私も委しい事は知らないけれども此間亭主の藤さんの處へお衆さんの事について相談に來た人があつたから夫て知つて居るノサ、房ヲヤそして何所に居るんでありますとへ、哀、此間柳川亭



の老女さんが降巫を呼んでお聞のときには何でも怖ろしい人に取巻かれて逃る事も歸る事もないと言ひましたが  
 そんな所じやアござめせんかへ よし「ナニ一旦は怖いめにお逢ひだそうだけれどもそんなに何時までも歸る事の出  
 来ない譯ではないノサ 房「ヤ憎らしい降巫だ子エあんな啞言を吐て母公に氣を揉せてお錢やお米を取つて往たんだ  
 ヨ よし「そりやア商賣だから詮方がないは子此方が夫に迷つて氣を揉むのが誤りサ丁度お前がたが可笑くもない事を  
 笑つたり積な事を言はれても節を合せてお客に金を遣はせても夫が唄妓衆の商賣で放つて深みへはまるのも知らずに  
 金を蔭散らすのはお客の方の誤りだから降巫ばかりを咎める事もないハネ 房「ホ、、然う言へばそんなものであ  
 ります子エ夫はそうとお衆さんは何様して居ますとへ よし「アノウお前は小稻さんといふ嬢を知つてお在でだらう子  
 房「ハイ浪花屋の小稻さんなら寔に最う姉娣のやうにして居ましたが那嬢は此春年季が明て今じやア四谷とやらのお  
 爺さんの處に居るじやアありませんか よし「其四谷のお爺さんの所に衆吉さんも躲はれて居なはるといふ事て其人の  
 名がたしか市良兵衛さんと言つたやうだヨ 房「ア、私も小稻さんの咄して聞ましたがそんな名でありましたヨそして  
 大そう俠氣な方じやアありませんか よし「ア、夫だから藤さんとも深交してお在だそうて子夫て此度の事も相談に  
 お出のだトサ寔に奇妙なものじやアないか子エト

彼衆吉が鎌倉の尼寺へ往んとて雇ひし駕轎が悪漢にて身を穢されんと爲たりしを不思議に其場を遁るゝのみか彼  
 祭禮の壯年輩に追手の難をも救はれて市良兵衛が方に躲はるゝまでの仔細具に物語り

よし「子然ういふ譯だそうだからおいそれと柳川亭の母公の方へ引渡してはお衆さんが尼にならふとまで思ひつめた  
 のが何にもならないで只那嬢ひとり馬鹿者にされるのも可憐そうだからよく母公とも内々の相談をしてお前方の心  
 の底をも聞たうゑて納りをつけないじやア後日に何事ぞあつては宜くないといふ市良兵衛さんの深い了簡だところが  
 那一人ひとりの手際にも爲にくい譯もあるから其所で藤さんの方へ咄しがあつたのサ夫にまた暫間の萬葉さんがお前の  
 母公に頼まれたと言つて此事で氣を揉て居なざるから是にも規模を持たせるやうにと萬葉さんの中に入れて那一人から  
 母公の方へ渡つて貰ふ相談になつたのだからまだお前達の方へは咄す間がないのだらうヨ 房「ヤ嬉しい事でありま  
 す子エ私きやア姉上さんの行方が何様しても知れないときは死んでも言譯がないと思ひましたヨ 哀「私も今のお咄し  
 て積が治まつた様な心持が爲ますは是といふもみんな折の内さまの御利益かと思ひますヨ 房「ホンニ然うであります  
 ねエ夫につけても今度の事は私から起つた事でありますから姉上さんの行衛が知たと言つてのめく顔を合された義  
 理じやアありませんから母公に苦勞をかけたたりお衆さんに氣を揉せたりした言譯にやア髪をおろして折の内さまのお  
 弟子になる氣でありますからお前は末永く姉上さんを見捨ないで和合してお呉んはいよヨ 哀「アレサそんな心  
 細い事をお言ぢやア否でございますヨ何卒此事は千葉の貴嬢さんお前さんからお止なすつて下さいませよ よし「ア  
 アそりやア房吉さん悪い了簡だヨお前の氣ぢやア義理に立てるつもりであらうけれどもやつぱり人を騒がせる種だか  
 ら何でも三個が心を合せて怨ツこいのないやうに岑さんを大事にするのが上分別サ夫はそうとお前達はたつた二個で  
 誰も連ないでお在のかへ 房「アノウお京さんが内へ内證でお出のでありますからお店の人は連れられませ詮方がない  
 からまはしの佐助どんを頼んで来て貰ひましたら何だか此近所に鳥渡寄りたひ所があるといつて私達をこゝへ送り込  
 んで往ましたヨト言ふとき佐助は歸り來り 佐「嘸お待遠でござましたらうイヤこれは千葉のお内儀きん寔に妙でござ  
 へました子 よし「ヲヤ佐助どん今まで何處へ穴ツ這入をしてお在だお内儀さんに然う言ふヨホ、、佐へ、、  
 とんだ情人につらまつて麥飯と小米團子の御馳走によはりきりました 房「ホ、、夫じやアねつから氣がない子エ。  
 サアマア此方へ揚つて一口お呑りなお前のお飯も來て居るヨ 佐「イエ今申す通りの譯で日光責に合つて參りましたか  
 らお前さん方のお仕度宜くばそろくお出かけ被成ましお駕も二挺こしらへさせて置やした 房「ヤ然うかへ私達  
 ちやアまだ足は大丈夫だけれどもこしらへたとお言ひなら詮方がないから乗つて進やう子エ 佐「へん負おしみを被仰



ぜ先刻來とき淀橋邊からして餘程六ヶ敷歩行ツぶりをなすつた癖に  
是より三個は酒食も果て駕にうち乗り婦多川へとぞ歸りける

春色梅美婦禰 卷之十四了

梅園英對の拾遺

江戸 爲 永 春 水著

第二十九回

辰巳の園にて御存知の那丹次郎が侘住居せし其路次口へがたくと今湯歸りの米入が駈込まんとせし足元に落散る  
文を手に取り見れば



ト上書をなしたるがはや封じめは解きてあれどつけたる粘さへ乾かねば今届きしを丹次郎が鹿相て落せしものならん  
如何なる文かとおしひらけば

此間御はなしの人参り候まゝ急に御めもじのうゑ身のうゑの事御相談いたしたく候へ  
ば小池の二階まで御出のほど願ひ上り尤彼わけも候ゆる米印へは先御沙汰なしにて此人  
と御一所に鳥渡々々御出被下べく候

ト小杉の鼻紙に書たるは兼て見知りし婀娜吉が手跡に紛れあらざれば米入は胸にギツクリ堪り兼たる例の疳癩帯ゆり



あげつゝその儘に小池をさしてぞ駈出しゆく借もその頃婦多川に小池といへる料理屋の其奥二階に何やらんしんみりとせし嘶し聲 あだ吉丹さん今母公が言ふ通り田舎の叔父さんが尋ねて来て私の體を身まゝにして遣りたいと言つて七十兩といふお金を出して呉たんでありますから夫で私が足を洗つて素人にさへなりやア又叔父さんの方で少しくらひの元手を出して母公と私が口養居るほどの小商でもさせて遣らうと言ふんでありますけれども私きやア米八さんといふものゝあるお前はんを横取を爲て米八さんと顔を赤め合つたのを今となつて考へて見ると何様も濟ない譯でありますから爰て米八さんにひとつの規模を立させたりゑて私が身拔を爲ないじやア此和歌町で婀娜吉と些たア顔も知られた者があんまり意氣張のない唄妓だと出た跡までも言はれ種になるのも口惜いし又那嬢にも濟ませんから此度の七十兩で米八さんの身請を爲て進る相談に母公とも嘶合を爲て今善孝さんを頼んで中裏の親方に掛合て貰ふ積りに爲ましたから此間も鳥渡お咄しもふした通りお前はんは米八さんと同所になつて何様にも爲て取りつゞひてお呉んなはれば夫で私の顔も立し其内にやア又叔父さんと相談を爲て私も身拔のなるやうになりやア米八さんと同居になつてお前はんを大事にする事にもなりませんから此相談が出来たうゑて米八さんにはお前はんの口から私の心いきの通るやうに宜く咄してお呉んなはいヨ全體此事を米八さんにもはやく咄したひんでありますけれども那通りの氣性だから屹度私に義理を立て得心は爲なはるまいかと思ひましたから事の究つて仕舞までは那嬢には沙汰なしの方が宜らうと先で先刻の文にも米印へは沙汰なしと書て進たんでありますヨ 母なるほどお前の心意氣は極美しい譯だけれども夫程までに爲ないでも顔の立ねへ事もあるめへぢやアねへか 尤此事は此身の口から何方を何様とも言ひにくい譯だけれども折角叔父さんが大枚の金を出してお前を身儘に爲やうといふ金を他の事に遣つちやア あだイ、エ其事は母公とも種々相談をしての事でありませう。ノウ母公 母、アイサ基田舎の叔父といふのは私の弟でござりますが少しの事から申進になつて久しく音信不通で居りました所が互ひに年を取るに随つて張合ツた意地も抜け兩方がなつかしく思つ





て居る所へ今度鎌倉へ用が出来て弟が登つて来ましたもんだから昔の意根をすつぱり捨て娘の身拔に大枚の金を出して呉れたんでござりますが尤 弟は俠氣な者でござりますから娘が米八さんに義理を立る咄しをすれば急度此嬢の顔の立丈の事は爲て呉れやうと思ひますから何卒娘を人中で流石は和歌町の婀娜吉だと言はせるやうにして下さいましト言はれて今更丹次郎も止めかねたる折こそあれ二階櫓子の口よりして 米八「婀娜吉さんお前はんの顔は私か屹度立ますヨト言ひつゝ一間へ入来る米八後につゞいて櫻川善孝 善モシ婀娜吉さんお前のお頼の事は中裏へ掛合ツて首尾よく方をつけやしたから安心してお呉んなせへ然うした處で折よく米八さんに逢ひやしたから一伍一什の物語をして同道に連れて参りやした あだ、ヲヤ然うでありましたかへ寔に有難ふホンニ米八さんお前はんの氣じやア出過た仕方だと思ひでもありませんけれども何卒私の心をも察して不勝してお呉なはいヨ 米、どふして〜お前はんの心意氣を聞きやア自分の身が恥しうありますヨ正直の事は先刻湯から歸りがけにお前はんの所から丹さんの處へ行ツた文を拾つて子開て見たら身は身のうゑの御相談か爲たいから米印へは沙汰なして小池まで来てお呉なはいといふ文言だから斯ふいふ事とは知らずツト積に來て何でも私を出し抜てお前はん達が宜事をお爲のだらうと思ひましたから小池の二階へ往つて思入言つて遣らうと駈出して來る途で善孝さんが段々の咄しを爲てお呉なすつたんでありますヨト言ひかけて善孝の方を見かへり 米、是から私の思ふ所はお前はんから言つてお呉なはいな 善、ヲツト吞込て居やす其所で婀娜さんお前の心意氣を咄したらよの字も大よろこびで然うまで思つてお呉なざる事なら私の年季證文は婀娜さんから殿斗をつけて貰ひませう其替りにやア婀娜さんの身うけは私が爲るから其證文も請取つてお呉なざるやうに和合へ這入つて呉ると米公の頼みだが何様だらう子エ あだ、そりやア私の方のを聞わけてお呉なら又米さんのお蔭で私が身儘になられる様にお呉なはればどんなに嬉しひか知れませんヨ 善、夫じやアマア米さんの證文を七十兩と引替へにして持て來やしたからお前の手から米さんに渡しなせへト年季證文をさし出せば あだ、夫じやア米さん私の顔

を立て貰つてお呉なはるかへ 米、屹度思に當て貰ひますヨ其替りにやア私の進るのも取つてお呉なはいヨト懐から婀娜吉の年季證文を取いだし渡すに驚く一座の人々兼て利發な米八なりとも今さしかりて大金を調達はなるまじきを如何して婀娜吉の身の代金をこしらへしやと更に疑ひ晴されば思ひかねて丹次郎 丹、コウ米八今となつちやア何方の最負をするでもねへがまづ婀娜吉が自分の身請を止にしてお前を身儘に爲やうと言ふは寔に見あげた心意氣夫をお前が直素にうけて其返禮に婀娜吉の身請を爲て遣るとは意氣張づくに取ツちやア其通りの譯だけれども婀娜吉の身請だつてはした金では出來めへが其金はマア何様して出來たのだ 米、お前はんに借りましたヨ 丹、コウ何を言ふのだな何様して此身が其金を 米、アレサマア宜くお聞なはいヨ婀娜さんの 志が嬉しいから一旦身請を爲て貰へば私の體はお前はんの物でありませう其體を又借て直に以前の通りの抱女になつて夫て婀娜吉さんの身請を爲たんでありますから斯うすれば婀娜さんの顔も立私の思ひも通るじやアありませんかト言はれて皆々感心せしが あだ、米さん私きやアお前の利發にやア何様しても叶はないヨ夫だけれども折角私がお前はんをといふを引取り善孝が 善、コレサあの字お前の心もよの字の氣も此身ア初手から知つて居るから逆も兩方が意氣張てお前の思ふやうにはなるめへと思つたけれども山の喧嘩の其後は表向は美事に附合ツても互へに胸には一物があるであらうと思ひのほか婀娜さんが今度の頼み假令米さんは然うせずとも是で互の信實が兩方へ知れ合へば中へ這入つた甲斐があると夫て斯ういふ譯に爲たがお前の顔は立つたじやアねへか あだ、夫は然うでもありませんかへ大そううなされてお在だヨトゆり起されて目を覺し獨り心を痛る折しも 米、婀娜吉さん〜アレサ夢でもお見のかへ大そううなされてお在だヨトゆり起されて目を覺しあだ、ヲヤ今のは夢でありましたか子エ 米、轉寐をお爲のかへ私きやア今お由さんが梅を見ながら迎島の岑さんの別荘へ大勢連て往くからと言つてお在だからお前を誘ひに來たのだヨト言はれて漸々婀娜吉は人心地にぞなりにける 什麼婀娜吉が如何なればかゝる夢をば見しぞといふに以前婦多川にありしとき男を争ふ意氣張より山の茶屋にて



米八と大争論なしたるのちは敵同士のごとくなりしが程なく婀娜吉は病氣づきいとく難儀の其折から怨を捨て米八が身に引請て見繼たる其信切のわすれがたく今は丹次郎が世話になり斯安々と暮すにつけても何卒して米八に昔の恩を報ぜんと思ふにつけておもはずもかゝる夢をば見しものなるべし

○此時丹次郎は本家へ歸參しお蝶と米八をば本宅に置き婀娜吉をば別宅させて皆睦まじく暮す事辰巳の園の第四編に委しく著し置たれども首尾の前後をするにより看官見惑ひ給はんかと再び這回に記せしなり

第三十回

借もお京と房吉に折の内ししがらきにて小梅のお由が咄せしとほり彼お衆の身のうゑは市郎兵衛が引請て萬事藤兵衛と相談のうゑ杉簡の萬蝶よりお衆の母へ言入さすれば柳川亭の母親は娘を一個捨ひしごとく其よろこび大かたならず早速岑次郎の母にも報知て相談に及ぶ程に今度には名に應ふ藤兵衛と市郎兵衛が世話なれば女ばかりの了簡では返答もなりがたく餘儀なく岑次郎の父にも報知てお衆お房が身の治りを如何なさんと談合へば父も昔は小金も使し通者の果なれば今更に叱言も言はず此上は藤兵衛と市郎兵衛に任するあいだお衆お房の身の片付又岑次郎が此末とも放埒のなき様によくくきたへて下さるならば金子のところは何程なりとも此方にて出さんなれば見苦しくなきやうに取斗ひを頼むよし返答に及びしかば藤兵衛と市郎兵衛は種々と相談のうゑ迎島の別荘を修復して先お衆をば是に移らせお房をも婦多川より引取りて柳川亭の母侶俱に是をも同じ別荘に住せお京は素より本妻なれば以前のごとく本家に入りて舅姑に仕ゆるにぞ是より岑次郎も心をあらため家業に精を出しつゝ本宅と別荘に替りくゝに寐起してみな陸しくぞ暮しける兎角する間に其年も暮れ又立歸る新玉の梅咲く春となりしかばかゝる愛度身となりしも藤兵衛夫婦と市郎兵衛が一方向ならぬ信切にて厚き世話にもなりたる事ゆる是等の人はじめとして知己人々を梅見がてらに招かん

とて其由を觸まはせば此日迎島の別荘へ寄り集りし人々には

千葉の藤兵衛 小梅のお由 四谷の市郎兵衛 同娘小梅 丹次郎 お蝶 八十八子なりふの 米八 婀娜吉 お米

あだ吉のむ 判次郎 お糸 次郎が妻となり此ときは山の手邊に住む お園 次郎の妾となりしなり 増吉 はしろうといなる 清元延津賀

櫻川善孝 同新孝 萬蝶 和十 是等の人々を始として猶此他にも太夫唄女大勢連にて入來れば彼別荘には岑次郎

お京お衆お房等は夫と見るより出迎へ 岑イヤは是は皆さんお揃ひで宜く来てお呉なすつた子エ お由「お前はんがみん

なを連れて来て呉れるとお言ひなすつたから梅唇以來お知己になつた人を大方誘ひ合せて來ましたヨ 房寔に嬉しい手

エ 衆「ヲヤ米八さん寔に姑く 米八「今日は嘸おやかましようお前はん此方を知てお在かト丸鬚に結つて素人風になりし

此糸に指をさす 衆「ヲヤ娼妓でありましたかへ元服をお爲なすつたら子エお房さん 房「ア、私も寔にお見れ申まし

たヨ 衆「嘸婆アになりましたらう子ホ、ホ、 衆「イ、エどんなに宜ひ御新造さまでござひませう 房「ヲヤお蝶さんも

お園さんも宜く今日は 園「ハイ有難ふお京さんもお衆さんも有難ふ お由「ヲヤ、大そう御丁寧だノウホ、ホ、

房「ヲヤ婀娜吉さんはエ 米八「今外方でお米坊に小使を遣つて居るヨモウ、子持になつちやアいくじはない子エ

ホ、ホ、 蝶「ヲヤ些と耳が痛い子エ舞臺へ障るヨ あだ吉「イ、ヨお蝶さん無口てお在米八の嫉妬やアイト態と大きな

聲でいふ みなく「ヲホ、ホ、ホ、 房兵衛「イヤハヤ騒々しい爰て此人數が一々挨拶を爲やつちやア作者が堪

らねへから先上へ揚つての事とするがいはト是よりみなく座敷へ通れば兼て用意の酒肴を所狭まで置並べ心を盡

せし饗應に 盃の數重なれば果は互ひの藝づくし謠ひさどめく梅の春幾世かさねて老松の末のすへまで契り合ふ歡び

の聲笑ふ聲ドウ、ドウト此家のうちに納むる筆こそめてたけれ

梅唇より幾十卷か編數を重ねしを這所に全く局を結べば又首卷より繰返して見させ給へと願ふになん



春色梅美婦禰 卷之十五 大尾

春 告 鳥

花 風 情 月 春

告

鳥



花風月 春告鳥の序

僕四十雀の不惑といふ歳なれど。澤邊の鷺に異ならず。野呂里として家事に疎く。戯作を鴻鴈の活業に。風雅も洒落もあらざれど。人情ものを巧婦。それが鶴の愛鳩となりて。果なき鳴を喜鳥は。かの明鳥を筆果報の始とし。今猶書林へ鵲の橋渡しとはなりぬ。されば鴨の一より算えて。千鳥の數に滿る中本。山鶏の尾のながくしく。後を都けて鸞の山と積。翡翠の河より深き。看官の御ひきを。空行雲雀の高く仰ぎ。恵に供ふ一趣向を鶉うつらと翻案れと。毎時初音の手がらはなく。元來鶴の一聲に。寐りをさます奇談も雉も。しるし兼たる短才は。譬にいふと燕雀の。鵬の體をはづ。とはいへ拙著の外題をも。喚子鳥の得意もありてや。水鶏にあらで庵の戸を。たゞく知己さへ少からず。いつも著述を鵲鳩なれど。稻負鳥いなみがたくて。夜を以て日につく鶻の。はや故しらは鶻の苦勞。鶻は脾胃き作者の文盲。夫を都鳥の鶻たちは。鶻に穴を見出して。高く伺ふ鶻の目に。笑はれんことは。おそるれど。世活なれば鴛鴦つよく。鳩に三枝の禮もあり。また愛敬も在ますと。小陵鳥を賞て。日鶻をゑらみ。春告鳥を販元に贈り。四方にその音を傳へんと願ふのみ。

東都人情本の元祖

金龍山人狂訓亭

爲 永 春 水 誌

春告鳥  
鳥  
告  
鳥



はつといふ名に客人はあくまでもあとをつけたる雪の中裏  
 故人の作りし敵討を人情ものにかきかへたれば白刃を抜うといふ所を握こぶしの雨あられ命を落す一段を金ゆゑく  
 るしむ難儀におとしたとへ死んでも蘇生すべての趣向今様の道理にかなふを旨となしむかしばなしか本にでもありそ  
 ふなといふ目前を除れめでたくつゞりし勸善懲惡

江戸金龍山人 爲 永 春 水

◎巻中の目録

◎上の巻は廓の鶯

なくねゆかしき闇の戸に思ひもよらぬ昔話 はまゝになりたき籠の鳥

◎中の巻は藪の鶯

はつ音やさしき垣根越にもれて聞ゆるさゝめごとは思ひがけなき巢立鳥

◎下の巻は庭の鶯

音色うれしき圍ひの中に情のこもる兼言は木枝になれし庭の鳥

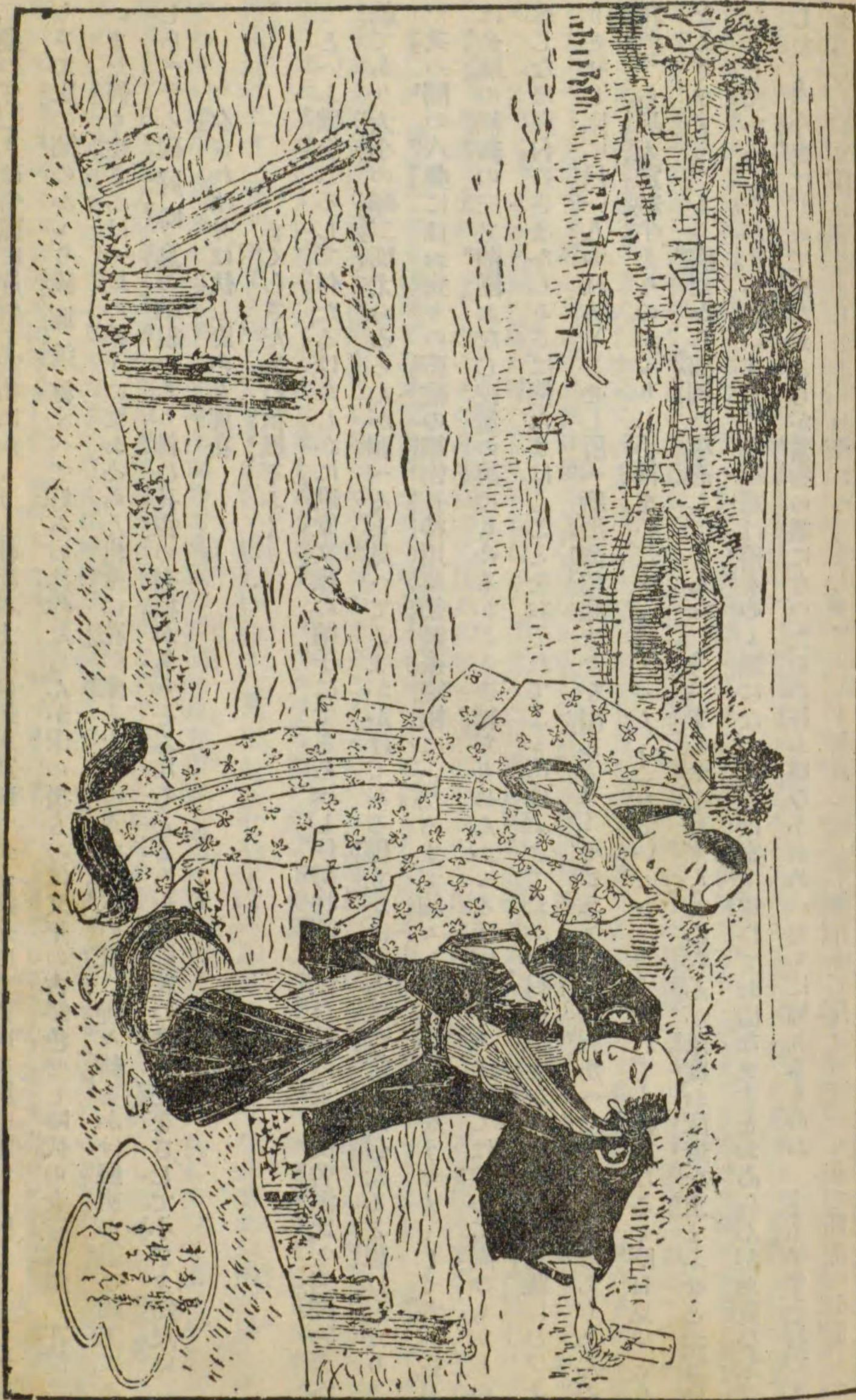
三卷六章目次畢



江戸 爲 永 春 水 著

第一章

さまざまのこと思ひ出す櫻かなその櫻節憂ことをわすれさせんと勧められ迎島の別荘よりうしやの土留木を二人連  
 おとなしき風俗の息子と櫻川新孝 新若旦那マア私にだまされたと思つて例の所へ往て御覽じましおめへさんにやア  
 急度お氣に入るにやア相違ごせへません此間も若竹の兼八が貴君さんのお噂を申て今度出来た薄雲さんを是非あなた  
 に出會し申てへとくれぐ左様申て居まして 鳥「そりやア有難へが相方て出るか何だか知れるものかナ 新「ナニノ  
 大丈夫でござへます 舟「ふとき乗切の船頭小 舟「サアお乗んなさいまし 新「ツイノこれは御苦勞サア若旦那お乗なさい  
 まし 鳥「アイ沙があるから洲を乗り切るに樂だノト二人はのりてむ 鳥「エ、コウ此洲へ犬が幾疋も来て居て汐の下る間平  
 氣にあそんでゐるからおかしいノウ 新「左様サ江戸の方の犬は斯いふ世界は知りますめへ 鳥「左様サ犬の世界とはあ  
 りがてへアハ、ハ、トはなしてゐるうちに 新「トキニ若竹へお寄なせへますか 鳥「左様ヨ門口から聲をかけて往ふそして  
 師匠さんに往て貰はふ 新「それだと宜ございませすが延津賀も弟子が多いから直にいかれ、ばよふござへますか  
 トはなしながら若竹へこへをかけすぐに縁がくぼのくるわにいた そも二階の結構よりその盛なる繁昌なんどはいはずと諸君の推  
 りかねてこゝろあてある加田玉といふ背楯にこそおぼりける 新「二階の結構よりその盛なる繁昌なんどはいはずと諸君の推  
 にまかして人情の要をのみしるす借爰に櫻川の伴ひし息子といふは大分限の秘藏にて名を鳥雅と呼び寒葉齋綾織の門  
 弟好雅にして風流なりさて相方の貴嬢といふは玉樓日の出の全盛にて薄雲と名を知られ二とは下らぬ立者なりそれ十









ますアノ私の茶わんに仕なまし きく「アイト薄雲の茶碗へ茶をつぐもつとも黒ぬりに金にて重桔梗の紋をつけたるふたをせし湯呑なり きく「ハイお茶。こゝへ置イす 鳥「イヤこれはありがてへドレさめねうちにと言ひながら湯のみのふたを見れば其身の紋とおなじことなり左様思ひながらも深くは考へず吞て仕舞 鳥「ツイ〜薄雲さんとやらどぶぞもふ一ツばいおくれ 薄「ドレ私がト土瓶をとりてこぼれるほどつぐ 鳥「イヤ〜大そふに強ひお酌だそんなに呑れるものか 薄「お残しなましな きく「それぢやアこの茶碗へわけて上へせう 鳥「左様々々薄雲さんは気が利て居るヨ きく「ぬしはよく私の名を知つて居なますねへ 鳥「實があるだらう 薄「ぬしは薄雲さんに気があるとさそれだから油断はなりイせん きく「イヤ〜おめらんはあんなことを トさめきのどくそふな 薄「薄雲さんも気があるからぬしの來さしつた節繪に書た様な客人が來なましたといつそ氣をまましたつたヨ トいはれてしんぞうはいよ〜顔をあかくする年は十六なれどもいたつておとなしきうまれつきの娘と見へたり

第二章

薄ぎく「ぬしのことを繪に書た様な客人だと申イしたのは私ぢやアありません雲井さんでありイすものを 薄「も〜何でもよふさます早く片付てお休みなまし見女はどふしイした きく「アレ見なまし兩禿ながら向ふに居眠りをしておりイす怠惰ねへ トいひつ、脚とかんざしをかみ 薄「起して其所を片付させなまし癖になりイす きく「アイ〜ト立て禿を起し三人にて座敷を片付暇乞して休みし後にて薄雲は上着を脱てひよいとはふり出し鳥雅の呑み残したる茶をぐひと一口に呑みそのまゝ側へ寄をひて涙をはら〜と落し聲をくもらせて 薄「モシエ鳥雅さんへそれでもわかりイせずは徳町の若旦那へ 鳥「ナニ徳町の鳥雅といふ名までくはしく知つて居るのかへ 薄「ぬしは覺て居なんせんも無理とは思ひイせんがぬしに始てお目にかゝりイしたのは今年度丁度三年あとしかも九月の十三日祭の夜みやの前の晩踊り屋臺の手見せの上くあの衣裳てお座敷をとお祭行事のお方がお頼みなんして龍極の勘太さんといふ踊子と相方になつてぬしの

隙の二階のおざしきて小町の役を踊つたのは私ぢやア 鳥「エ左様かそれぢやアあのときじやうだんに 薄「惚たなんどと云なましてからかひなましたそのあげくお落しなした薬入、口のちいさいくすりのれをいだして これ見なましぬしはなんともお思ひなんすまいけれど私やアもうその時にどぶぞと思ふ心から萬一これぎり逢れなひ様になつたらぬしのかたみと心付て欲氣はさら〜おツせんけれど肌身に添て持たさゆお貰ひ申イした此品を朝夕はなさずもつておりイす其後ぬしの噂をお聞申イしたら和歌町のお濱さんと深ひ中でお出なんすとははしいわけを聞イしてはとても年のかかない私なんぞを何と思つてもおよばなひことだと悲しく思つておりいすうち種々の薄命でとふ〜斯いふ身になりイしてなほ〜ぬしを戀しひと思ひイしても恥かしらしく今さらに文を上申すこともなりイせず心でばツかり久しい間おしたい申ておりいしたト涙とともにいとながき過越方の物がたりに鳥雅もすこし涙ぐんで 鳥「左様いはれて見れば覺もあるがあんまり嬉しすぎて夢のようだ 薄「アレサ茶にしておいでなますナコレ見なまし不躰らしいことさますがよく〜深く思ひイすればこそぬしの定紋を私の紋に付イして重桔梗は重ねてまたお目にかゝるを心のねがひトいひながら鳥雅の顔をじつと見つめて涙の笑貌莞爾とせしうつくしさ 薄「モシエどぶぞ見捨ずに來ておくんなましなトしみん〜といへば鳥雅は薄雲の顔を見て 鳥「初會の身分でたまされると思ふも自惚だが今の様なことをいつておめらんが實情になつて通つたらどぶする其時は氣休めが後悔だらうぜ 薄「それぢやア私が申イすことをうそだとお思ひなますのかへ 鳥「サア啞か實か知らねへが斯いふことになることゝは夢にも知らぬ昨夜の夢 薄「夢にも思はぬ夢とはエ 鳥「さればサ今おめへのいつた三年前の祭の夢におめへと情人になつた夢を見たが目がさめて少しふさいで居る所へ新孝が來ておめらんの噂此方も知らず新孝も知らず此所へ來て見ても唯うつくしいおめらんだと思つてばかり居た所でおめへの方てそれほどまで覺へて居てくんなさるとはありがてへしかしまア何にしても迷ひの種をはじめたがどぶぞ氣をもみたくないもんだ 薄「ほんとうに夢に見ておくんなましたのかへ 鳥「左様サふしぎではなひか子



薄夢に逢と實正には最逢れなひとふ事ではありいせんか 鳥ナンノく廻りあはずはしかたもねへが今夜斯して  
再會て見ればもはや別れる様な苦勞はありすまひかねへ 鳥そりやアおみらの心にあることだおみらが何と思つ  
ても今までの情人に對して義理や情だてをした日にヤア只一通りに呼でくんなさりやア格別まア氣休にも今夜のやう  
な仕うちて呼ばれて見ればツイ此方も自惚でどふぞ恥をかかへ様にとしげくればおみらの邪魔にもなるとい  
ふものだから是非この調子がくるふのサそれだから氣をもみたくないといふのだけはナ 薄ヲヤどふして 風に情人の  
何のと其様なものがありイすものか實に心ほそく思つて居りイす身の上さすからどふぞお氣に入らずとも後生だと思  
つて来ておくんなましなエ、若旦那さんエトすり寄鳥雅は夜着のはづれの方へ寄て寐る 薄アレサ其様にお遊なます  
と今に蒲團の下へおつこちなますヨ 鳥マアおみらばかり墮落の方さず 薄アレサマア此時へお寄んなましナトむり  
に手をかけて引寄るがよはき女の手になれどもかはゆひと思ふ一心に惣身の力を両手に寄て〇〇〇〇 薄サアこれ  
で其方へ寄て見なまし私も一連に引づられておつこちイすと笑ひながらいふ顔のかはひらしさ釋迦も孔子もなか／＼  
に慎みがたき美艷にて愛敬ごぼるゝ風情なれば鳥雅の魂ははや天外に飛たるや茫然として萬事をわすれたるがごと  
し 薄サアもつと此方へ寄んなましな意地のわるいねへ 鳥コレサせつねへはなあんまりひどくするから咽ががるヨ  
コレサ／＼ア引くるしい 薄ぞんならお遊なますナ 鳥遊ねへへ 薄ぞして子 鳥なんだ 薄おねがひがあります  
鳥なんだか早く言な、サア／＼ 薄アレサあしたは子急度雨がふりイすからそのつもりになさりイしな 鳥そ  
のつもりにはなんのことだ 薄アレサあしたもお出なさりイしな 鳥否々 薄どうぞお願ひぎます 鳥ナニサ外  
に否なことはねへがそのうつくしい顔を見て側にはなれず長居をして見ねへ直に命にかはらアナ 薄私こそこれ  
から命が縮まりイすと覺悟を極めて居りイすと申ししたところか是限でお出なさりイせざどふしいせうといふ中鳥雅  
はまた心の中に風とお濱のことを思ひ出して何所にどふして居ることか他に男をこしらへたの欲で影を隠したのとい

ふ氣づかひは決してないに極まつた女ごぞ苦勞をして居るか 薄死でもしたののならあれに對して氣なことが少し  
もあつてはすまねへことだがまた今夜の此女も捨られねへうつくしさ殊に此方の自惚かは知らねへがまんざらでもな  
く心のある様子どふしたと胸に手を置ても思案の外心戀には知恵も分別も出来ぬならひか風流の才子も野暮も  
この道は案内知れぬ難所といふべし薄雲もしばらく言葉とぎれてありけるが心付て 薄ヲヤぬしは寐なますのかへく  
すぐりイすヨ 鳥ナニ寐るものかおめへこそ色男のことを考へてふさぐぢやアねへか 薄ヲヤ／＼嘘をお吐なましぬ  
しこそうとく／＼目をおねむりなんすものを 鳥ドレ／＼夫ならば烟草でも吞で氣をつけよフヤ火が消へたおまへの  
長ひ喜世留て行燈の火を付けてくんな 薄アレサ油火は毒ぎますお倉どんの部屋から 手のことなるべし 貰つて来て上申イ  
せうと立にかゝるを鳥雅は引とめ 鳥ヲイ／＼それをかこつけに何所へか行ふと思つて 薄アレサアあんな邪推なこ  
とを往とおつしやりイしても私やアすこしも行れいせん 鳥それでも客人が来て居るぢやアねへか腹を立ちやアわ  
りい 薄おありがたふぎます外聞にもあると申したいが久しく病氣で引て居りイしたのでろくになじみのお方もあり  
いせんのか今夜はかへつてお嬉しふぎます斯申ではさも 働のなひように思ひなませうが心にない世事を言て 合鏡  
をすることは今までは出来いせんものを 鳥今夜ツから世事をはじめたのかへ 薄アレサどふしいせう私がいふことを  
一々上あしとやらをとんなます 鳥上足も下足もとられるものか足なんぞはこはがつておみらの方へ寄もしねへ癖  
に 薄それでもぬしが否がつて遠くへおよんたますものヲ 鳥そりやアいゝが多葉粉の火はどうせう 薄それ見なま  
しナ兒女を起してとりにやりイせう 鳥そのついでにあつちの客人の所へ左様いつてやんな今に寐かしてしまつてゆ  
るりと樂しみイすから待て居ておくんなましと 薄アレ後生だから其様なことはいつておくんなますなモウ／＼此後  
ぬしが來さしつた節にたま／＼客人がありイしてもぬしの側をはなれへすことではおつせんそれとも居りイして邪魔  
になるなら何所ぞへ參りいせう 鳥ナニ邪魔といふわけはねへが何ぼ獨て寐るのが否だといつて心なく引とめるは氣



の毒だからヨ夫ならばモウ／＼何所へもやらねへモシ行ふとすると斯するぜ 薄アアレサマア〇をお解なましアレサ  
 私かと いひながら筑前本博多の〇 鳥アレそれぢやアなほしまるわな 薄ヲホ、マア少しぬしの骸を軽くしなましな  
 鳥サア 薄それ見なまし直にほどけいしたト〇を解て蒲團の下へ落してぶる／＼と身をふるはして〇〇〇 薄三年  
 の思ひで 鳥何が 薄なんでもよふぞますト莞爾とさも嬉しそふに笑ふ  
 そも青樓の夜を更てはるかに聞ゆる餅つき唄は土手の北より箕輪の方へ唄ひゆきかねどりの音はしん／＼たる座  
 しきの内にかすかなりさて薄雲鳥雅の深情はいかに好漢はよく知り給ふことなるべしとその情を濃にしるさずよ  
 ろしく察してよみたまへ

花風月 春 告 鳥 卷之一了

花風月 春 告 鳥 卷之二

江戸 爲 永 春 水 著

第三章

借も鳥雅ははからずも愛をはらさんその爲に何心なく登りたるその青樓の薄雲はかねてゆかりの美女にて殊にその  
 身を戀ひこがれてありけるよしも誠なるにや心を盡すもてなしに深くもこれを思ひこみて雨の夜雪のいとひなく元來  
 樂なる若隱居迎鳥の別莊より渡りに舟も自由にて竹屋を呼す向ふ越今宵は晝より俳諧のもよふし客にて文章を會頭と  
 たのみ閑月庵を催主にて終日夜に入までかゝりしかば客の歸りし後に跡かたづけさせる頃にはや亥刻の鐘かう／＼と  
 ひゞき秋の夜寒の身にしみ／＼と世間もいと淋しければ侍女お民といふに言つけて床をとらせ夜學燈を枕元におき  
 歌書と繪入の讀本をならべ獨り寐る夜の伽となし侍女お民と下男を部屋に休ませ寐ながら本をよみて居たりしが兎に  
 角寐兼て床を起出獨言 鳥ア、引寐られねへ／＼わりい癖がついたがどふも詮立がねへ今時分はどふして居るか  
 へましいこゝで案じてもつまらねへドレ淋しいが出かけよふと簾筒の引出しの着物を出して着かへ次へ立出 鳥ヲイ  
 ヲイ／＼お民やおらア今から出かけるから跡をよくメリをして寐やヨ 此しもと民、ハイ何所へ被爲入かモウ夜が更ま  
 したから途中がおあぶなふござりませう久助を起しましてお供を申付ませうか 鳥ナニ／＼起さずといふ折角寐入た  
 らうのにかはひそくに。我子なら供には通じ夜の雪 立田んとするを見て たみこゝから堤までも田圃がござりますから不  
 用心でござりませう私でもお舟へ召す所までお送り申ませう 鳥何のつまらねへ手めへのよふな柔和をつれて往たツ



て化用の用心にも盗人の防にもなりやアしねへそして土手から手めへを一人歸されるものかそれよりやア近所の好漢でも呼で留守にたのしむがいと笑ひながらいへばお民は顔をあからめ たみヲホ、若旦那さまのとんだ事を被爲仰ますついぞお留守に近所の若衆が参つたことはございませんとはほもかしらにいふそもお民といふは地面の家守の姪にて両親にはやくはなれ難儀をせし娘なるを鳥雅の母親そのはなしを聞て不便におもひ側に呼で仕ひしが鳥雅の兄の女房このお民を憎みしゆ多面倒なりとて此ほど鳥雅の方の下女病氣にて宿へ下りしとあるを物怪の倅として二十日ほど以前より此別荘へつかはしおきたるなりされば侍女とはいふものゝさすがつねの奉公人のごとくにてはあらず殊に貌容美 艶歳もやう／＼十六歳にて自然と人品すぐれ髪化粧衣類までつくろふことはなけれども色白くあざやかにてありしゆ多他に妬まれて此別荘へ本家から送りしとぞ實に月を見るも花を詠るも心ありて看ると心なく詠るときには其情大ひに違ふとか今鳥雅はお民が主思ひにやさしくいふをきよて憎からず覺へはじめてその姿を見るにはあらざれど心あつてこれを見るに衣類こそ魚服なれ化粧もせぬ素顔にておのづからうつくしければはからず春心を催し情々と立とどまれどもお民は何の氣も付ず たみどふ遊ばしますだん／＼夜がふけますヨ 鳥ドレ出かけよふト雨戸を押あくれば秋の木の葉とももに俄に降くる露しぐれの風にばら／＼吹かれば雪踏を直すお民は仰向庭へ手を出し たみヲヤ／＼雨が降つてさんじました 鳥ナニ／＼風で木の葉がちるのだらう雲がかぶさつてはあるがまだ降はしまひ たみイ、エ此様に私の手が濡ましたものヲ 雨戸をばら／＼うつつほどなれば 鳥ヲ、／＼こりやアいけねへ今夜は往めへよそう／＼其所をめてしまひな たみハイト雨戸をしめ たみせつかくいらつしやらふと思召たのにいけませんねへあちらでもさぞお待なさつてお出なさいませうのにと笑ひながらいふ 鳥あちらで待とは誰がことだ たみハイ薄雲さんのこととござります 鳥どふして知つて居る誰ぞに聞たか たみイ、エヲホ、これからまだ夜がながふござりますからおさみしくつておしづまることは出来ませぬお煎花でも捲りへて上ませうか 鳥エ左様ヨ

しかし手めへ眠からうそしてマア薄着やアねへかこれをその上へ掛かけやト今まで寐まきに着て居たりしはな勝見の大形の縮めん半袴のかゝりし小袖をお民のうしろから掛てやるお民はびつくりしてこれを脱ぎわきへおいてたみどふいたしましてまア勿體なふござりますといひつゝ立て次の間へ行を呼かえし 鳥コレサ／＼遠慮せずとそれをまア着るがいゝそしてそれは直に手めへにやるからいゝはな 手をついて たみハイありがたうぞんじますがどふも勿體なふござります 鳥ナニ／＼かまふことはねへ直に着やヨそして其所の爐で火をこしらへて釜をかけな たみハイお茶を遊ばしますか 鳥インニヤ茶はたてねへが勝手手へゆくと久助が目を覺して氣の毒だおれも淋しいから何もかも側でこしらへるがいゝ先刻釜へいゝ水を入れておみたして丸机の上に豊島町の茶を置たからあれを入な たみハイ清風軒のござりますか 鳥よく知つてゐるの たみハイアノ豊島町の伊勢屋吉兵衛と申すのは此頃は火をふによく賣れますと申て評判がよふござります べてちやをこしらへにかゝる 鳥コレサその衣服を着ねへか寒ひといふのにイヤそれよりかいゝものがある是にするがいゝ久しくわすれて居た衣服があるといつた所が行丈が間に合へばいゝがトいひながら鏡をおろせし簞笥の引出しより取いだすは唄女お濱に着せると吳服屋へあつらへ置しがその出来ざる中にお濱の行衛は知れず捨て置けれども吳服屋の迷惑を察しいづれたつね出して着せる時節もあらんかと仕舞置しを思ひだしてその衣服をとりいだすその好みに任せてこしらへ置たる衣裳の染色はいかにといふに千筋の山まゆ縮緬の御納戸裾まはしは引返し極上紅の胴裏紋はすが縫ひの重桔梗なり裾へ銀糸にてま事に細かに入藤をちらしに付下着は京縮緬へ藤色にて吹寄の形を染たる無垢二ツ緋の紋ちりめんの對丈襦袢白天鷲絨へ銀糸にて三津五郎縞を縫せし半袴をかけ白の紋練へ大極上々の本紅をうらに付たる蹴出し媚茶の紋ごはくへ黒糸と紫の糸にて三津五郎縞を縫せし半せに縫はせし九寸巾の帯もつとも鯨合せ片めんは松葉色の勝山へ金糸にて八ツ藤を五分ほどの大きさに縫はせもつとも六七寸間に飛々に付たりさてこの揃ひし品を取出し 鳥コウ／＼お民これを見て見なト行燈のまへにならべおけば



お民は肝を潰して鳥雅の顔をながめていたりしが、たま「あなたはマア今夜はどふか遊ばしましたか、鳥ナゼ、  
 たま「それでもあんまり私をおなぶりあそばすからサ、鳥ナニ、  
 着せたらばなほうつくしい姿になるだろふと思つてだサア、  
 て其よふな大そふなものが私に似合ひますものか第一、  
 ねへか、たま「どぞ御免あそばしませ、鳥ナゼ、  
 笑ひながら立かゝればお民ははずかしく身を縮めて逃にかゝるを引とめ、  
 と着かへて見せやト責立てられ詮方なく、  
 てやらふ、たま「アレ御免あそばせ、  
 見せな、たま「ハイ寔にこはひ様でふるへますヨト娘心の正直に着馴ぬ美服を着ることを嬉しきこはさに身をふるは  
 すといふに等しき言の葉は外聞作よりゆかしけれお民が衣服を着かへる中に鳥雅は蠟燭をい出して燭臺へてらし  
 鳥サア、  
 笑顔のかはひらしき雪よりしろき袴元より照らされてなほうつくしき素顔にほんのり目のふちの櫻色とる上氣の風情  
 今着せかえし衣裳には久しくこめたる匂ひ袋のしみて色濃きその薫り昨日今日には見ちがへたりこれ深窓の娘なるを  
 衣裳のこのみに洒落たる姿となしたるがごとし、  
 方へ向はせける

第四章

馬士にも衣裳の、馬士にこれに美人に飾を着せて見てまだ足らぬのは髪のかざり紅白粉の飾はぬがおしき様でも

つれづれに形が大きく見へるおつなも、  
 ことはございませぬものをマア窮屈そうにしてゐたりしが、  
 仕舞ひませうしはになりそふで心配でなりませんと立をとめて、  
 らア、たま「エイこれはマアどなたのでございますエ、  
 ヨ、たま「左様でございますかそれではなほわるくいたすと濟ませんはやく着かへましてお茶をこしらへませうヲお  
 湯が煮立しました、  
 其お方がお腹をお立なさるとわるふございませすからト立上る手をとつて引寄せ、  
 外にその着もので腹を立ものはねへ此かはいらしい貌で腹を立たらさぞわからふサア腹を立て見せやト笑くぼの所  
 を指にてちよいと突お民は嬉しき様なれども思ひがけなき俄の會釋分に過たる衣類まで着せかへられし此場の仕儀い  
 かなる心ですることかたとへ當座のなぐさみなりとも仕立下しの小袖さへ直にもくれんとする様子よしや衣類はもら  
 はずとも賤しき此身が若旦那にも見染もするならば下女にかはらぬ此身の本望ことにまれなる好男子願ふてもなき  
 幸ひと嬉しがらせて笑ふのか何となさんと胸のやみ年もゆかねば思案も出ず只ぶる、  
 りける、  
 大がらにておしたてよく何處やらお濱に似たる風俗なれが鳥雅はます、  
 茶をほうじていれ湯呑に汲て茶臺にのせ鳥雅の前にさし出す煮花も花の山吹や實のなき戯言か知らねども一校折て貰  
 ひたき心の願ひ七重八重笑みをふくみてさしだせば、  
 手めへも呑な、



たみ「ハイ有がたふぞんじますが此様に澤山はたべられませんか 鳥「ナニそればかり何ぼ手めへがじんせうでもそれがたべられねへことがあるものか取分てやらすといふけれど遠慮して喰ねへだろふと思ふからわけてやつたのだたべるがいふそれが否なら外の菓をやらふ たみ「イ、エモウどふいたしてこれでよろしふござります 鳥「コレサ其様に堅くして居ずといふはなをして今夜チツト手めへに聞てへことがあがるが隠さずと正直にいつて聞せや たみ「エなんてござりますかどふしてあなたにお隠し申すなんぞといふことは少しもござりません 鳥「ナニ／＼左様でもあるめへ大かた深く言合した情人があるだらう何所のだれだかそれをいつて聞せな たみ「ヲヤ／＼何だかとぞんじましたら若旦那がマアとんだことをおつしやいますぞふいたして私にそんなことがござりますものか寔に仕合がわるふござりまして幼年節から苦勞ばかりいたして居りましたのに今年やう／＼十六歳になりますものヲ 鳥「ナニ十五だといつて十六だといつて油斷がなるものがそして人並より容儀がいふからだれでも只おくものかそれに手めへがやさしくつて才發とて居るものをいひながらだん／＼ たみ「ほんとうに今までも少しも其様ないやらしいことはぞんじません 鳥「それでも手めへを母人さんが此方へおよこしなさるとき左様いつておよこしなさつたものヲ たみ「啞をお吐遊ばしませ御本家て何とおつしやいました 鳥「エなんといつておれが見せへ往たとき母人さんがおつしやるにはどふもお民を此方へ置と色をしたがつてならなひのに寄ものもさるものも惚たがつてならねへから察へてもやつて置ふ左様したら人出入がなひから情人も出来まいと左様いつておよこしなさつたものを たみ「ヲホ、／＼あんな啞をおつしやいますどういたして私の様な賤しいものに誰がかまひてござりますものか 鳥「ナニねへことがあるものかマア直におゐらがる惚たからこれが證據だサア今まで深くいひかはした情人の名をいつたら堪忍してやらふがいはねへと無理におれが戀人にするがどふだ たみ「ほんとうに其様なものは夢にも存じません 鳥「いよ／＼なけりやアおれと色になるかそりやア否だろふまたなつては言かはした人に瀧めへ たみ「アレマアやつぱり左様思召ますか貴君に左様思召はれますくらゐ

ねへそして殺されても情人のことはいはねへといふのに聞たがるも野暮なはなしだモウ／＼其様なことはいはねへから堪忍しや たみ「アレどふいたしたらよふござりませう左様申たのはござりませぬ貴君のお疑ひがはれませんからば死でもよいと申たのでござります 鳥「そんなら實に情人もなくつて疑ひもしねへければおゐらの情人になるか たみ「イ、エ 鳥「それ見たがいゝ出たためのいひわけばかりいつてゐらア たみ「ナニ左様ではござりませぬが貴君のはじやうだんてござりますまた實正ならば私しやア煩ひか何かいたします 鳥「ナニ左様ではござりませぬが貴君のは聞きますまいといふ願がけてもしたのか たみ「アレ左様ではござりませぬ貴君のお身をお案じ申て煩ふと申事でございます 鳥「エ、よくいろ／＼に涎口上ばかりいふぜい、かげんに氣をもませるなといへばお民は鳥雅の言葉なか／＼座興といふにはあらず信實その身に惚たる様子と思へばうれしくはづかしくそれより後は身を恥てろく／＼に返事も出来ずたどハイ／＼も口の内顔に紅楓のちりそめて耳には照を紅葉のまはれ見たまき葛かつら惚た男の眼で見れば何から何まで言分なく恍惚子娘のとりまはし廊の花も和哥町の月も見かへる心なく只此乙女にまどひ入る秋の夕アの木下闇菊月中の八日にて鳥雅は雨戸をおしあけて手水鉢にて手を洗へばいつしかはれて小夜の月物おもへとや戀衣の露置そゆる庭の面はるかに垣根を見越たればまだ秋ながらさむ風に森の下行狐火のさも哀れにもの淋しければ 鳥「お民や たみ「ハイト縁側へ来るを鳥雅は側へ立せて田圃の方へ指をさしてしづかなる聲 鳥「アレあれを見なトこはそふにいふ たみ「ヲヤ何てござりますエ 鳥「狐火がいくつもとんでいくはな たみ「ア、こはひひよつとこちらへ来るとわるふござりいますからモウはやくおしめなさいませんか 鳥「左様ヨこちらで見ると直にこゝへ化しに来るからしづかにしねへ たみ「アレ氣味のわるひことをはやく／＼ませうト雨戸へ手をかけるその脊中から手をまはして 鳥「コレサおれが／＼るはなト手に力を入れる たみ「ヲ、せつなひ 鳥「ソレ狐が来た たみ「アレ引ト泣聲になつてふりはらひ奥の方へ逃



こゝ鳥雅は笑ひながら戸をへて座しきに来りしが何か用ありそふに 鳥そりやアいゝが大變なことが出来た たみ「な  
 んてございますか 鳥「工急にはらがへつて来たが何もおかづがあるめへの たみ「左様でございます宵のお客の節のお  
 肴がございますがあれではわるふございませう 鳥「左様ヨ魚類は氣がねへ何ぞ淡薄としたものはあるめへかのうモウ  
 夜中だからむさしやも平岩もはじまらねへス たみ「先刻久助どんが寒竹の子をあなたへあげると申てとつて参り  
 ましたがやはらかそふでございますからあれを煮て上ませうか 鳥「ム、それは奇妙だ世話でもそれを煮てくん何よ  
 りかいゝものだ何様な料理通でもこゝに住ものてなければ今時分寒竹の子を喰うことは知るめへ寔におれが好物  
 だ たみ「左様ならば竹の子をやく煮てあげませう 鳥「竹の子もいゝか此嬢もいゝ たみ「ア、レくすぐつたふござい  
 ます 鳥「はやく茶漬を給させねへか たみ「ハイ、ト笑ひながらいそゝして手ばしこく膳をこしらへ竹の子を煮て  
 鳥雅に茶漬を喰せる其中も衣類をよごすまじとの心づかひ見て居る鳥雅はひとしほかはゆく思ふなるべし

花風月 春

告

鳥 卷之二一

花風月 春

告

鳥 卷之二二

江戸 爲 永 春 水 著

第五章

嬉しさを憂瀬にかえん今宵よりあふくま川を渡りそめつゝとは寒葉齋の秀逸にて川によるの戀歌なり實にもうき世  
 を嬉しさにわする、今朝の朝日影お民は雨戸の方をみやりてしづかに枕をはづし起にかゝる 鳥「何だ起るのかまた早  
 ひからまアモウちつと寐て居るがいゝ たみ「ハイ大そふにおそくなりました久助一人て御臺所をしては私「がわるふ  
 ござるますからト床を出るを押へて 鳥「コレサマア寐て居やよしづかでもいゝからして久助は先刻神奈川まで使に  
 やつたから明日でなければ歸らねへ たみ「ヲヤ左様でございますか少しもぞんじませんが暗中にてござるますか  
 へ 鳥「左様ヨ曉方に起してやつた たみ「さうでござるますかそれでは今日は貴君が他所へお出遊ばすと 私「一人にな  
 ります子 鳥「うれしからふ たみ「淋しくツて悲しふござるます 鳥「何一人手めへを置ものか其くれへならば久助を遠  
 くへ使にやりはしわへ 鳥「それでもマア起ましてお朝御膳を上ましてそれからまた 鳥「お飯を給べ  
 てそれからまたとは何のことだ 鳥「それとがめ たみ「ハイそれからマアお座敷や何かをかたづけませうといひ直して何と  
 やらうつりのわるき言の葉に間がわるければはづかしく たみ「マアおたばこの火をこしらへませうト床を抜出る其姿  
 寐しまに無理に着せられた緋の紋縮緬の對丈じゆばんそれを寐巻に着たる形にて枕元へ出しうつくしさ戰慄するほど  
 かはゆらしければ 鳥「はやく着類を着ねへか寒くなるせをして今何かをするうちは夕アのおれが寐まきをその上に着



るがいゝそれを脱と風をひくぜサアこゝにあらアト寐所の脇にありしをとつてやる たみ「ハイトとつて次へ立出寐ま  
 きと襦袢を脱て其身の他所行の衣類を出して着かへるこの衣類は鳥雅の母が情ふかくお民にこしらへて與へしなり上  
 着は御納戸中形の太織下着は藤鼠の氷梅の中がた縮めんを回りへ付し繼々の胴ぬき紫中形の裏へ板へちりめんの付  
 たる半衿をかけし襦袢袖口は淺黄の山まゆちりめんなり帯は黒縹子へ緋鹿子の割を入れて實に人品よき娘風かはゆらし  
 きこしらへ昨夜着せたる唄女すがたとはまた品かはりておさなめくも憎からず たみ「ヲヤ嬉しい久助どんが何も角も  
 してからお使ひに往たそふだ トひとりごとをいひながら火はちのすがれか、折から世間は巳の刻ごろのけしきと見へてはや隣家  
 には淨留理をさらふ娘のこゑ  
 へ夕ざれば汐風こして陸奥の野さへ山さへ色づきて戀に時雨の名所もたま玉川のおふせさへしのぶもじずり  
 たれゆるにみだれごころの「狂ふらん」しどけなりよしふりもよくふりかたげたる笹の葉の一夜のちぎりゆ  
 かしやとおよばぬねがひ求つかかの水鳥のかけことばそれもとどかてくちはてしその錦木のかずならでこれ  
 ぞ千鳥のものぐるひ

たみ「ヲヤ、つみぞさらはなひ淨るりをさらふのふあれはたしか六玉川の内の千鳥の玉川とかいふのだが何所でも  
 稽古にするのを聞かひのにとふして語るかしらん  
 上るり「ア、戀せまひ迷ふまひ

たみ「どふしてまよはずに居られ様若旦那のお言ひが始終かはらずはどんなにマア嬉しからふとはいふものゝ下女は  
 したの身ぶんどうぜんな身でとてもおよばなひことだろふか此間も噂に聞た婦多川のお濱さんとやらもあるしまた此  
 節先でも血みちをあげて居る玉屋のおあらんのこと聞たし歳のいかなひ私じやアおもしろくなひから今に直に捨ら  
 れるだろふかしらんト、よろにあまる職言いつの間にかは床を出て後には何れ鳥雅お民の背後より抱すくめて 鳥此

様にかはいひから見給はしねへが獻、わかれる様なことがあつたらどふする たみ「ア、悔りいたしましたト言ながら  
 莞爾として振向顔ちよふと鳥雅の貌と押合すそも「お民が肌目細なる事白羽二重のごとくすべし生質なるに  
 今うがひ手水をつかひ仙女香をすりこみしゆる龍腦の匂ひ梅花のかほるがごとし殊に口元かはゆらしく只二三枚笑ふ  
 節に見ゆる白歯さへ丁子車のはみがきにてみがき上げ唇は紅の色より赤く近まさりしてうるはしくさて鳥雅は爪立  
 ながらの戯れゆるお民を抱へし儘仰向に倒れかゝればお民はいと細き手にて胸を押へし鳥雅の手をおさへながら同じ  
 く仰向に倒れかゝり たみ「アレどふいたそふあふなふございますヨ何所ぞおいためなされはなさいませんか 鳥アイ  
 タ、、 たみ「ヲヤどふかなさいましたかト周章で脇へ下りにかゝるを鳥雅は押すこしもはなさず 鳥「ア、いたい  
 いたい寔にひどい子だのヲ、引いてへ〜 たみ「ヲホ、、それでもあなたが開放しなさらなひから動かれません  
 ものヲト横に起かえるはづみに〇〇をあらはにしてはづかしがるを鳥雅はなほもはなさず狂ふ折しも臺所へ案内す  
 る人音「へい御免なさいましへイチトお頼み申す たみ「ハイ、引 鳥「ヲヤだれか來のか たみ「ハイたしかお臺所  
 てございますト、いながら欠出して行なにか勝手にてあいさつをなしそれより奥へ來り たみ「お客がございます  
 鳥「だれだ たみ「アノウ櫻川由次郎でございますすちよいと御機嫌うかゞひに上りましたトおつしやいます 鳥「ヲヤそふ  
 か たみ「何と申ませう 鳥「早くこちらへ通しなかつたかと戀しひが今日はすこしありがた迷惑だし外のもの違  
 つて延刻もこじつけちやア居ねへ殊に歳のいかねへ様ではねへ目先がよく見へるから手めへの居るのを見ると直に歸  
 るからいゝ たみ「ヲヤ私が、いひかけしが たみ「私が居るとなせ直にお歸んなさいませねへ 鳥「マア其様なことをいつて  
 居ねへてはやく此方へお出なせへと左様いはねへか たみ「ハイ、ト立て行程なく來る櫻川由次郎和歌町第一の流行  
 ツ子お客は更なり唄女衆までひいきの強き色男されどいやみはさらになくあどけなひのが株となりかはひがるゝ愛  
 相もの 虫「へい此間は大きに御不沙汰申ました 鳥「ハイ此間は遠くしかつたのう 虫「へい私よりかおまへさん



が此間は寔にお見かぎりでございますもつとも例のがお氣になるからでもございませうがあんまりあちらへお見へなさらねへから和十と私と此間中からお尋ね申にあがるつもりでございましたけれども通和十はおやしき方の旦那で出てばかり居ますからトいふ所へお民は茶臺に茶を持来り 鳥「ハイお茶をめし上りまし」トいふ 申「ハイはいこれは憚りてト頂て取る 鳥「若旦那御膳はどふいたしませう 鳥「エ左様サノ由さんもまだだらふ何ぞ左様いつてやらふ 申「ヲヤ最お晝でございますか子 鳥「ナニつまらねへ朝めしサ 鳥「ヲホ、もふお晝かも知れませんヨ 鳥「大變に寐たよのう 申「此間は男衆も女中もなしてございませうかへ 鳥「左様サ此節誰もおかねへこの娘とおるらばかりだ 申「エ、イトおかしな顔をして手を組エヘント咳ばらひをして溜息をつきア、引ひよんな場所へ出て手づよく仰を承るものだトいふ時お民は次の間へ立て行由次郎は跡を見おくり 申「旦那もし和歌町をお見かぎりもむりはござへませんが新孝に昨日うけたまはつたら角のも大そふに氣をもむそふでございませうがどふもモンおめへさんもうるせへねへチツト補ひでもお上なせへまし實正に御病氣でも出るといけませんぜ 鳥「アハ、おめへぢやアあるめへし親父は少しその方が好物だツけおめへは女の方でゆるさねへから用心しねへトいふ折から蓮花寺の鐘午刻をつげ商人の聲「豆腐イ司。かくて由次郎はしばらく世事ばなしをして歸りけり

第六章

鳥「私しやアはじめて見ましたが人品のよひお方でございます手あれでも可笑ことがござりまするか子エ 鳥「モウ由次郎に惚たのかしかし太夫の中ぢやア一ばん憎氣のねへ男サ 鳥「どふいたして私なんぞが惚ましたと申てむだてございませぬ婦多川には誠に好風な女ばかり居ると申事ではござりませぬか 鳥「左様サそれだけでも其土地に居てみるとまた種々の穴が知れて他から往て現て来る様なわけでもねへのサ只なりのこしらへや貌のつくりが他より清麗としていふといふ分のことばは誰かから集つて居るのだから別に驚もしなひのサ 鳥「それでも貴君ア時本願中にお濱の様な女はなひとおつしやつたと御本店の乳母どんが左様申ました 鳥「左様ヨ手めへがなければ左様だけれどモウ「お民といふ娘が出来ちやア他は錦繪の女を見も否だア 鳥「うそお仕あそばしませお濱さんとやらのかはりは薄雲さんとかど誠に貴君を戀慕つてお出たと申てはございませぬか 鳥「モウ「何といつて逃てもはなしは仕わへから左様思ふがい、おれがよふな者に惚られたのが手めへの因果だといひながら右の方の袖をもちあげて 鳥「コウ脊中をかゝてくんなコレサ袖から手を入れてヨ 鳥「ハイト左りの手を鳥雅の脊中へまはしてならぶ姿看ものあらは羨しかるべし此時庭の垣根越に誰か知らねと川柳點を口ずさむものあり

其所かゝるとはいやらしい夫婦中

トいふを聞より鳥雅とお民かゝる姿を覗て看人ありと思へばびつくりしてちよいと飛退二人の中へ關にすへたる宮火鉢他目つくるふ戀の宿にはよくある方の所爲なるべしまたも外にて以前の聲。ほれさせるうしほかけんの料理人ソ。八百屋「はい今日はよろしふふきのとふに袖白魚干でございませぬその外は蓮に大根鹽煎餅に大把附木 鳥「なんの事だ八百屋だそふだ 鳥「ヲホ、あ、あの八百屋はいつでも本を見ながらあるきますヨ 鳥「ハ、アそれでわかつた川柳點にこりかたまつてゐると見へる 八百屋「はい御新造さん何ぞお買なさつて下さいまし 鳥「コレ御新造さん返事をしねへかトお民の頬の所をちよいと突て笑ふ 鳥「私の事ぢやアございませんと口にはいへど嬉しい顔色莞爾として縁側の障子を明け 鳥「八百屋さん玉子はないかい 八百屋「ほんにお約束申ましたツけねへ今日はしかも大飛のいゝ玉子でございます 鳥「左様かへそれぢやア其中でいゝのを撰て二百文だけおくれ 八百屋「はい「それはありがたふぞんじます トいひながらかきねをまはりて勝手 鳥「ヲヤ「また雨が降ってさんじました 鳥「左様かそれはありがてへ 鳥「なぜでございますか快晴のはうがよいではございませぬか 鳥「常住は日和がいゝが今日は雪でも降ればいゝとおもつてゐる



たみなせてございますエ 鳥 他人の来るのがうるせへからヨトいいひつゝ立て勝手にいたれば木戸より欠込百姓四五人  
 百「イヤアちようどいゝ旦那がお宅だトいはれてうんざりせしが顔に見せず 鳥「イヤア〜どなたもお揃ひで傘の御  
 用かねマアチツトお休ませへドレ傘をばお出しませうトおくへ往にかゝれば ●「イエ〜傘は猶が近ひから入ませんが  
 今日少し御相談申したいことがあつて参りましたトいはれて鳥雅はいよ〜迷わく 鳥 左様でございますかそれ  
 折角たま〜のお出だが今日はあいにく客がございませうから何の御用か明日ではわるふございませうか ●「へいへ  
 イナニ左様ならばまた上りませうト出にかゝれば 鳥 モシ傘をお持ちなさい ●「へい左様ならばどふぞわるいのを  
 おかしなすつて下さいませと一言葉にあまへて申ませうアハ、〜トおかしくもないに笑ひ居る鳥雅は自身に傘を  
 二三本持出し 鳥 どれも番傘だからよくはござりません ●「イエ〜どふいたしましてこれはモウ澤山にどふぞ  
 左様なら少しの中トいいひつゝ傘をおしひらきて路のぬからぬ其中にとやそこ〜にして立出る折からまたも人音して  
 木戸口より入来る變仁先生迎鳥にて人の知る長座異變の半狂人 變「へい今日は雨天でお淋しからふとぞんじてお咄に  
 参りましたトいはれて鳥雅は泣出しそふになりしが詮方なしに 鳥「イヤこれはマア一ぶくおあがんさいませつか  
 くお出くださつたが今日は此降ますのに只今から増見さまのお弟子の方に歌の會がございまして下谷邊まで出かけま  
 すから 變「イヤそれは幸ひなことでございます御同道申してお近付になつてお歌をチツトお貰ひ申ませうトいふを聞よ  
 りお民は中の間から たみ 貴君ア直にはお出なされませまい東連の御見物のことで御相談がいたしたふございませすか  
 ら是非今日御立寄をお願ひ申ますと先刻お使ひが参つております 鳥「イヤ左様かそれぢやア廻つて往さアなるめへト  
 變仁に向て 鳥「お聞なざる通りでございますから今日はどふも 變「ハア左様かナそれではまた此間にトふせう〜に  
 歸りゆく鳥雅はホツト溜息を吐き 鳥「ア、引おそろしい日だ種々な邪魔ツ怪子が來やアがるおそろしいことだはやく木  
 戸を閉めて置うまた何ぞ來るといけねへト欠出して木戸をしめ 鳥 大そふに大降になつて來たこれぢやア最難も來やア

しめへノウお民 たみ「ハイ左様でございます 鳥 左様でございますすぢやアねへいろ〜なものが來ておれが氣をもむ  
 のに平氣で奥へ引籠て居る事もねへ たみ「イヤそれでもおまへさんがお臺所へお出なさると人が参つたのだから詮方  
 がございませんものヲトすこしづゝ打解てあまへたるもの言が難ると知るべし 鳥「サア〜是から何ぞ美味ものでも  
 こしらへて給やうそりやアいゝが能茶のとつたのがあるかノ たみ「ハイ昨日豊島町の伊勢吉から清風を一斤持してよ  
 こしました 鳥「ウム左様かそれぢやアまづ茶はよしといふものだ外ものは揃つて居るか知らん たみ「お醬油も昨日  
 口を付ましたのに御酒もみりんも取たてでございます 鳥「それではまづ買物に人を頼まずともいゝの夫婦かけむかひ  
 はいゝけれども何ぞこしらへて喰ふと思ふと世話だよのウおかみさんト笑ひながらいへばお民は嬉しさ限りなけ  
 れど賤しき身ぞとかえり見るその身に恥て裏なくはかたらひかねし娘氣に顔赤らめて返事さへ來出ぬはいとどかはゆ  
 けれ 鳥「ライコウ内室さんといはれちやア否かエ、 たみ「それでも勿體なくツて何とも申されせんものヲ 鳥 其様  
 に高くとまらねへでもいゝぢやアねへかおゐらの様なわりの男の内儀さんといはれちやアわりいかおれも自惚ておめ  
 へのばちがあたると勿體ねへから左様いふめへトわざとす たみ「アレ左様ではございません私にあなたのばちがあた  
 るだらふと申たのでございませうト立て縁側の方へゆきしが手を拭ながら來て たみ「お湯が湧ましたからお這入なさい  
 ませんか 鳥「イヤ〜何時の間に焚たのだ たみ「ナニ水は昨日久助が汲込で置ましたを最少し先刻お火鉢の火があん  
 まり澤山おこりましたから鐵砲へ入て自然に湧ましたヨ 鳥 左様かそりやア奇妙だよく氣が付たそれならば一風呂這  
 入 たみ「其中お茶も出來ます 鳥 玉子は焼よりかいり付ながら喰方がいゝヨ たみ「ハイ左様いたしませうト浴衣を出  
 しゆどのへ持て行それより鳥雅は居風呂へ這入て後お民と俱膳にて食事をなし其中の上きこと筆にはしるしがたし看  
 官よろしく察してよみ給へ 鳥「お民や此浴衣をば手めへのにするから湯から上つたらばそれで化粧をするがいゝせお  
 ゐらは絞りの浴衣を着るからト湯どのへまで來て世話をやく たみ「ハイありがたうぞんじます 鳥 また遠慮しねえで



直に着るがい、ぜ、たま、ハイ着ますヨ、鳥、脊中をながして遣ふか、たま、それこそばちがあたりますヨ、はやくそちらへいらしつてくださいましたトはづかしがる雪の肌へを湯の氣にて櫻色なすうるはしさ衆の仙人ならねども鳥雅は氣をもうしなふばかりやうく座しきの方へ行おたみはやがて風呂より上りさも手ばしこく化粧し浴衣のまゝにて部屋の方へゆかんとするを見送る鳥雅そもくお民が風情をいほ花も柳もたとへるにたらぬ美麗の素顔なるを湯よりあがりて以前より少し濃せし白粉も彼仙女香の別製にて匂ひゆかしき蘭じやのかほり粉白粉も一際濃あごまで別に顔よりは厚きが流行か口紅も野暮に付たる笹色はまた格別に目にも立白地の浴衣もばちくと京花色染の梶の葉にて肌えの雲と白き浴衣の間にちらつく緋縮緬の湯もじを蹴出すうつくしさ花美が似合し娘風着かへさせるもおしきほどなり

近年女中の化粧はなはだ龜末になりて白粉を付るをそしり笑ふやから多しそれ化粧は其身をつくるふのみにはあらず親夫をことほぐための業にして女中たしなみの第一なり殊に貌かたちの作りにて一際容美もうつくしく見ゆるぞかし壯年の肌うるはしきを自慢して素顔などにて居るはかならず不吉のことなりたとへ化粧を濃して笑ふ人ありともそれに遠慮することなかれその人々は下司を好みて誠の娘にあらずと知るべし

鳥、アイタ、く、く、く、たま、オヤどふかなさいましたかト浴衣のなりで欠寄る、鳥、ア、いてへく急に腹がいたくなつて来たそして何だかぞくく寒氣がしてならねへその蒲團をかしたアイヤく其所へゆかふトよろしくしながら三疊の小ざしきへはいる此所には昨夜の床がまだ畳まずにあり鳥雅は床に上の倒るればお民は案じて苦勞さうに夜着をかけながら、たま、おこまりなかつたものでございませうネエお醫者さまを呼びませうかホンニお丸薬がございしましたツケト立にかゝれば鳥雅は引とめて莞爾笑ふ、たま、ヲヤお腹のいたいのがおかしふございませうかへ、鳥、左様ヨそして手めへ寒からふ、たま、アアレマアヲホ、く、く、鳥、かはいらしい肌肉だのうめがはらくとかがる、たま、オヤ鳥影がさしましたヨ、鳥、エ、左様かまた客でも來ねへけりやア、く、く、のうトいふ折節またもや近所にまきこゆる淨るり

「實樂天」がからうたにつらねし秋の名にしおふ三五夜中新月の「中」に餅つく玉うさぎもちやござらぬ翌月の月のかげかつ「飛園子」やれもさうややれやれさてなへうすと杵とは女夫でござる「やれもさく」夜がな夜一夜おやれ「と」んが上から月夜にそこだぞ、下略

たま「ヲホ、く、赤子をかへ、鳥、手めへに似たらさぞかはいひのが出来るだらう

上るり「やれこりやよいこの園子ができたぞ」おやれ「やれ」やれさて「あれはさて」これはさて「どつこひさてな

「よいとくくく」よいとな「これはさておき  
 トンくくくトかはる調子を幸ひに作者も濡場の巻をかえてこれから口舌と愁歎場を二編にあらはし三冊出来

仕候

風月 春 告 鳥卷之三了



花月春告鳥之序

春もや、景色調ふ月と梅さて黄鳥の音もあらばと文このむなる溪の扉の主人の求めに随ひて愛度ひらく惠方の門爲賞氣の一翻案もまだ花寒き雪中の梅が枝うたふ片言はくちばし黄なる例の筆癖されど年齢老衰て兒女童幼に愛翫せられひみきを繪入中形本の作に連衆の得意をば外さて綴る人情の的へ當りのるの年支干へ向ひし未の極月に冬籠せし一夜の急作繁昌時節は寛々と春告鳥の養ひは摺餌にあらぬ摺本仕立畫工も彫刻も板元の丹誠こゝに顯はれて花の蕾と春告鳥に氷も解て和きし初日の影や看官のおかけて今年も新著の發行を巳午の間から萬よしとは面白き笑顔ぞ貸本問屋衆の喜悅重なる二編三編追々口のかゝるが中に花鳥の相對流行なば偽ならぬ人の爲また爲永の愛敬のもとひととなりて僥倖も得ん和合の人情戀の手毎の快愔が當てくだけし好意な世に泣て嬉しき鶯の音色もやさしき口説の新案嗚呼我ながら人情本はその極意を得たるかな其主要を得たる哉と自讃をしるしてはしがきに備ふ

江戸人情本作者の元祖

狂訓亭主人

西ノ春出版

爲永春水誌

花月春告鳥卷之四

江戸爲永春水著

第七章

節は夾鐘の初旬なりけん廓は殊に閑麗にて跡着の衣裳なほ花やかなり加田多満のおるらん薄雲の座敷には此程少し通路の遠ざかりたる彼鳥雅口舌といふにもあらざれど戀しとおもふ女の情には愚智の出るも憎からず實に男女の眞情は契情の身のうへに在素人の及ばぬ戀の極秘は廓通のよく知る所ならんか折節聞ゆる表座敷の淨るり

へそら定めなき花くもりくらき此身のくり事は戀に心をうばはれて御家の大事と聞た時重きがうへの罪科と

かこち涙に目もうるむ下略

薄雲「誠に骨をおらせなんして漸と来てくれさしツたのに何たる按じられるぬしの身のうへぎますねへくどくもぬしにいふ通りイツそ心が替り切になつてしまつてたとへどんなに氣をもんでもさはひでもおれを呼たがつても其方へは往れないからモウさつぱりとおれが事はあきらめると言て仕まつてくれさツしやればまた私も覺悟の仕様もありますのにぬしはよく私の言事を茶にばかりして居さつしやるから誠にモウじれつたうぎますは鳥雅「ナニ茶にして居るものか實正の事をいふのだアナいつそ其方からさつぱりといふがいゝはなぬしの家内が首尾で見りやアどふも友輩の前へ外聞がわるいから呼申されねへとおめへの方からすツかりといふ方がいゝわなうす「ヲヤもしへそれぢやアぬしは私の心を轉變思つてお出なんすのかへ誠に悔やしう御座升ねへ私に限つて轉變な心ぢやア在ませんヨ實にぬしの家内



の首尾がわるくあらツしやるのなら何程ぬしの様なおふ様な人だつても少許は苦勞にもさつしやるだらうの何だかぬしはそはくしてどふもしんみりとさつしやらねへやうて浮て居さつしやるしまた實正に首尾のわるいのならしんきにわたのしみをこしらへなんす事もおあんすまいかと思ひイす左様して私の方へは是限て來さつしやらねへ了簡であらツしやると私きやア先刻から推量して居ますヨト少し聲をくもらせホツト溜息を吐く「ほんとうに女郎衆ほどはかなひかわいそふなものはありませんはしみんしくいふ詞をなはらずしてあどけなきは殊更に愛すべし鳥自分の口からかはひそふだも可笑 何がかはひそふだらふ一年中男を自由に取扱て思入迷はして心中で阿房がよく來るもんだなどと思つてあやなして居てそれがかはひそふのか ぬしの様な心持になつて見たふざますはさぞ氣樂で宜ませう實正に同じ人に惚ながらも素人ならば先が啞でも實だと思はれるし女郎衆だと死ぬほど惚れても啞だと思つて茶にして居られるしそして素人だト逢たいと思ふときは何様な事をしても合に往て顔を見るばかりでも此方からも往れるから苦勞しながら嬉しからうけれど女郎衆といふものは誠にじれつてへくやしいものさすは 湯が行方といひ今となつてはお民が眞實も捨られず又この薄雲が情はさすがに苦界に沈しだけ愚痴も利口な言まはし何所やらあとなき心の眞實ほにあらはれてかはゆさが身にはあまれどさすがは大人やはらかなる中に少しづつ手づよき言葉「何だか先刻からおめへぐすく言て泣いたり笑たりしておおらにやアさつぱりわけがわからねへ勿論おらも久しく來ねへから來たいとは思つて居たけれどどうも少々他出かねる事が有て出ずに居たが是非用があるから來てくれろといふ文をよこしておおらが讀ても勿體ねへやうな事が書てあつて氣の毒だから來て見れば何だか不調子ことばかり言て泣いたり何かして居ておれが身のうへの苦勞ばなしは承知もしねへて自分の言てへことばかりいつて居ても仕様がねへ歸るといふも野暮氣で居るしまた好漢がつて我慢するの氣の毒だ誰ぞ呼にやつて一口呑直さう其間にやア夜が明るだらうア、ア引トあくびをする

んなましツイ私が愚痴を言出してぬしに腹を立て申て誠にどうも言解がありません酒を上りツしやるなら食の物も澤山ありますし火もよく發てありませうから呑なんすは宜ますがマアうるさくとも堪忍して私の言事をあよつと聞ておくんなましへ今ぬしのいはツしやる通り御家内の首尾のわるいとの事は實正のわけでありませうかエもしへ鳥雅さんへマアお聞なまし私やア實にお前様の咄しを罪な様さすまが啞言だとぼツかり思つて聞て居ましたものヲなせならマアお聞なましヨ私やア只ぬしにおめにかゝりたいどふぞせめて最一度お呼申たいとしみんぬしがなつかしくツて座しきの者にも 氣の毒なくならひ爵をばツかり居たんごすはそしてやうくのことて様子を聞て貰ふと何かぬしやア御内室さんでもたしツた様子だといふ事そりやアモウ私きが何様に思つても氣をもんでもぬしが最かはいゝ人をおかみさんにでもさしツちやアとても來てくれさつしやることはあるめへからと思つて急度最多欲な事を言て後を是非來てくんなましとは言まいからどふぞ 鳥雅さんの貌の見納めをさしておくんなまし一向頼んでモウくやうくの事て來てくれさしツたのも後を招申めへと申て上たからまづ安堵して否な所へ來てくれさしツたらうのにまさか左様もいはツしやらねへから内の首尾がわりいのヤレ私の仕うちがわりいのと私の行とどかねへのを今さら知しつた様に言て仕うちで愛想を盡して彌々是限りにしてしまはつしやる氣であらツしやるのだろふと思ふとしみんぬしはさすまは 鳥よく先刻から息もつかずにせつなアねへかドレ息繼にぶく付てやうの 薄雲はふしぎそふに鳥雅の顔を見て小聲に「おありがたふトとつて 鳥コレサおまへ今おあらが來るのが否なら否だと白地て言てくれろ左様すれば覺悟すると言たが今時下手な作者の小本のやうに鏡臺の引出しから剃刀を出してひねくりまはしたのでも餘りあたらしくもあるめへが覺悟とやとどふするのだ忍びがへしを引ばつすといふわけにもいにくめへ そりやアぬしの言ツしやる通り今時其様ことをするものもありませうめへが しかしあの素人のときならばそりやアもふ悔しいと思ひつめて死んで仕



舞てかわいいそふなことをしたと思はれるのをたのしみにもしませうけれど苦かいの中に居るだけそういふ事も出来いせんからもし是限でぬしに合れないと最客衆にも何も出ねへてお飯も給ず湯へもはいらず髪も結ずに引籠てばかり居てそして内所で呵られたら居つても年季中

昔はおもらん罪ある時節は内所へ居らせて置いとぞ

他の客衆に出ず化粧もしなひで此儘でぬしに別れたら此姿をぬしに縁の形身にとて年季のあけるまでこがれて死だら物怪の幸ひと心を定めてくらし居ますは トめにもつなみだはらへと思ひ入たるころのまことたわいもなき 鳥 不調子事ばかり言て泣て居ることおねへしておれが女房を持たのお楽しみが出来たのと少しもわからね誰が其様な事を言たのだへエ、 うす誰が言てもよふぎますはたとへぬしが情人が出来さしつたとつておかみさんをもたしつたつて私及びもぬへことをやかましく申すといふわけは有ませんからそれはどふても宜ぎますがどふぞ一年に一度でも相かはらずぬしに逢たいとぼつかり心の願ひぎますからどふぞ願ひの叶ふやうにしてくれさつしやればいとお祖師さんや金比羅さんや左様して穴の稻荷さんも何だか憎くなりましたはじれつてへ トいへば鳥雅はわらひ 鳥 おもらんもじれつてへ うす「ア、レサ

涙にぬれし枕の紙を不便と氣のつく鳥雅の才智薄雲の枕を引ばづして其身の枕と取かへてやり言葉敷をいはずして手當に情をふくみすべて女をいたはる鳥雅の艶姿元來したふ薄雲には千萬無量のうれしさなるべしその情態は拙き筆につづることあたはず風流の好漢蘭房の歡會はよろしく看察に任するのみ

さてしばらくしづかなる薄雲の座しきの外へ廊下をばたくかけて来る内所育の新造お袖障子をしづかにすこし明てかわゆらしく小聲 そで「おゆるしなまし うす「アイどなたぎますお袖さんかへ そで「アイ私ぎます参ても宜ぎますかへ うす「ア、よふぎますともお道入なまし そで「アイトかけ入て屏風を引あげ そで「鳥さんはへ うす「アイ寐て

鳥居なませんヨウ そで「アヤびつくりしましたは憎らしい このお袖は内所育新造の中にもいたつてうつくしく殊に發明にてまたあどけなくおもらん中に睦ましくして元氣よくさればとて浮薄なる性ならず實情ふかくかはゆらし

第八章

さてもお袖は鳥雅の枕もとへさしよりて そで「先からしらぬふりをして居なましたかへ私きやア私と思つて美味ものをもつて来てあげ申たに 鳥「オオ左様かそりやありがてへサアくんナト手を出す そで「アレぬしやアずるいヨまた出しもしなひのに 鳥「おめへがなさねへから此方から手を出すのだサアマア見せな うす「お袖さん何んぎますへ そで「アイサアアおまはんにあげ申のはこれ。それから鳥雅さんにあげ申すのはこれぎますヨト兩方の手に持て居る紙につみしものを出す 鳥「ドレ／＼とつて中をあけて見て「こりやアびつくりずつとよしだ。 すつとよしといふことばちかごろもはや りな これちやア茶を吞てへノ うす「ドレぬしのおみせなんトヨ 鳥「おみらのばかり見たがらずとおめへのを見せな うす「私のはこれぎますト出しそふにする そで「アレサ薄雲さんよしなましヨぬしやアずるふぎますから油断がなりません 鳥「ナニ／＼おもらんか。おもらんがずるくつていけねへヨ そで「うそをおつきなましぬしやアどうもうそつつきでずるふぎます此間來さした節あれほど私が極てあげ申たのにやつぱり薄雲さんに苦勞をさせさつしやるから啞言吐ぎますヨ 鳥「ナニ薄雲なにしに苦勞するものかおめへが第一うそつきだアそりやアいゝが貰つたものを給やうか そで「お上なまし今お茶をもつて来て上まうしいすから 鳥「また虚を吐かうと思つて今時分茶があるものか そで「何うそをつきますものか今もつて来て上申しいすヨ極上々お煮花がありますヨ うす「アヤそれちやアぬしやア今夜ア吉兵衛さんぎます子 そで「アイなぜぎますへ うす「それでも今時分お茶があると云なますからサ そで「アノサ毎







有がたうござます何だかとりわけて今朝は別れがわるふございましたヨ トほろりとこぼすひとしづくいとあはれ におもはれたりお袖は是を見ぬふりして そで「アレサなん  
 ござますへ其様におふさぎなますなサア〜おまはんと一床に寐て私が鳥さんになるからはなしながら寐なましヨ  
 うす「左様ござますと嬉しうござます子左様してくんなましヨ そで「ア、サアおまはんも寐なまし うす「私も寐ますはト  
 なかよきどしのひとつよぎはかなき事かせんせいの身 うす「もしへ鳥雅さんへ そで「なんだ うす「アノ私きやアぬしに願ひがあり  
 ならずれしとは何ごとぞこゝろがくがひといふなるべし  
 ますは聞ておくんなますかへ そで「ア、何でもおめへのいふ事は聞てやるヨサア何なりと云たり〜と云ちやア唄女  
 兒の浚て居る春駒とやらのやうだねへ うす「アレサ其様なじやうだんを云なますなしかし鳥雅さんも眞なはなしを  
 して居るときに茶を云なんして私に腹を立てて笑つて居なんす事も有ますから能さますヨ私の願ひを叶へておくんな  
 ましへ そで「ム、おめへの願をかへてやるから云なヨ うす「あのね そで「ア、 うす「アレサア、と云ちやアわるう  
 ござますヨ そで「そんならウン何だ うす「アノウ私きやアぬしのころを誠にしてモウ〜しんじつにしてござますヨ  
 トちからを入れていふお そで「ム、ヨ信實だヨ うす「そして藝者でも娘でも今まで在た情人は不殘切て仕まつてそして内室さ  
 人も持ねへてこのすゑ誰とでも色はこしらへねへて私の自由になつて十年も百年も私の側へばかり置てそして斯して  
 そで「毎日々々寐てばかりゐるのかへそれじやア餘りすけべいござます子ヲホ、うす「ヲホ、うす「また可笑事をお云  
 なますヨ思はずしらず笑ひいたしかし誠に〜苦勞があります そで「アレサ苦勞な事をお云なますとまた鬱情な  
 ますから私きやアモウ苦勞な事の咄しちやア鳥雅さんにはなりませんヨ うす「アそれぢやア堪忍なんしアノ嬉しい事  
 ばかり云ますは そで「ア、左様なましヨ トいふうちにまたつぎのまのせうじを うす「アそれぢやア嬉しうして居なますね湯へ  
 這入て寐なませんかへ最明ましたヨ トいひきへ うす「花鳥さんお有がたうござますが私やア湯は否さますヨ 花「お袖さん  
 はへ そで「アイ私もいやさますは 花「薄雲さんよこれしまゝの移り香をとやらかへ うす「アイサじれつたうござますは  
 花 お袖さんも吉兵衛さんでござますかへヲホ、うす「花鳥さん不眠さますはそしてぬしア實がありますねへ

花「なぞぞぞ そで「それでも薄雲さんは鳥さんの脚つた寐は湯へ這入ねへと云て居るツしやるのにぬしやア昨夜の  
 之さんの癖に 花「ヲホ、うす「それぢやア私湯へはありイすめへ そで「それ見なましぬしも此床へ這入つて寐なましヨ  
 ウ うす「花鳥さん私の座敷にやア今鳥雅さんが出来た所さますヨぬしもこゝへお這入なんしな そで「花鳥さんぬしも  
 鳥雅さんになつて少許助勢てくんなましヨ餘まりのろけなますから私一人ぢやア手がまはらねへんさますヨホ、うす、  
 花ヲホ、うす、うす「ホ、うす、お袖さんでツイ笑うんさますヨ 花「實情にお袖さんは如在ないとやらさますねへ  
 うす「花鳥さんへぬしも能さますヨトわらふ 花「何がへ うす「名がうらやましふさますヨ そで「ヲヤそれぢやア花鳥さ  
 んを鳥雅さんになんしヨ私やア最否さます うす「ヲヤ否なじんすけさますヨ 花「それでも今すけてくれると言しツ  
 たじやアないかへ そで「左様ございましたツけねへホ、うす、ア、可笑ヲヤ花鳥さん昨夜ぬしの座敷へ字之さんが連て來さ  
 しツたのは何さますへ 花「あれさますか婦多川の唄女とやらさますとサ氣障ナ そで「ナニ氣障ぢやアありません誠に  
 好風で宜さますはおまはんは字之さんが連て來さしツたからそれでらはを立しつて氣障だと言ツしやるのだヨ  
 うす「花鳥さんへ和哥町の唄女なら私も氣障さますは トいふうすくものぐくやおぢは鳥雅のふかきいろと そで「ヲヤみんなが左様  
 ござますかへ 花「ぬしはツかり賞て居なますから其様なら唄女にお成なましな そで「ヲヤ否なねへ三味線も彈不得てか  
 へ うす「それでもぬしやア田中のお幾さんとやらに稽古さしツたぢやアないかへ 作者いふ此おいくの事を今いふはいかゞぞや  
はぬことばせうち也穴さがしのでんぼう見 そで「アイサ松の内の前弾に二月と三十日かゝりましたはホ、うす「ヲホ、  
物かならずふあんないとそしることなけれ そで「アイサ松の内の前弾に二月と三十日かゝりましたはホ、うす「ヲホ、  
 ホ 花「ホ、うす「花二人「おかしいお袖さんだねへ トふたりがおなしことをいちど うす「ヲヤ待人チウ〜  
 花 チウ〜 トねづみな そで「私ばツかり待人もなし 花「ヲヤ吉兵衛さんはへ そで「アレ否さますヨ老父めへ 花「アレ  
 マア鳥渡見なましあんな事をお言なますヨ うす「じやうたんぢやアありません吉兵衛さんは實正に能老父さんさます  
 ヨ 花「實正に大事にして上なましヨ そで「ア、それだから昨夜も歸らツしやる時大事にしましたは うす「左様さます